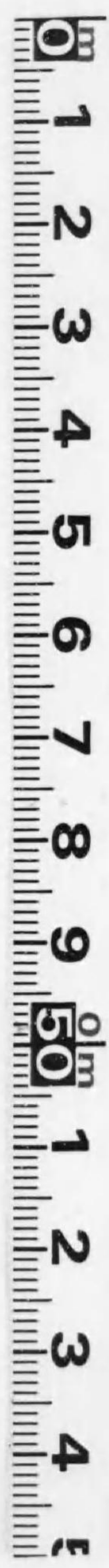


529
16



始





小説の技巧

小説の起源と近代小説の發展

東京 内外書房 發行

大正
13.7.26
内交

529-46

著者序

本書の目的は、文學の最も通俗の形たる、小説の底に横はる原則を明らかにせんとするにある。此の目的を以て、本書は、歴史的に且つ絶えず例證を擧げて、小説作法の技巧の發展を跡づける。現代、往々にして「小説專政時代」を慨歎するものあるを思ふのとき、藝術上有力なる此の小説方面の技巧が、もつと密接に研究されなかつた事は不思議千萬である。小説の原則は、屢々漠然と討議され、且つ小説史又は各個人の作品に於ける評論は澤山ある。然し、是等を通じて採用されたる法則を、盡く集めて、これを一般の使用に適するやう、組織的に陳述されたるものはまだ何處にもない。

若し小説の批評的研究が、科學的に進むべきものとせば、此の種の企の必要なる事は言を俟たぬ。それ故、私は本書に於いて、小説を分解し、小説の各部分を分ち、然る後最古の物語に遡り、是等主要素の各自が、各時代を通じて如何に用ゐられ如何に了解されたかを調査せんと努めた。従つて、本書は、小説史ではないけれど、年代順に小説の展開を知る上に、幾分歴史上の開拓を

した價值がある。

私が見解上やつた一つの重大なる原野は、綜合的研究の原野である。過去二十年間に於いて、大概の専門學校及び大學は、小説に眞面目な考察をやり始めた。文學を教える事は、最早單に詩歌を論じ論文を議する事のみではない。小説は有力な文學上の形として認められてゐる。然るに、小説に近づく何等纏まつた教科書がない。小説家の歴史にせよ作品の歴史にせよ、いづれも此の要求を充たす事が出来ない。吾人が、小説以外の文學を研究するには、歴史に依つてはならない。小説を分解し、小説の要素を吟味し、要素の歴史的發達を跡づけるために、私は敢えて本書を提供する。本書の骨子は、實際に教室の講義に試みたものである。

一般讀者のみに關して云へば、恐らく讀者はその好める小説家の意見を立てるに際し、其の根底を單なる本能的な賞賛や、個人的な享樂の變り易い氣まぐれよりは、何かもつと強固な根底の上に立てん事を往々欲するに相違ないと思ふ。文學上の作品を判斷するのみならず、更らに進んで文學上の作品を完成するために、一つの確固たる基礎となるべきものを知つて置く事の、必要にして價值ある事は、諸方面から此の問題に面したる人、記者として働いた人、教師として努め

た人、専門の「原稿鑑定人」として苦しんだ人達にとりては特に痛切に感ずる事である。

小説作法の技巧に初歩なる人の大多數は、概して、己れの作れる作物の價值を充分會得する事もなく、又己れの作物の技巧上の困難を實際に了解してゐない。彼等は、盲目的混亂狀態の下に、己れの魂を注ぎ出してゐる詩人である。又は、己れの好める作家の不完全な所を一生懸命摸倣してゐる藝術の徒である。それ故に、批評界の我が同胞に對して、少くとも、その必要な事を認めらるゝに至らんと云ふ自信を以て本書を提供する。尤も、本書の結論に對しては、諸君の討議を仰ぐ次第である。本書は、一つは初心者の実験の案内とし、一つは専門家の批評を起さんために企てた。本書に對する批評論議は、如何程辛辣でもよいが、本書の主眼とする目的、即ち小説手法の原則を認めてそれを樹立せんとする事に對してやつて貰はねばならぬ。

一九〇八年、四月、組育にて

著

者

譯者序

本書は Charles F. Horne 氏著 "The Technique of the Novel" (1908) を譯したものである。原著は米國紐育市大學で講義されたものである。小説方面で有益なる著書を出す主なる人には、イエール大學に W.H. Phelps と W.L. Cross との二教授があり、紐育大學に F.H. Stoddard 教授がある。Horne 氏は長く Stoddard 教授に師事した篤學なる學者である。米國の作家 W.D. Howells は氏と年少以來の親友である。其のためか本書に於ては Howells 氏の言が可なり澤山引用してある。

一言斷つて置きたい事は、著者も譯者も共に、技巧を以つて小説の唯一のものと考へていない事である。技巧は小説研究の一方面であつて決して全部ではない。此の事は本書後編第一章中にも一寸書いてある。蓋し小説は絶えず流動してゐるものである。凡そ流動してゐるものに固定的な概念を興へる程、ものゝ真相を謬るものはない。著者が小説の主要素を選定した事を以て、直ちに小説の本體に喰入つたものと速斷してはならぬ。技巧と云ふ立脚地に立ちて一側面から小説の本體に歩を進めて居るに過ぎないのである。廣義な小説論を書くなら必ずや著者は別な見方を

するに異ひない。

原著は取扱つてある範圍が廣く、埃及や希臘から始まつてゐる上に、頗る修辭的な文體であるので譯す上に尠からぬ苦心をした。淺學非才の身が校務の餘暇に譯したものの故、定めし不備不足の點や思はざる誤譯もあることゝ只管恐れてゐる。此の點は切に愛讀者諸者の寛容に待たねばならぬ。幸にして本書改訂の機會が與へらるゝならば、嚴密に校正をしたいと思ふ。活字の都合上、或は又餘りに修辭的なため、省略した箇所もあるが、全體から見るとそれは實に僅少なものである。

譯者は過去一年間校務以外に新舊二重の生活をした。講道館文化會の雜誌で、柄にもなく「世界の大勢」の執筆を引受けたゝめ up-to-date の事に絶えず注意する必要があつた。一方本書譯註の必要上、殆ど好事家的な紀元前數千年の埃及やまたは希臘の事を調べる必要があつた。海外の諸雜誌諸新聞を通じて、臚げながらも動きつゝある世界の大勢を具て、中部歐羅巴の有様や土耳其に於けるアンゴラ政府の事や基督教對回教徒の事など執筆しつゝある間に、一方エルマン氏の獨逸譯の埃及古代文學の註釋などをばつゝ讀んでゐた事を回顧すると愉快と云ふよりは確か

に苦痛である。本書の譯註は可なりの分量になつたが、頁數の都合上大部を省略して單に要點のみに止めて置いた。發音は主として英語の發音に従つた。然し英語化してないもの、または世間的になつてゐるものは、各其國の發音又は習慣によつた。"Don Quixote" の如きは「ドン・クウイクソウト」と英語發音に従ふよりは「ドン・キーホウテ」とする方がよいと思ふ。希臘の人名・地名・書名は希臘語に還元して發音せず凡て英語の發音によつた。従つて語尾が「ε」に終るものは「アス」とせずして「ア」と發音した。例へば Homer はホメロスとせずしてホウマとし Heriodorus はヘリオドロスとせずしてヒーリヲウドウラスとした如きである。但し語尾が「ε」に終るものは英語に於ても「イズ」と發音する例ある故例へば Achilles の如きはアキリーズとした。元來、外國語の發音を假名で示すことは不完全極まること云ふ迄もないから、發音でかれこれ云はれるのは後免を蒙る。

大正十三年六月

尾崎忠男

内容

前編 小説の起源

第一章 話成立の初………一

本書の目的—吾人多くは方則に従ふ事を知らず—小説と戯曲との混同—叙事詩との混同—史的調査の必要—假作物語の起原。

第二章 小説の要素………一五

小説の主要素に關する種々の見解—小説の定義に關する初期の企—近代の定義—主要素の選定—主要素の相互的價値—融通のきく定義—小説は梯子の如きもの。

第三章 埃及に於ける「話」………四三

斷片的寫本—最古の話—最古の話の技巧—技巧的手腕の發展—最も發達した話—最も有名な話—埃及に於ける話の最後の展開。

第四章 希臘の物語………七二

小説の
起源

第五章

希臘の物語の最古の根跡—最古の物語—最古の物語に於ける技巧—希臘物語の最も有名なる作品—後の作品の發展と衰微—古の話の組織に於ける最後の收獲。

中世紀の異種集合體……………九四

物語の最初の展開に關する回顧—近代の物語の起源—「ペーオウルフ」—「ペーオウルフ」に現はれたる技巧—中世紀の物語—「アマデイス・オヴ・ゴール」—小説と物語との分離—中世紀に於ける散文の「短話」—小説に向つて「短話」の接近。

第六章

近代小説……………一三七
過渡期—惡漢物語—惡漢物語の技巧—「ドン・キークホウテ」—後期の物語—「ザ・プリンセス・オヴ・クレヴス」—人間思想の近代の發展—英國の作品が近代小説に接近—「バミラ」—回顧。

後編 近代小説の發展

第一章 話構成の近代研究……………一六九

第二章

以下數章の目的—調査の方法—小説史の概略—流派の分岐—技巧を超越せる領域。

構想……………一八二

構想の大功なる事—リチャドソンは構想の價値を知らず—フィールディングは喜劇の構想を用ゆ—挿話の用ゐ方—十八世紀は内部的構想に向ふ傾向—十八世紀後半の小説の外部的構想—「ジェイン・オーステン」の作物に於ける構想の單純—スコトの影響—バルザクのもとに佛國に於ける構想の發展—英國の小説複雑の度を増す—「統一」退歩の傾向—現代の用ゐ方。

第三章

動機と眞實性……………二三四
眞實性の端緒—批評家の種々の見解—最初の小説家に於ける動機と方法—最初の寫實派に於ける眞實性の發展—眞理に對する四つの異りたる態度—恐怖對眞實性—目的對眞實性—歴史小説に於ける眞實性—眞實性を得るについての實際上の難點。

第四章

性格……………二六八
性格研究の初期の趨勢—「ドン・キークホウテ」—「フィールディング」の描寫方法—性格表

第五章

現の三つの目的—寫實主義の危險—理想主義の危險—寫實主義、理想主義、兩極端からの脱出—自叙傳體小説に於ける性格の表現—チェイン・オーステンの技巧—性格發達に於ける進歩—理想主義者の最後の努力—寫實主義時代—心理小説—現代の結論。

緒

緒……………三二〇

情緒の大切なる事—佛蘭西に於ける感情の研究—情緒崇拜に於けるリチャドソンの創造—英國寫實派の情緒排斥—歐羅巴の情緒の誇張的表現—反動—情緒と眞實性との結合—感情の力。

第六章

背景……………三四二

背景の種々の用途—初期の假作物語には眞の背景を缺く—フィールディンク以前の背景の發生—背景に於ける詩と科學—「人生の繪畫」小説に於ける背景—交感的背景—風俗小説—政治小説及神學小説—地方的色彩の小説—歴史小説—諸大家の作法。

第七章

文體……………三八九

文體の大切なる事—含まれてゐる二つの問題—語法は佛蘭西が優れてゐる—初期英國小

説の文體は生硬なり—英國に於ける文章家—方式の問題—書牘體の價值—戲曲的方法—個人的指導小説—近代の分解的研究—對話の價值—自叙體作家—方法に關する一般的結論。

第四章

結論……………四三三

(一)出來事の小説—(二)技巧の小説—(三)普通の人生の小説—(四)必ず起る事の小説。

索引

前編 小説の起源

第一章 話成立の初

本書の 「小説の技巧」などと云ふと、如何にも矛盾した言葉のやうな感がする。小説が装ひう

目的 する形は非常に數多く、且つ種々交替變化するもの故、その手法には何等永久不變の組

織上の原則がないやうに往々思はれるに相違ない。然しそんな事を思つてゐる間は、何人と雖、善いにせよ惡いにせよ、小説を作り出すに必要缺くべからざる數學的の公式を一纏に述べる事は到底望めない。否恐らく不可能の事である。けれど小説には、その服従すべき一般方則が幾分あるものである。小説家なり彼の作物なりに關する近頃の討議は、殆ど何れも、其等方則中に一般に是認せらるるものがある事を偶然にも示してゐる。尤も其等方則を樹立する原因も論據も説明されてはゐない。概して方則は、其の場合場合に應じて推論されるらしい。多讀該博なる批評家は、從來長く幾分の方則が習慣的に用ゐられてゐることを知り、その理由を解し、その方則を述べる。然し、此の根底となつてゐる技巧を、一纏めに記載して、吾人に示してゐる著書はまだ何處にもない。

本書が提供する所は、小説の此の方面の研究が目下無いが爲め、その欠陥を補はんとするにある。本書は、第一に小説の主要素を攻究選定し、次にその主要素が初期の作物を通過して一作物に綜合され、近代小説を形成するに至る迄に使用され發達して來た跡を尋ね、然るのち、現時に於ける各要素の變化と價值とを了解せんがために、各要素の近頃の用方を通じて歴史的に各要素の跡を調べて見る。本書は少く共、從來吾人の多くが是非やらねばならなかつた所の必要を除きうるかも知れぬ。即ち、各自が自分の力で私と同様な地面を掘り、其の地面から各自がいづれも根氣よく古い事實を發掘して、各自でんで自分の新しい大發見のやうに、珍しくもない化石を再び取り出した事を祝ひたくなる事は除きうるかもしれぬ。

多くの大方則に
従ふ事を知らず

筆と紙以外に、先づ以て一寸した極く僅かな手法の才があれば、如何程無學たるを問はず誰でも小説がかけると云ふ考が一般にある。然し少しく反省して見れば、それ等のものが主要のものにせよ、それだけでは十分でない事を吾人は悟りうるのである。彼等が文學を全然知らぬ野蠻人であると假定し、彼に小説をかけと命じて見よ。又一步讓步して、此の途方にくれた土人に何か題を與へて見よ。何か自分自身の特別な經驗談をかけと頼

んで見よ。滅茶苦茶な支離滅裂な數行の追想以外に果して何を得るだらうか。野蠻人がほんの一寸した機會で小説がかけるだらうか。

吾人は凡て無意識に文學の流を認めてゐる。今日の話は昔しの話の讀者によりて書かれてゐる。どの讀者でも、多少は考へて自分に愉快を與へる所の骨を知つてゐる。かくて、彼は話を作り上げる手法の基礎になる方則を吸收してゐる。

不幸にも、是等の方則は漠然としてゐる。漠然とした考に止まつて、容易に言葉に示す事が出來ない。従つて、方則の存在は等閑視されてゐる。従つて失敗に終る。有望な素人によりて、大出版元に差出す數百の小説原稿中二分の一以上が、本職の原稿調査人によりて、直ちに出版御斷りを喰ひ却下されると云つても過言ではない。蓋し彼等素人の作家は、小説作法の基礎となる方則を知らないからである。此の技巧に迂遠なるが爲めなることを認むるならば、野心滿々たる青年作家も亦、余り野心のない讀者も、直ちに其の存在する方則を明かに知らねばならぬ理由が益々生じてくる。

此の困難は、或る藝術の方則を以て他の藝術の方則とせんとする如き人の杜撰な手輕な企にな

戯曲と小説
との混同

つては、毫末も解決されなかつた。小説と戯曲とは稍々密接な関係がある。小説と叙事詩との關係も亦然り。然し彼等は同一ではない。二十年以前フライターグ(Freytag)(譯者註。獨逸小説家戯曲作者。一八一六—一八九五年。一八九五年に有名な「戯曲技巧の研究」を出してゐる。戯曲研究者必讀書の一つ)が、戯曲の技巧の極めて興味ある研究を世間に發表した際、彼は戯曲の技巧を華文字Aと云ふやうな圖式を書いて、其の形の中に縮めて仕舞ふ事が出来た。(譯者曰。此の圖式はフライターグ氏「戯曲技巧の研究」二章二節。一〇二—一二三頁に出てゐる。後ちに圖解して置く事にする。然し近代の成功せる戯曲は、彼の計畫の項目とは頗る離れたものになつた。恐らく彼の論を立證する論據は、アリストトル(Aristotle)(譯者註。ギリシヤの哲學者なること今更云ふも野暮なり。フライターグの論據はアリストトルの「詩論」に負ふ所が多い)が指摘した「どんな行爲にも、その行爲を誘致する所の命題と、それから出て来る斷案とがある」と云ふ有名な人生の方則に過ぎなかつた。即ち、もう少し明瞭な形で其の觀念を云つて見れば、如何なる瞬間にも其の後ろに無限の過去があり、その前に無限の未來がある。此の意味に於て、二つの無限の線は一點に相會すと云ふのであつて、フライターグ(Freytag)の圖式は、世界が始まつて以來の

あらゆる行爲あらゆる話に適用が出来たらう。此の大小づばな見解に於てのみ、その圖式は小説にも適用されやう。宛らA圖式から圖解されたやうに、A圖式の各項に、分解され説明の出来る有名な作物は古來からあるが、A圖式を全然無視した作物の方がもつと澤山あつた。

叙事詩に於ても亦然り。例へばフィールディング(Fielding)(譯者註。英の小説家戯曲作家。一七〇七—一七五四)の如き初期の作家の中にも、亦今日の批評家の中にも、小説を叙事詩の仕組叙事詩と適用せんと求めたものがゐる。フィールディングの作物の結果を見るに、彼の作物の混同物は故意に道化した叙事詩であつて、亦同時に滑稽な小説であつた。彼は、ことさらに主人公を無意味な世界に彷徨せしめ、最後に到底世に居さうもない此の操人形のやうな男に、突然諧謔的な筆法で、何の苦勞もなく好位置と好運とを與へてゐる。此の作物の如く、連續關係の欠陥が叙事詩の型であつて、その型の中に國家的英雄や國家的興味の題目があつて、そこに最高潮と結末とが結びつき、そこに讀者の愛國心が燃えて、讀者は各孤立した事實を熱心に見詰めてゐる。小説は之に反して、無名の人物を無名の途に旅立たしめ、是等人物の各に對して何か個々の興味を起さねばならぬ。手短かに云へば、小説は戯曲の方則に従ひうると同様に、叙事詩の方則

にも従ひうることは想像も出来るが、それは只第二次の方法としてそう出来るまでで、先づ第一に、小説は小説自身の非常に異つた技巧に従はねばならぬ事を知つてから後の事である。

然らば研究者は、如何にして、此等隠れてはゐるが是非主張すべき方則を發見すべきであらうか。是等諸方則を發見して、是等諸方則の價値に關して、或る程度に一致せしむる方法は如何すべきであらうか。

史的調査 只眞に科學的方法として、尤も千萬と思はしむる唯一の方法は、小説發展の跡をの必要

その起源から尋ぬるにあるらしく思はれる。故に私は本書に於て、此の二十世紀に於て現に行はるる小説の技巧のみならず、古代に於て行はれし原則、藝術の薄暗き曉に初めて考へられ、又考へ違へてゐた事に就いて、小説の技巧を究めて見やうと思ふ。私は開卷數章に於て、古代の半ば抹殺された時期の中から、遠き古人の形もなき作物を求めて、一つづゝ手法の一般觀念を述べ、それがかなり一定の構造に發達し、かくして渾沌の中から近代小説に發達するに到つた事を尋ねやう。

開卷數章を書くには廣い原野を調査する事になる。Novel(小説)と云ふ字を今日では學者達は、

話の特殊な一つの形に限定する傾きがある。然しその要求されてゐる形や品質又其定むる範圍は如何なのか、決して明確に限定されてゐない。然かのみならず、よしんばその領域が短歌や小唄ソネット、カンソネットの領域と同様に等しく正確にきめられたとしても、その區別は要するに只人爲的の區別に過ぎない。小説は發明ではない。小説は發生である。注意深く組立られた機械でなく四方に枝を擴げてゐる樹木である。その樹木に對しては如何なる庭師の剪刀も、その枝を刈込み整へ人巧の方則によりて少さくして生かしてゆく力がない。小説は、假作物語の發達せる種々の形の中の一つに過ぎないので、その形によつて今尙發達しつゝある。吾が近代小説は多くの廣く異つた先祖の子孫である。そして、その血統の分岐せる種々の線の各から、確かにその現在の特色を傳へて來たのである。クロス(Cross)教授は云ふ *『其の起源に於て小説は叙事詩乃至戯曲と同様に古いものである』と。

* (參照 新萬國百科辭典) ("New International Encyclopedia" 一九〇四年版。十四卷。六六〇頁)

假作物語の起源を調ぶる材料は廣漠散亂してゐるけれど、最古の話に於てすら眞の發展の跡、さ

假作物語
の起源

らに高い藝術とさらに完全な形に徐々に進歩する跡を見ることが出来るから、調べ
るのに非常に分析的の興味を感じる。

假作物語は、廣義に於ては、事實から表現を故意に引きはなしたものと定義してよからう。か
ゝるものとしては、假作物語は人間よりもつと古い。人間の誇としてゐる祖先の猿類よりもつと
古い。或る作家が想像を逞うして『世界と同様に古い』と云つたのは無理もない。蓋しその起源
の問題は、寧ろ詩人の想像力に向つての問題となる。歴史家の眞面目な穿鑿以上の問題である。
然し想像力のやうな漠然としたものに頼つてすら、起源を少しく考察すると、説話者の手法が次
第に發達する事を了解する助けとなるだらう。

假作物語は其の最も單純な形、即ち平淡飾りなき虚偽に於ては、人智より遙かに先じたものに
相違ない。猫が無性な幾分退屈さうな風で、半殺にした鼠がひよろ／＼と自分の穴に這込まうと
する時に、不意にその鼠に飛びつきたい許りに、一時その鼠の傍から離れてる際は、最も微妙な
事まで描寫の出来る小説家とも云ふべきである。狐が尾を丸く捲き上げて、速足で歩いてゐるか
と思ふと不意に横道の藪の中に跳び入つて仕舞ふのは、狐には犬も人も兩方共に計略の裏をか

れる程完全な技巧的な虚偽があることを示してゐる。

然し虚偽は、粗雑な直ぐ化の皮の現はれるやうな何等かその起源があつたに相違ないといふこ
とは分る。然るに原始動物は嘘をつかなかつた。海盤車ヒトヂは嘘をつかない。射形類の動物はどれも
嘘をつかない。有關節類の動物すら言行一致の紳士であつて何處／＼までも信頼するに足る。そ
れ故に、如何程遠き古の地質學上の時代に、生物が始めて虚偽をやりだしたかと云ふ問題は、如
何なる時期に到らば人生から虚偽が絶滅して再び眞實を單純に守るやうになるかと云ふ、もつと
遙かに重大な問題と同様に、雲を掴むやうな幻の問題となるのである。——尤も、小説の歴史を
通じて遡つて訊ね行くに従つて、如何なる時期に至らば作物が眞實を取扱ふかを感じるに至るが、
此の時期は必ずしも想像的のものではない。

人間が始め動物より起り、始めて動物を征服したのは、人間が嘘をつく事の才があり、虚偽を巧
にやつた爲めだと云つても恐らくは過言ではあるまい。古い昔は、人間は虚偽を實としてたが、
只貧弱な實であつた。只攻撃防禦の際とか、陥穽に入れたり、急に突撃したり、秘密の隠れ場所
に行く際とかにのみ用ゐたものである。

虚偽が始めて手法、假作物語の手法となり、其時に急に自覺心を喚起し、人類の虚榮心が生じて来た。『俺は何と云ふ強い男だらう』と考へた古の野蠻な原始人は、直ちに吃度自分の力を隣人に見せたいと考へたらう。言語が発達して言葉が云へるやうになつた時、彼は自分の行爲を自慢した。これが話の始まりであつた。その説話者が全然事實ばかり云つたなら、それは歴史であつた。事實以外に話をしたなら、それは假作物語であつた。それは自覺した藝術であつた。

始めは此の藝術は、只誇大的に取扱はれたものだらう。説話者は、話の人物を全部英雄的に描いたものだらう。次に、言語が全然事實から離れるやうに徐々に實現したものだらう。色々の冒險談も、靜かに家に座つて充分考を廻らせば、もつと上手に話す事が出来たらう。始めて假作物語に、此の心地よい改良を考へた所の藝術家は、其の當時に於ては、現代の大偉人と同様に天才であつた。彼の努力は、必しも自分自身の自慢ばかり話すには及ばなかつた。最も熱心な思想家は、さういふ虚榮的な事柄などは幾分省みないものである。恐らくは、此の作家は詩人であつて、風と波との後ろに横はる所の種々の力を夢みて居た。彼と共に、此の世に一つの新しい力が入つて来た。即ち想像力が生れた。

欠

欠

第三章 埃及に於ける「話」

断片的の 原形のまゝで、吾人に傳はつてゐる物語の最古の企は、埃及人の企である。十年目
寫本 位毎に、一つづゝぼろ／＼になつてゐる寫本が、ナイル河畔の古墳墓の裡から發見
されて、吾人に埃及人は假作物語の廣大の文學を有してゐる事を告げてゐる。

不幸にして是等の寫本は、完全な状態をして傳はつてゐるものは滅多にない。初が失はれたり、
又は最後が無かつたり、時には初も最後もない。話は不完全である。その構想、その統一は、絶
對に決定されない。従つて是等寫本から引出さるゝ結論は、動もすれば孤立的・断片的になりやす
い。前以て此の注意をして置いて、是等の寫本を綿密に調べて見やう。

最古の 寫本の中で、如何なる寫本よりも遙かに古い寫本があつて、其の内容は世界に今存在
話 する最古の話と呼んでも、誰一人異議を唱へないものがある。

世界の最古の話！。此話を一般に殆ど知らない事を考へると、幾分詳細に此話の事を述べる事
の必要が生ずる。科學的に云はゞ、此話は『ウエストカル・パピラス』(“Westcar Papyrus”) (譯

者曰。本章の終りに詳註を加へることにする」と云のである。埃及考古學者の見地からして、所謂『死者の書』(“Book of the Dead”)(譯者曰。本章の終りに詳註することにする)は餘蘊なく研究されてゐるが、其れ以外の文書は研究が不十分である。獨逸に於ては、エルマン(Erman)氏の二つ折版二卷の浩瀚な研究を筆頭として、此の寫本に關して種々の著書が出版されてゐる。此の寫本を佛蘭西語に翻譯した人の中では、マースペロウ(Maspero)氏が主なる人であつた。然し英語に於ては、ピートリ(Petrie)氏が一八九五年に出版した註の附いてないざつとした翻譯書がある許りだ。此の寫本そのものは、少く共古さに於て、埃及の第十二王朝の初期に屬す。それ故、いくら新しく見ても、紀元前二七〇〇年頃より以後のものとは思へぬ。然しながら埃及考古學者は、此の話の作られた年代を、その紀元前二七〇〇年とすべきか或はそれより約一三〇〇年以前の第四王朝の前後又は全然第四王朝とすべきかに就いて迷つてゐる。此の寫本には、大ピラミットの建設者第四王朝の王たるキョプス(Cheops)王(譯者註。歴史ではクフ(Kufu)王とかく場合が多々)について書いてある。天文學者はナイル河の大洪水の事を引證して、第四王朝と第十二王朝の中間の時期に此の寫本は出來たものでない」と云ふ。

(参照。アドルフ・ヘルマン(Adolf Erman)氏の『ウエストカル・バイラス』(“Der Märchen des Papyrus Westkar”)物語』伯林版。一八九〇年。第一卷一九頁及び其の以下、及びピートリ(W. F. Petrie)氏『埃及物語』(“Egyptian Tales”)倫敦出版。一八九五年第一卷五八頁以下)

耶蘇紀元前四千年!。そは吾人に、文明の實に幼稚な時代を想起せしめる。此の寫本が紀元前四〇〇〇年と紀元前二七〇〇年との間に出來たとしても、文學を學ぶ徒は此の寫本を紀元前四〇〇年のものと認めるに何の躊躇もしないだらう。ちつと新しい時代、第十二王朝になると、精巧な滑かな而かも時には堂々たる構造の作物に接する。原始的ではあるが丸味のある作物がある。是等の作物は初期の作物とは非常に趣を異にすること、例へばサカリ(Thackeray)(譯者註。英の小説家、諷刺家、批評家、一八一一年一八六三)とかトルストイ(Tolstoi)(譯者註。ロシアの小説家なる事言ふ迄もなし。一八二八—一九一〇)とかの如き作家の磨き上げた作物と、マロリ(Malory)(譯者註。アーサー王物語の著者として有名なる英の作家?—一四七〇?)とかマンデッル(Maundeville)(譯者註。實在の人名かどうか判らぬが英の冒険家。有名なるマンデッル旅行記あり。廣島高師、金子教授の譯ありたりと記憶す)の如き作家の荒削りの物語とを比較するが如き感がする。

此の寫本『ウエストカル・パピラス』(“Westcar Papyrus”)は、宛ら小供が話すやうな話がかいてある。即ち若し吾人が、智識は極めて少ないが世才に長けてゐる小供を想像するならば、道德的に考へる事は全然不可能だが、此の話の悪とするもの及び誇りとするものを充分熟知する事が出来やう。

近頃の學者は、此の奇妙な古い寫本を「魔法使の話」と名づけてゐる。此の寫本に於ては、皇子達が父キーヲプス(Cheops)王(譯者曰。前出)を慰めんと試みてゐるらしい。皇子が一人づゝ進み出て、父キーヲプス王の面前で不思議な話を語る。(譯者曰。私が調べた範圍で見ると皇子は三人。名前は Khafra, Baira, Herutaf)此の唯一貴重な寫本は、一つの話の最後の言葉を以て始まる。次いで皇子の話が完全に二つかゝつてあつて、(譯者曰。Khafra, Baira 一王子のする話のこと)それから別の長い話が始まり(譯者曰。Herutaf 皇子のする話のこと)その話の中央どころに於て此の破損してゐる寫本は破れてゐる。元來是等の話に結びつく何か長い話があつて、是等の話全體に漠然たる統一をつけたものかどうかは、今は到底云ふ事が不可能である。最後の話に進んでくると、急にキーヲプス王や皇子達や皇子を中心に種々の人物が現はれてくる。そは當時の歴史をか

いてあるらしいが、残念な事にはその後が破れてゐる。

技巧上から見れば、是等の話はその部分も混亂してゐる。話の中に亦話を書いてあつて、明確な區別がない。時としては、此の寫本の眞の作家たる筆者が一人稱で話をする。時としては、キーヲプス王が話をする。次に亦皇子達が話をつゞけてゆく。そうかと思ふと、亦話の中に別な人が話をする。餘程の埃及學者でも、自信を以て此の寫本には近づけない。埃及學者は、常に說話者の區別がつくとはいへぬと告白してゐる。疑はしい章句を解釋するに苦んでゐる。

然し此の寫本中の二つの小さな纏つた話(譯者註。皇子 Khafra のする話と皇子 Baira のする話を云ふ)に對しては、幾分自信を以て向ふ事が出来る。此の二つの話・及び我々が判斷し能ふ範圍に於ては他の斷片に於ても亦、常に専ら讀者が不思議な話を聞きたいと云ふ情に訴へて話をしやうとのみしてゐると云ふ事實により、此の寫本は幾分の統一がついてゐる。キーヲプス王が聞きたいと希望してゐるものは、常に「不思議の話」で、其の話をキーヲプス王が傾聴するのである。(譯者曰。次に皇子 Khafra のする「魔法使 Uthamer と蠟製の鰐の話」の梗概にうつる)まづ第一に、先王(譯者註。第三王朝 Nebka 王のこと)がその當時の魔法使(譯者曰。前註中

の(Ubaner)の家へ訪問する話が話しだされる。その王の行列の中に、一名の小姓がゐるが、その小姓に魔法使の妻が戀をしてゐる。かなり大膽な不義密通をしてゐたが、一名の下男のために夫の魔法使に告げられて露顯する。すると、此の魔法使は一匹の小さな鰐を蠟で作る。此の蠟製の鰐は、魔法使の命するまゝに忽ち大きくなりその小姓を呑んで仕舞ふ。魔法使は、此の事を大層得意になつて、此の鰐を見せるために其の後數日間王を自分の家に招待し、王の面前に於て、其の鰐を大きくしたり小さくしたりして、最後に小姓を害もうけずに吐出さして見せる。王は頗る魔法使の魔力を賞嘆する。そして色々の話をなさつた中、特にとり立て、云ふ程でもないが、王は此の鰐にその小姓を養つておくやうに命ぜられる。王はそれから魔法使に澤山の贈物をやる。(譯者曰。以上で Khatuna 皇子のする話が終る)これで話が終つて仕舞ふと、話を聞いてゐるキーヲプス王が出てきて、自分も亦此の事に驚嘆する由を述べ、この魔法使(譯者曰。即ち Ubaner のこと)及び先王(譯者曰。前註中の Nebka 王のこと)に對して御供物をせよと命ずる。

第二の話に於ては、(譯者曰。前註中 Bainta の皇子が父キーヲプス王に話をする話)ある王が(譯者註。キーヲプス王の父、Beneferu 王のこと)倦怠しきつて、其の苦痛を臣下の魔法使(譯者

註。名は Tchatchanankh)に訴へると、その魔法使は宮廷全體湖水で舟遊をするやうにと色々申上る。舟遊が王の容るゝ所となつて、その舟遊のことが描寫してある。王の侍女の一名が、湖水に*指輪を落とす。(*譯者曰。原文 ring となつてゐる。餘りに穿鑿するやうだが私の調べた範圍では金の髮飾のやうだ。理窟から考へても髮飾なら落ちそうに思はれる。)魔法使は、開いてゐる本を閉ぢるやうに樂々と(譯者曰、日本語なら閉ぢてゐる本を開くやうにと云ひたい)水を押別けて指輪をとりもどしてくる。此の指輪が、其後どうなつたかも亦其他の事もこれ以上書いてない。魔法使は大いに面目を施す。例によつて、キーヲプス王は此の話を聞いて驚き、御供物をせよと命じてゐる。

第三の完結してない話(譯者曰。皇子 Hentat のする話のこと。此の話は枝葉に亘つて錯雜してゐる)に於ては、牡牛の頭を切り、再び其の身體に接合し、牡牛が生きかへる話などが書いてある。

勿論以上のやうな事件は、如何なる魔術の話にも現はれるものだらう。然し此の寫本に於ては、是等の話が單に事件ばかりでなくして、話の中心である事が眼目である。事件を中心として事件

を説明し、幻稚な不思議な事を示す理由を與へるやうに記述されてゐるのは、吾人にとりては全く不思議に興味ある一つの世界である。漠然とした附帶的背景が、錯雜不可知の一文化を顯はし、其の文化の中に、連絡のない細々した事が一團となつてゐて、吾人は、罪深い婦人や、糖菓のやうな小姓や、氣取つてゐる侍女達や、飽食暖衣・倦怠しきつてゐる王の姿が浮んでくる。

まづ斯様に不思議な事に訴へて興味を求め、その興味によりて此の話が聽手を引きつけるやうに望んだ作家自身の目的は、亦かなり明白らしい。作者は、讀者を喜ばさんとした以上の事をした。作者は、自分自身の技巧の尊嚴を以て、讀者に印象を與へんと企てた。どの話に於ても魔法使が、その御代に事件の起る王にとつては學者である。此の魔法使が、王によりて非常に名譽づけられる度毎に、王は彼を殆ど自分と同輩のものやうに取扱つた。魔法使は話の中の得意な主人公である。如何なる敵も、彼の魔力に向つては苦もなく仆れる。今日の作家なら、かく容易く超人的尊嚴と力との世界を信するだらうか。加之、是等の話は、眞面目な歴史として話されてゐる。その御代に事件の起つた王の名は、注意して凡て王の尊稱マイトレ通り述べられてゐる。こゝに單一の中に雜つてゐる熟練がある。虚偽と共に智識がある。世界最古の話の價值がある。もし今日の

立派な作家が最古の話を書いたとしても、此れ以上巧に書けるかどうか疑はしい。

自分の讀者に對する訴へを明白にし、自分の教訓を充分に示さんとする此の古い作家の方法に關しては、此の作物は原始的ではあるが研究した手法が無い譯でもない。第二の話の書出しの文は「私はその魔法使の行爲により、偶ま……と云ふやうな事があつた一つの不思議な話に就てお話し申しませう」と明白に云つてゐる。そして各語の終りは、既に述べた如く、キーフブス王が出てきて「朕はその魔法使の智識ある證を見たるが故に」と云つて、魔法使の心を喜ばすやうに供物をせよと命じてゐる。

作者が、かく初めに話をする目的を明白に述べ、思つた通りに結末を充分につけてるに係はらず、作者は其の間に於て、話の効果を達せしむる方法については少しも考を持つてゐない。私が既に話した如き、漸層的な強度は全然ない。事件は宛ら小供の話のやうで、一本調子で時の順序を追ふてゐるまで、それを會得する事が出来ない。作者は、操返しが全然必要もない場所に、單に場所塞ぎとして絶えず自分を操返してゐる。彼は自分の胸に浮んだ事は何んでも、大切な事でも些細な事でも、中心興味不思議な事に向ふが向ふまいが、聽手を喜ばせるやうな事は何でも

述べてゐるらしい。構想は全然存在しない。只漠然とした意味に於て、事件が述べられて進行するのみである。其のくせ、事件は魔術の働を起すものでもなければ亦、その方に誘導するものもなかつた。情緒の刺戟に關しては何等ない。姦通された夫、姦通した妻、又は吞まれたり吐き出された小姓の心の状態については、少しの暗示もない。彼等は全然客觀的方法に取扱れてゐる。單に罅を現はすための、宛ら自動人形のやうな役目をやつてゐるに過ぎない。

それ故、此の作物が六要素に於てどうなつてゐるか、近代の見地に立ちどの位の程度に六要素が用ゐられてゐるかを概括して見る。

最古の話 (一)構想 統一が認められぬ。原因と結果との連続がない。事件の區別がついてゐるの技巧 ない。漸層的の強度がない。

(二)動機 簡單に述べてある。眞實性は全然斥けられてゐる。話の目的は實生活の描寫では殆どない。驚かさん事を求め、不思議な事を話し、説話者の言葉に對し勞せずして得る名譽、間違つた名譽を與へてゐる。

(三)性格描寫 全然考へてゐない。人物は詳細に示されてない。表面的で内面的でない。

(四)情緒の刺戟 全然ない。

(五)背景 全然偶然的。述べてある事は、宛ら話す事も出来ぬ騒音雜話のやうだ。毫末も魔術の頂上、主眼を表はす助となつてゐない。

(六)文體 甚だ粗雜。幾分の手法はある。初めと終りに、極り文句がある。然し作者は、少しも話の一般形式を考へてゐないし亦、形式の困難なることも認めてゐない。

此の寫本『ウエストカル・パイラス』から眼を轉じて、埃及の「話」の次に古い斷片は、ざつと紀元前三一〇〇年頃の第九王朝に屬する。此の作物に於て、讀者は直ちに技巧の大發展、非常な技巧の手 自覺する手法を知るに至る。説話者は、平易に且つ簡單明瞭に、或る百姓(Sekhi)腕の發展 (譯者註。百姓は Khuenanpu と云ふ名なり。此の寫本は英國の博物館と伯林の royal

博物館に保存されてある)が、瞞されて一貴族の召使のために財産を奪はれ、貴族の許に訴出へする話をしてゐる。作者の眞の企ては、訴へてから後の發展にある。此の作物は、所謂「目的話」(“purpose story”)の立派な一つの例である。即ち或る別な觀念を表はすため、單なる媒介物として御丁寧にも話の形をかりて話すのである。此の「百姓の話」の作者は、雄辯の力を賞嘆するため

に書いたもので、自分自身の手法の價值、熟練せる言語の力を示してゐる。

百姓は貴族のもとに行つて、長い非常に華美な辯舌で迫つてゐる。一つの辯舌が終りそれに辯明があると、百姓は直ぐさま又辯舌を始め、それからそれへと辯舌を續けてゆく。是等辯舌をいづれも作者は、精密な情の込もつた筆法で書き、それから急に次の話に移つてゆく。單に見事な筆法を示すための媒介物として作られた是れ以上勢のよい作物は決して無かつた。貴族は此の百姓の辯舌を寫し取らしめ、王が其の辯舌を喜ぶやうに、王の許にその筆記を送つた。貴族も王も、この百姓の詩的な辯舌雄辯をもう少し澤山させるために、故意に判決を與へないでゐる。否彼等は、百姓をしてその雄辯な天才をもつと發揮せしめる刺戟として、亂暴にも百姓を打擲せしめさへする。

此の話の結末は混亂してゐるが、王はこの百姓が忍耐してゐた事に對して、この百姓に澤山の褒美をやつてゐる。埃及の話に於ては、王は主人公に褒美をやるのを例とする。この事以外には此の作物は、全體に不思議な事も珍らしい事も少しも書いてない。

斯様な話に對しては、嚴密な意味に於ける構想が不可能であつた事は明白でなければならぬ。

こゝには、人間的な原因結果の根柢はない。作者はそんな事は絶対に氣にとめてゐない。恐らく彼は、此の事件を實際あつた話だと思つてもらはうことを期待してゐなかつた。此話は、一つの想像、一つの理想である。百姓の苦痛に對する同情、即ち百姓の味方をするやうな口吻が一寸でもあつたなら、同時に作者の技巧的雄辯に對する興味は全部破壊してしまつたらう。然し此作物には、全體を通じて或る統一、これ以外には埃及の話にはどこにもない統一、及び作者が目的に非常に緊張してゐること、唯一つの觀念をしつかりと見つけてゐる事がある。迷信的な事件は少しもない。蓋し作者は、全然事件を欲しなかつた。彼はそんなものは傍に擲棄して、是非共必要であつた事のみを談つた。

性格の研究も亦少しも存してない事は、『魔法使の話』と同様である。實際凡ての埃及の話に於ては、性格描寫は所謂 "plot ridden" (譯者註。構想の免角邪魔をするもの) の意) である。尤も此の作物の場合、性格は "purpose ridden" (譯者註。目的の邪魔をするもの) の意) と呼ぶ方がもつと適當であらう。即ち性格描寫は、希望してゐる局面を描き出すに必要なものではあるが、同時に局面を不可能ならしめ、又は矛盾ならしむる働をする。此の作物には、雄辯な百姓や彼の味方

や彼の敵が、説明もなく又これぞと云ふ體現もなくして、矛盾的な風にならぬやうにし、作者に辯舌の機會が與へられるやうな風にしてある。

文學の徒にとりては、假作物語が、斯くも早く此の發展の舞臺に到達したのを見るのは、甚だ興味ある事である。此の作物には、明かに著しい發達がある。「言語の手法」が認められた。言語の力が證明され賞嘆されてゐる。此の事は、假作物語がとらねばならぬ自然の段階であつた。人間自らと同様に、物語も自覺的にならねばなかつた。物語は、自然と物語自身を研究し、それ自身的美感と、その缺點その弱點と、その力とを學べる事を考へねばならなかつた。

然し吾人は、とても世に居さうもない斯んな百姓に、飾り過ぎた隱喩的な言葉を言はしめて收まり返へつてゐる此の作者を嘲るに先だち、我が英文學上の『ユーフウィーズ(“Euphuus”)物語』(譯者註。英國のジョン・リリ(John Lily)(一五五四—一六〇六)の作。教訓的な物語でユーフウィーズと云ふ才氣優秀なアテネ生れの男の事を書いてある。此男を中心にしてエリザベス時代の風俗が巧にかいてある。一種奇妙な文體で名高い。)や、又は諸外國のものや、又は流石に鈍感なドンキョーホウテ(譯者註。エスパーニアの詩人、小説家、Cervantesの“Don Quixote”中の主人公。誇大

妄想な滑稽な男。)の頭も變になるやうな戀の紛紜や、吸々として婦女子の愛を乞ふてゐる話のかつてある種々の騎士物語(Chivalric romances)を回想して見るがよ。

“The reasonableness of the unreason with which you overcome my reasoning, so manifestly weakens my reason, that I reasonably lament your beauty,”

理由のない事を理由のあるやうにして、それであなたは私の道理に打勝たうとなさるか、明らかに私の理性がぶくなつて、私があなただの美しいのを悲むのも無理ではない。譯者曰。原書には引用符のみあつて出所が書いてないが、“Euphuus”から引用したものであるまいか。譯文では妙味が到底出ないから原文を出しておく。見らるゝ通り Reason と云ふ字を馬鹿に澤山に使つて文のあやをなしてゐる。随分馬鹿げた文字のしやれた。の音を保存して拙譯してみた。

凡ての藝術は、一度は此のやうな浮薄な外觀を装ふやうな行路を過ぎなくてはならぬ事は明らかな事で、又實に當然の事らしい。繪畫でも同様ではなかつたか。して詩歌は如何?。して建築は如何?。彼等凡ては既に此の行路を通過して仕舞つてゐるか?。假作物語は他の藝術と同様に、

形もなき自然にまるで不注意の事から目覺め、自然こそ藝術だと悟る時に初めて小説自らの手段を究め、小説自らの小手先細工をやらぬやうになるのだ。

若し吾人が、第十九王朝頃のすつと後の埃及の「話」まで一千年以上を速かに通過すると、吾人最も發展した話

は此の時期の作物は二三の點に於て、初期の作物より遙かに進歩してゐる事を知る。是等の作物は遙かに話が長いし、遙かに澤山の事を含むでゐて、種々の絲を織込んでゐる。この點に於て少く共彼等は段々と小説に近づく。然し他の二三點に於ては、彼等の手法は殆ど靜止してゐるらしい。埃及人は既に早や進歩的な國民でなくなつて仕舞つた。

恐らく纏つた話として、吾々近代的の考へに近づいてゐる話は「セトナ(Thetis)皇子の話」である。此の作物は、一番長い最も精巧な且つ多くの點に於て、今世に傳はつてゐる埃及の斷篇中最も大切なものである。此の話に於て、セトナ皇子(Petite教授の綴りに従へば *Deia*)が自分の祖先の一人の墓に現はれる。魔術書を得んためにやつて來たらしい。蓋し此の作物の書き出しは、死んだ王の皇后の亡靈が、セトナ皇子にその魔術書を置いておけと忠告してゐる所から始まつてゐる。亡靈は皇子に自分の全生涯の話や、夫がその魔術書を手に入れた苦心談や、又その魔術書

のために自分も夫も兩人共に死ぬに至つた顛末を語る。けれどセトナ皇子は、依然として魔術書を持去る事に成功する。亡王は、次いで此のセトナ皇子を良に掛けるために一名の婦人を送る。この婦人はセトナ皇子を絶え間なく困難と不幸な目にあはす。此の事は幾分長く續く。皇子は遂に、自分は力に於てこの婦人に劣れる事を悟り、魔術書を返却する。亡王はそこで、自分の亡妻の死骸を自分の墓に移せよとセトナ皇子に命ずる。その死骸は王と別の町に埋葬されてあつたのだ。かなりの苦心ののち皇子は、此の使命を果たしそして話は終つて居る。

此の話の取扱方は、やはり初期の作物に於けると同様に、全然客觀的である。話の場面中の多くの場所には、當然情緒的筆法があるだらうと期待する人もあらうが、實は感情情緒の度合は此上もなく大膽な風に書いてあるに過ぎない。「かくてセトナ皇子は驚きて逃げ去りぬ」の如きは一例である。然し吾人は、全體として此の話は、幾分、構想・統一に關する、吾人の近代的の考に近づいてゐる。恐らく此の考は、此の「セトナ皇子の語」が、構想の統一に失敗してゐる丁度場所を指摘すれば一層明瞭にならう。其の場所と云ふのは、セトナ皇子の話なのか亡王の話なのか區別がつかぬ點である。若しそれが亡王の話だとすれば、(實はそう思ふのが眞に近いやうだが)セト

ナ皇子と皇子を欺く所の例の魔女との間にある挿話の長たらしい連鎖は省略しなければならぬ。其の挿話は、亡王に關して如何の價値もない。却つて其の挿話あるが爲めに、吾々は亡君の事を忘れて仕舞ふやうになる。若し之に反して、此の挿話がセトナ皇子についての話であるなら、皇后の亡靈の長い話は全部短くすべきである。其の上挿話の最後は具合が變だ。何となれば、皇后の身の上の事を云ふのであつてセトナ皇子の身の上の事ではない。或は又若し此の挿話を魔術書の話とするなら、セトナ皇子が魔術書をもとの場處に返却する際に終るべきである。興味は讀者にとつてそれからそれへと次の題目に移つていつてお互にどしどし消えてゆく。題目を讀んで深く感ずる事は部分部分の中に聯絡がまるで無い事だ。

何故此の埃及の作家は是等の點を認めずして自分の話をあれやこれやのものにしたか。此れに對する答は、作家が是等の事物又は人物中のどれかを特に談つてゐるのでなかつたためと云つて充分明白らしい。人間的情緒や人間生活は彼の題目でなかつた。彼は彼の先輩と同様に、「不思議な事」に就いて談つてゐた。そして彼が讀者を引付けんと望んだのは、事柄の不思議と云ふ事によつてであつた。事柄が甲の人に起らうが乙の人に起らうが頓着しなかつた。こんな事では人物

の性格はまるで死んで仕舞い、消失して仕舞い、誰れとでも置き換へられただらう。そして進行するのは話ばかりだ。——即ち現に是れから次に述べる「バタの話」に生じてゐるやうな、一偶然な出來事のみになつて仕舞ふ。

「バタ(Bata)の話」(譯者註。時に「兄弟の話」と云ふ事もある。兄の名は Anpu 弟の名が Bata)は、埃及の假作物語中、如何なる物語よりも一般に廣く知られてゐる。そして恐らく一般世間の立脚最も有名 地からは、此の話は一番よく知つておく價値がある。「魔法使の話」と同様に此の話な 話 は、天にも地にもたつた一つしか寫本が存在してゐない。然しこの寫本は「魔法使の話」よりもつと久しく知られてゐた。此の寫本は、一八五七年に英國博物館に購買された。そして其時以來種々の有名な埃及學者がその * 象形文字の翻譯書を吾々に提供してゐる。

* 譯者曰。原文に hieroglyphics と出るので餘義なく象形文字と譯したが、是れは讀者を誤らすもので、正しくは hieratic(僧侶文字)と書かねばならぬ。此の寫本は象形文字で書してなす。元來埃及の古代文字には三種ある。hieroglyphic(象形文字) hieratic(僧侶文字) demotic(民用文字)これである。hieroglyphic は文字が事物の繪畫であつて hieratic は

文字の形は早く書けるやうに出来るだけ簡単に作られて居て一見梵字に似てゐる。Domotic は文字が全然その繪畫の形を失ひ單に記號となつてゐる。埃及考古學者は、此の三種の文字を明確に區別して居るが、文學者は往々三種を一纏に、即ち埃及古代文字全體を hieroglyphic と云ふ。従つて hieroglyphic と云ふ字に捕はれて、象形文字即ち繪畫で書いてあると誤解してはいけない。此の事は甚だ注意すべ事だから一言しておく。

此の話の書出しは、この他の話の何れとも著しく相違してゐる。バタは百姓である。彼の農民生活の簡単な描寫は、恰も作者が農民生活を眞實喜んだかのやうに描かれてゐる。即ち最初の章句の調子は田園詩的である。畑に於けるバタの勞働が描かれてゐる。外出歸宅のさまや、バタが牛馬を愛養してゐる事が書いてある。牛馬はバタに一番よい牧場のある場所を告げる。そしてバタは其處へ彼等を連れてゆく。それ故彼等は肥へて強くなる。

牛馬に關する此の事については、吾々に非常に興味ある點がある。象形文字(譯者註。前註の如く廣義に於ける埃及古代文字)をその概念的意味を表はす所の近代語に翻譯することは、かなり容易な事になつてゐる。然し吾人はその象形文字が、古の埃及人の心に傳へた所の概念をその通り

正確に決定する事は屢々失望せねばならぬ。グリフィス(Griffith)氏(譯者註。英國の埃及學者)の翻譯には、その牛馬がバタに話をしたとなつてゐる。マースペロウ(Maspero)氏(譯者註。佛蘭西埃及學者)は若し牛馬が舉動で「バタに了解せしめるやうにした」と云ふなら埃及人の意味に近づいてくると考へてゐる。(參照。"Les Contes Populaires de L' Egypte Ancienne" E 里出版、一八八二年、八頁以下)前者の考は、吾々を不思議な事を語る古い魔術の世界に入れる。後者は自分が養つてゐる牛馬に對しバタが眞の同情と理解とを有してゐると云ふ遙かに近代的な微妙な描寫を吾々に思はしめる。此話の書出しの此の簡単な田園詩的の事に關しては、あとで一寸書くことにする。

バタは自分の長兄(譯者註。前註の如く Anpu)と一所に住む。此話は聖書にある Joseph と Poliphar の妻との話(譯者註。舊約聖書創世紀三十九章を見よ。Joseph が埃及にて Pharaoh の役人 Poliphar に買はれて仕へてゐた時、Polihar の妻は Joseph の美貌に迷ひて口説いたが、Joseph は應じない。そのため Joseph は種々の厄難に遭ふ話である。……此の「バタの話」に於ても同様で、Anpu の妻が Bata を口説いたが應じないので妻はその腹いせに反對に Bata から口説かれたと夫 Anpu に

告げてゐる)によく似てゐる。長兄は、自分の妻にバタか挑みたりと、あらぬ疑をかけ、それを復讐せんために牛小屋の戸の後ろに身に隠して、牛馬を入れる時にバタを殺さんと待ちかまへてゐる。然し牛馬はバタに話をする。即ち牛小屋に入っている時に、どの牛馬も後ろに敵がゐる事をバタに告げてゆく。こゝに於て亦バタの心に牛馬が引續き言を云ふので、其の意味を段々と悟つてくるのであるが、此點に關してもマースペロウ氏の翻譯は、牛馬は正確に言葉で云つたのでなくして其の動作行爲によつて「バタに悟らしめた」のだとなつてゐるのである。

バタは逃走する。長兄が追跡する。さてそこで話は其の單純な書出しの筋が破れて、例の如く、不思議な話に移つてゆく。鰐の澤山ゐる一つの河が、兄弟の間に口を開く。不貞の妻は殺される。バタは隱者となる。神々はバタに精靈の を作つてやる。バタは妻の煽動によりて殺される。妻は王の寵姫となる。バタは魔法の力でその時亦話の中に出てくる長兄によりて蘇生する。バタは種々自分の姿を變へるがその度毎に以前の妻(譯者註。王の寵姫となつた妻のこと)が看破つて仕舞ふ。遂に彼女はバタを殺す。男子が彼女に生れる。その男の子は長じて王となる。此王は自らバタの再化身なりと稱す。始めは彼の妻であり今は彼の母たる先王の寵姫は、此王のために裁判

される(is "Judged")。裁判の結果如何なる罪の判決を下したかは讀者の判断に任かす。尤も此の屢々出て来る裁判される("Judged")と云ふ象徴的な字は死刑と云ふ意味を含んでゐるらしい。吾々一般の人情としてもつと軽い刑と判断せんことを望む。

何を吾人は此の話から討議すべきか。技巧上二三の新らしいものが現はれてゐるらしい。恐らく此の話には、道徳上の目的がある。即ち、迫害を受けても罪なき人は遂にはその加害者に勝ちを制してゐる。けれど大體として、バタは罪なくして迫害をうける人としては、餘りに力があり過ぎる。即ち彼は寧ろ神のやうである。彼に對しては如何なる敵の策略も用をなさぬ。彼は未來を豫知する。魔力によりて彼は容易く勝利者となつてゐる。

さて亦此の話の初めの部分に於て、吾人は恐らく作者が不思議な事を渴望してゐたよりは何かしら別に人間自然の事に訴へんと企てたのを見る。作者は一時眞の詩想に觸れ、讀者をして生活と勞働との、最も單純な形の單純な美を享けしめんとしたらしい。然し作者の眞の目的は、主人公の最後の偉大さと對照せしめんとしたのみであつたらしい所の、此の書出しの章句の中に、以上のやうな感じを注ぐ事は、我々が近代的に想像を廻らすに過ぎないのかも知れぬ。

是等後期の作物を概観して見るに、後期の作物には最早、初期の作家が平易簡單さを以て作物の底に『魔法使を尊敬せよ』とか『雄辯の力を見よ』とか云ふやうな効果を示さんとした如きも

埃及に於ける話
の最後の展開

のは持つてゐない。實に吾人は、後期の作家は讀者を喜ばしめんと云ふ明かな職業柄の努力以外果して何の努力をしたかを疑ふ。若し後期の作家が、何

かもつと深い考があつたとしても、彼等の時代に關する吾人の智識が貧弱なるため、吾人はそれを發見する事が出来ぬ。

構想の統一即ち構想が意味する所の明白な概念はどうかと求めて見ると、これ亦吾人は失望するのである。後期の作物中には、雄辯な百姓の話の粗雑な一本調子にすら比すべきものがない。埃及の話は、長いものになると異様なものになる。切れぎれになる。彼等は町々で矛盾して時としては殆ど支離滅裂である。

讀者に訴ふる方法は、最古の話の方法と同様になつてゐる。讀者に提供するものは依然として「不思議な事」である。尤も超自然の事を書いてあるのは「蠟裂の罅の話」のやうな簡單なものでなく、もつと錯雜な、もつと微細神秘的ではあるが。加之、不思議な事が筆の自由に任かせ、想

像の樂なのにかまかせ、作物中に餘りに澤山書き過ぎてある。作物によりては亦、不思議な事を感じ動さすために、別な異つた手法を創案したものもある。人々が知らぬ他國に旅行する。従つて他國から必しも魔術的でない、單に自分の隣人の見聞せぬやうな事の話をする。かくて話は始めて漠然ながら眞實性に向つて歩を進める。マスウーズ(Matthews)教授(譯者曰。一八九六年に出した彼の“Aspects of Fiction, and other ventures in criticism.”は是非一讀しておく價值がある)が、『話』の最も始めの展開であると云つてゐる所に近づいてくるらしい——即ち『不可能な事』(impossible)から單に『有りそうもな事』(improbable)へと(参照 Branbader Matthews, “The Historical Novel.” 一九〇一年。一〇二頁)

それ故今一度概括して見ると、最も最後の埃及の話に於ては次の如くである。

(一)構想 幾分認められてゐる。微かに色々の絲を織込んでゐる。然し彼等は破れてゐる。人物が急に棄てられてゐる。事件の統一なく進行なし。

(二)動機 初期の話に於けるよりは錯雜。初めて漠然と眞實性に歩を進めんとしてゐるらしい。話は依然として、尤と思はしめんよりは驚かさんと求めてゐる。然し多分作者は、微かに以前よ

りは高い眞實を狙ふ。教へんとする企を始めた。

(三) 性格描寫 絶無。

(四) 情緒の刺戟 話によりては微かに暗示されてゐる。「バタの話」の初めの部分は稍効果的に描かれてゐるが後の部分には全然忘れられてゐる。

(五) 背景 多分意識的に「バタの話」の初めの部分には書かれてゐる。其他にはなし。

(六) 文體 常に客觀的。然し非戲曲的。入念的。屢々詩的。然し文句表現の形式に著るしく囚はれて窮屈。

假作物語が趣味に適せる土地とせるは、埃及に於てのみであつたと想像してはならぬ。戯曲並びに詩歌すらも、人種によりては文學上の展開に於て看過されてゐたものである。然し假作物語は、頗る一般的の根をもつてゐるもので、既に述べた如く、人間に頗る必要な要素であり、文化の興敗に必要であつたものである。如何なる人種でも、その想像力と物語とがないやうな哀れな人種はあるものでない。支那人は早くも假作物語を知つた。實に支那の凡ての書籍中一番最初の且つ最も神聖なる易經(Yi King)即ち八卦(Book of changes)は【孔

夫子(Confucius)にへそれを充分了解する事が出来なかつた程古いもので、其著者は實在の人であつたかどうか判らぬが、伏羲氏(Fu Xi)と云ふ人で、其の年代は疑はしいが紀元前二八五二年と推定されてゐる】恐らく此の性質に屬するものである。意識的な物語の根跡は亦、印度種族(Hindus)の神聖なる書籍中最古のもの、中にも見出される。——勝ち誇れる戦争の歌や、乙女が戀人に口説かれる話などかいてある。是等は紀元前一五〇〇年頃から始まる。又さらに後の印度の書籍「Mahabharata」と「Ramayana」の二大叙事詩でも、尙耶蘇紀元より遙かに古いもので、不充分ながら最も漠然とした型の假作物語を装ふてゐるものである。「Ramayana」に於ては、主人公は戦に一隊の猿軍をつれてゆく。その中の一匹の猿は火焰の尾をもつてゐて、魔法的速力で敵國に走り行き到る所を火災にする。人々が軍隊を斬り殺す。婦人が永久の若さと美しさを天から授かる。魔王が澁面すると波や風が靜まる。これが恐らく此の古い作物中に現はれてゐる型の最も重なるものである。作物を通じて流れてゐる二重の意味の暗示がある。假作物語であると同時に諷喻(allegory)である。動物寓話に於ても亦然り。如何なる國に寓話を認むべきか。又は寓話の作家は * Pilpai か * Bidpai (* 譯者註。兩者共

古代印度の寓話作家、哲學者ならんと云ふ)か Aesop(譯者註。紀元前六世紀のギリシヤの寓話作家)か、Lokman(譯者註。古のアラビアの寓話作家ならんと想像されてゐる)か、或は又もつと古い無名の作家であるか等は耶蘇紀元前の假作物話の重大な部分である。印度種族は寓話を manu 法典(譯者註。印度の神祇志也)から自然に發生したものと認めてゐる。然し此の問題はあまり範圍が廣くなるから本書では論議せぬ。

【譯者註】

(1)ウエストカル・パピラス(“Westcar Papyrus”)。Papyrus 普通「紙草」と譯されてゐる。古代埃及の沼地や澤に茂生し特に洪水後のナイル河畔に澤山あつた。今日の蘆に似た草である。今日ではスーダン地方(Sudan)にほかないとの事だ。スーダン地方とはナイル河上流の河谷の事だ。この草を古代埃及人は紙の代用にしたのである。紙に作る方法の事は、話が岐路に互るから省略するが、兎に角此の草から作つた紙に字を書いたのだ。従つて Papyrus は「紙草」の意味から轉じて紙草で作つた紙の意味になる。此の紙を連接して巻物にして保存したものである。Westcar は人名である。獨逸婦人の

名だ。元來古代埃及の寫本は、其の所有者の名前とか發見した場所の地名とか又は其の内容とかを前につけて「何々 Papyrus」と云つてゐる。従つて “Westcar papyrus”と云ふのは Westcar 婦人所有の寫本の意味である。此の寫本は一八三九年に、獨逸の有名な埃及考古學者 Richard Lepsius 氏に Westcar 婦人は賣却して仕舞つた。今日では伯林の Royal Museum に保存してある。此の寫本を初めて現代語に翻譯したのは獨逸の埃及考古學者 Erman 氏である。

(2)『死者の書』(“Book of the Dead”)獨逸語では Tottenbuch となつてゐる。ピラミッドの廊下や壁や又は王の石棺の内部や外部にかいてある宗教上の文句を集めたもので、一言に云つたなら「古代埃及の聖典」と云つてよい。近頃我國でも、此れの翻譯が出たやうだから、今は詳しく云ふを避けておく。原書で研究せんとする人には、一八八六年伯林出版の Naville, E 氏著 “Das Aegyptische Tottenbuch” がよい。尙進んで古代埃及の宗教を調べやうと思ふ人には一八九七年出版の Alfred Wiedemann 氏の “Religion of the ancient Egyptians” を讀むがよい。

第四章 希臘の物語

希臘の物語の
最古の根跡

其の發達が纏て小説になつてゆく數種の線ラインの中では、希臘の物語は著しい發達を示してゐる。然し他の線に比較すれば、其の發達は寧ろ驚くべき程微々たるものである。希臘人は、頗る驚くべき發達を藝術上に示し、特に其の形が最も小説に接近してゐる戯曲に於いては、非常に完全に恐らくは本能的に、技巧上の統一及び其他の諸點を會得し居りしに拘はらず、彼等希臘の作家は、己の分析的の力を小説に應用する事が出来なかつた。

物語は希臘の諸藝術中一番發達が遅かつた。純古典時期の希臘人の心は、物語を全然つまらぬものとして斥けたらしく思はれる。物語は聞手を惹つけるには、其の姉妹とも見るべき詩歌や雄辯術の藝術に比較すれば腰元のやうに思はれねばならなかつたが故に、ホウマ(Homer)に見る如く歴史の装をなし、又ヒーシアド(Hesiod)(譯者註。紀元前八世紀頃の希臘の詩人)に見る如く宗教の装をとつた。單に其の價值を話としてのみ示さうとする話や、又特に散文の話は、後期古典時期に至るまでは全然現はれてゐない。然も其時すら其等の話は、希臘の其他の藝術が光輝あるに比較するなら、殆ど幼兒の姿で世に出たのである。

『ミレスアン物語』(Milesian Tales)(譯者註。非常に放埒な不品行にして滑稽な話と云ふ事だが今は世に傳はつてゐない)ですら、非常に短い且つ非常に下卑たつまらぬものであつたらしく、紀元前五十四年より以前に存在してゐたものとは思はれない。尤も、是等の話の形成されたのは、恐らく其れより二世紀以前に始まつたものらしい。バビロン(Babylon)のニムロド(Nimrod)(譯者註。舊約聖書十章九節及びミルトンの「失樂園」XII. 21を見よ)に關する物語の斷編が近頃發見された。耶蘇紀元の初めの作である。然し此の作物を、有力な結論を下す土臺として採用するには不十分である。私には此の作物は、寧ろ希臘のものにあらずして東方のものらしく思はれる。埃及の話が希臘語に翻譯されて傳はつたものゝ如く思ふ。

現代に於いて、幾分自信を以て單に「話」として表はされてゐる希臘の最初の話と云はれるものは、アントニウス・ダイアゼニス(Antonius Diogenes)(譯者註。紀元前一五〇年頃の人)の『デアス』(Deas)とデルシリウス(Dinias and Deryllus)である。此の作物とてもフウーシ阿斯(Photius)(譯者註。有名なるビザンチウムの高僧。？——八九一)の『ミリオリ

最古の物語

73

ブリアン(Mylthobilion)の中に、其の作物の梗概があつて知らるゝに過ぎない。作者ダイマゼニスは、此の作物の材料を古い作家から集めたものと云つてゐる。實に此の作物は、確かに其の後ろに長い祖先がある。其の祖先を、如何に好奇心を出して研究し尋ねて見ても無効で、出来ない相談だ。微かに希臘の一物語が、希臘文學の凋落の中から偶然にも現はれてゐる事を瞥見するに過ぎない。

此の希臘文學の後期に於いてすら、物語は依然として幼稚のものであつたらしい。『ダイニアスとデルシリーズ』の中には、埃及の話に於いて發達したと殆ど同程度の構想と眞實性とを見る事が出来る。此の作物は、天涯未知の地を越へて、太陽と月の世界に旅行すると云ふ魔法的冒險奇談である。此の作物も、やはり興味の中心を驚異に訴へる。自然と云ふ嚴格な方則によつて定められてゐる範圍に、何等科學的な考をまだ持つてゐない讀者を相手として、全然不可能の事を描いてゐる。

戀愛は、セトナ皇子(譯者曰、前章「埃及の話」中にあり)及び彼を誘惑する女の事件を除いては、埃及に於いては不思議な事を書くに吸々たるあまり、全然從屬的の事であつたが、此の作物

に於いては、戀愛はもつと大切なものになつてゐる。尤もまだ些々たる事柄ではあるが。戀愛は、稍不自然ではあるが、二人の主要人物を結び付けるやうに用ゐられてゐる。然し主人公ダイニアスは、女主人公デルシリースとは全然別に離れて、度々旅行に出かけて冒險を行つた。旅行中に於いて彼は彼女に逢ふが、また彼女を残して自分ひとり旅立つてゆく。それにも拘らず、凡ての希臘の物語に於いては、話は二人から成立してゐる。一人だけではない。埃及人は男を取扱つたが、希臘人は男と女とを取扱ふ。此の事は單なる技巧上の進歩以上のものであつて、人生と云ふものゝ見方に一變化を示してゐる。少く共、情緒の刺戟が漠然として始まつて來た事を證據立てゝゐる。故に吾人は、希臘の話と物語と呼ぶを正當とする。之に反して、埃及の話は單に話であつた。話が取扱はれる仕組はたいして上手とは云へぬが、埃及に於けるよりは遙かに上手になつた。埃及の話に於いては、魔法使が單に自分自身の考のみ話した。其の話の眞實を、魔法使に保證する事も決してなく、又如何にして魔法使だけが描かれてある事件を知るやうになつたかの説明もしてなかつた。然し希臘の作家は、魔法使の如き特殊な位置を占めてゐない。彼は自分が話す權利を立證せねばならぬ。此の最初の作物に於いては、ダイニアスは自分が絶え間なく幾度も旅

行した話を一友人に書き送るやうに想像されてゐる。その友人が、その記録をデイニアスの墓に入れておく。その墓で其の記録が歴山大王の部下によりて発見され、數代を経て作者たるアントニウスに傳はつた。要するに希臘の作家達は、一人稱で話をする事を大層便利である事と悟つた。然しながら彼等は、作者自ら作中の主人公となつて一人稱にて直ぐさま讀者に話すと云ふ風な、簡單明瞭な近代的の巧な手法は知らなかつた。或はそんな事を是認しなかつた。希臘人は其の代りに、念入りの構造を用ゐた。人物が又次の人物へと、順々に作物中に單に古の事を傳へてゆく蓄音器のやうな風に紹介され、主人公の英雄的行爲の話を、口を開いて傾聴し、順々に次の人物の爲めに其の話を記録してゐるのである。

構想の統一に關しては、何等見るべきものなく、亦事件を配列する方法も、作者には少しも判つて居なかつたらしい。嚴重に時の順序を追ふてゆくと云ふ、原始的な方法のみであつた。これが爲めに、話の錯綜してゐる連鎖を、殆ど絶望的に混亂させて仕舞ふ。デイニアスは、自分の家から出發する所から始めて、デルシリーズに逢ふまでの自分の冒険談を續ける。次に彼の話は、デルシリーズが自分の種々の旅行について話してくれた所の話に逸れてゆく。それから其の話の

最中に、デルシリーズがかねて兄にめぐり逢つた話に移り、其の兄がまた自分の話をデルシリーズに物語る話に移つてゆく。そして次に、其の話の中に亦別の話が入つてくる。かくて物語は第四の段階、又はそれ以上に達して錯雜の度を高めてゆく。いづれの話も終つて仕舞ふと、次にさらに長たらしい話が亦始まる。そして最後に話は元に戻へつて、少しも話疲れてゐないデイニアスが、亦自分の冒険談即ち讀者は早や忘れて仕舞つてゐる冒険談の續きを始めだし、デルシリーズを家に残しおき大いに助かつたと云ふやうな調子で、自分一人さらに旅行してゆく話をつゞける。然し作者は、全然女主人公を忘れてゐない。何となれば話の結末には、マイル(Myle)町にあるデルシリーズの家に訪ねて行つて結婚をしてゐるからである。

此の作物は既に述べし如く、フウーシアスの著書中に其の摘要がある許りなのだから、原作物に含んでゐる情緒の眞の分量を正確に評價する事は、吾人には到底出來ないのである。然し情緒は非常に微弱なものであるらしい。デルシリーズとその兄は、兩親を殺したとあらぬ噂を立てられて、非常に恐怖してゐる。此の恐怖も、兩人が我家を逃走し知らぬ旅路に彷徨させるための口實としてのみ設けられたらしい。彼等の悲嘆は少しも書いてない。デイニアスはデルシリーズを

愛してはゐるが、確かにデルシリーズ以上遙かに冒険旅行を好んでゐる。性格描寫に關しては何等絶對にない。デイニアスはどんな男でもよい。デルシリーズはどんな女でもよい。彼等の心は、世の荒波の經驗によりては少しも變化されないらしい。話は完結してゐるものゝ、若し作者も讀者も疲勞を感じなかつたならば、同じ心持でまた旅行談を續けていつた事だらう。それ故、希臘物語の此の最古の作物を概括すれば、幾分次の如きものとなるだらう。

最古の物語に於ける技巧

(一)構想 種々の冒険談を結びつける太い線として微かに認められる。然し原因と結果とを示すには、何等重大でもなく何等の價値も有してゐない。

(二)動機 興味に訴へんとする望のほか、明かに示されてゐるものは少しもない。眞實性は全然斥けられてゐる。死者が再び生きかへる。魔術が到る所に現はれてゐる。讀者は依然として「不思議な話」を傾聽して居たらしい。眞實でない。ウォレン(Warren)教授は「婦女子は家庭に止まらざるべからず」と云ふ教訓を恐らく教へたものであると云ふ。もし然りとすれば、此の教訓は甚だ納得出來がたく告げられてゐる。

(三)性格描寫 絶無。

(四)情緒の刺戟 或は存在してゐたかも知れぬが、(希臘の抒情詩及び戯曲に通曉する希臘人なら、情緒を見逃す事は出来なかつたらう)著しく現はれてゐない。且つ確かに蓄積性を帯びてゐない。

(五)背景 フウーシアスの摘要には少しもないが、原作物は随分注意したらしい。後の希臘の物語は、實に背景に注意してゐる。此の作物も他國に關する旅人の話がある。

(六)文體 摘要中に於てすら、數へきれぬ程美化されてゐるが、其の一般配置法は、作物の複雑な構文と錯雜せる組織中に於ては甚だ粗雑である。

『趣向の中央に突入せよ。即ちまづ第一に詩歌や戯曲に於いてやつてゐる技巧を小説にも採用せよ』と云ふホレス(Horace)(譯者註。羅馬の抒情詩人、諷刺作者。紀元前六五—八)の宣言を採用した希臘の物語作家中最初の人は、あのヒーリウドラス(Heliodorus)と云ふ人であつたらしく、

希臘の物語中最

も有名なる作物

此人はセサリ(Thessaly)州(譯者註。古希臘の東北部の一區)のトライス(Trice)市の有名な僧正であつたとかなかつたと云はれてゐる。兎に角、此のヒーリウドラスと云ふ人が『セアジニーズとカリクリア』(“Theagenes and Charicles”)と云ふ作物

を出してゐるが、現存せる希臘の物語中一番よい且つ最も有名な作物である。此の作物は其の趣向の中に、突然に戯曲的になつてゐる所がある。……飽きる程長たらしい此の物語の中に於いては、まあ突然と云つてもよいだらう。主人公セアジニーズは、自分の愛人カリクリアの兩腕に抱かれて負傷して横はつてゐる。彼等は丁度難船の夢目に遭つたのであつて、兩人の周圍には一團の盜賊の死骸が、荒涼たる海岸に横はつてゐる。是等盜賊達はカリクリアを奪ひ取らんとして、仲間喧嘩を起し相互に殺し合つて數名生残つたのを、セアジニーズがどうやらこゝろやら斬殺して仕舞つたのであつた。セアジニーズは、此の戦に於いて負傷したのであつた。今や新たに一團の盜賊が、此の助くる人もなき戀人同志を搬び去らんとして現はれてくる。こゝまでは、殆ど作者自身の人稱で話されてゐるが、直ぐにそれから後にお定りな構造が紹介される。カラシリス(Calabria)と云ふ、戀人兩人に昔からの友人である老人が、難船から免かれてゐた。十分に暇を得んために、彼も亦海賊船から逃げ出す。彼は、それから氣永にも、偶々途であつた男に自分の一生涯の歴史や、セアジニーズとカリクリアとの身上話を生立から話して聞かせる。色々他の話が亂入する。初期の作物と殆ど同様に、錯雜と支離滅裂な挿話が澤山ある。

然し話は錯雜してゐるに拘らず、作者ヒーリヲウドウラスは話に聯絡を與へやうと云ふ考は幾分あつた。『デイニアスとデルシリーズ』中のデイニアスは、全然あてども無い冒險旅行に出かけたものだが、此の作物のセアジニーズとカリクリアとは、あてどもなく流浪しない。離ればなれになつても、二人は絶へずお互にめぐり逢はんと努めてゐる。遂に二人は、凡ての迫害を逃れて幸福にも結婚して話は終つてゐる。加之、作者ヒーリヲウドウラスは、構想とは區別のある密謀(Intrigue)(譯者曰、既に第二章中にも説明あり)の例を一番早く示した人である。

既に述べた事があるやうに、「密謀」によりて話の中に或る秘密が企てられて、讀者に判らないやうにしない迄も、作物中の或る人物には注意深く包み隠してある。「密謀」は讀み行くに従つて、讀者をして其れを判斷するに頭を悩まさしむると云ふ目的と、最後に其の解決を與へて大團圓にしようとする目的との、二重目的を普通持つてゐる。第二の目的のみが「セアジニーズとカリクリア」には企てられてゐる。即ち、女主人公に就ての生れ素性が隠してある。然し其の生れ素性は、讀者には打明けて書いてある。最後に素性が打明けらるゝや、其の突然の打明けによりて、戀人同志は死ななくてもよいやうになるのである。尤も死ななくてもよくなる事は、少しも驚く

べき事とは思はれない。蓋し物語を読む希臘人は、卷末に到らぬ餘程以前から、作中の主人公や女主人公は取返しのかねぬ死ぬなんて云ふ事は決してない事を確信するやうに養成されたに異ひない。『密謀』の用ひ方は素人的であつたらう。

話と話を單に連結してゆくだけなら、ヒーリヲウドウラスより以前の作家ジアンブリカス(Jamblichus)にも見出さるゝのである、然し話を全部自分で案出し、單に不思議な冒険談ばかり連続する事をせずして、自分の頭に浮んでくる人物を描き出した作家を求むるならば此のヒーリヲウドウラスである。

かく、統一の觀念が生じて來たと共に、亦作物の情緒方面にて強味が増して來た。ヒーリヲウドウラスは實に、驚異によりてと同様に愛と憐みとによりて、讀者を喜ばしめん事を望んだ。彼は最早不思議な事ばかり聞きたがる讀者を相手にしなかつた。彼は眼と同様に心に訴へた。彼の讀者は、依然として驚くかも知れぬが、亦讀者は心に感銘をうけた。戀愛は卑しいにせよ、高尚にせよ、性格の動機を司配するものとして作られてゐる。戀愛が他人を動かし復讐せしめ感謝を左右してゐる。

背景は念入りに織込まれてゐる。その技巧上の目的と從屬的の位置とを認めて用ゐられてゐる場合すらある。此の事に關聯して、『セアジニーズとカリクリア』の第三卷に、始めて作者の技巧に就いての自覺せる意見の文句が現はれてゐるが、作者自身の技巧を巧妙に分析してゐる最初のものであつて、其の技巧は近代小説の好んでやる所のものである。

『議式が終つて行列がすつかり通過して仕舞ふと……』とカラシリス(Calastiris)は話を續けた。

『然かし』とキネマン(Chenon)は差出口して、

『お父さま。議式は終つていません。お父さまは行列の光景を私に話して下さらない。私は行列の事が聞きたくなくて見たくてたまりません。お父さまは私を、俗に世間で云ふ、御馳走の翌日やつて來た御客様のやうに取扱つていらつしやる。その話をしてから、また話を續けてもいゝじやないの?』

カラシリスは云つた。

『俺はお前の聞きたがつてゐる行列の事など、俺の話の眼目に何の關係もまるでない事を細々と話をして話を遅くしたくなかつたのだ。だがお前は、行列の光景を知りたいに違ひないか』

ら……俺はお前に、その話を簡単に上げて上げる。そして俺は、行列の次に起る結果のために喜んでもつと話をしてあげよう」(参照、ローランド・スミス氏翻譯「希臘物語」ポーン社發行 一八五五年、六二頁)

以上の會話のあとに、行列についての數行の描寫がある。——これが即ち背景である。

主人公と女主人公との描寫も亦あつて、構想を妨げ、且つ性格は全然現はれてゐないものゝ、少く共巧妙に描かれてゐる。話好きなカラシリスの話を書いてゐる一名の男は云ふ。

『あなたが生々と話をなさるので私は眼のあたり其の人達を見てゐるやうに思ひます』

然し此の男が眼のあたり見る氣がすると云つたものは、ほんの外面的表面的な輪廓に過ぎなかつた。

ヒーリヲウドウラスによりて達せられた技巧上のほんの一寸した發達は、彼以後の作家達によりて十分に目的を遂げられてゐる。彼等は全然魔法を用ゐるのをやめる。讀者は最早學者となつ後の作物の てる。即ち、少く共非常に疑深い批評家になつてゐる。讀者は只自然の出來事發展と衰微 のみを信するに到つてゐる。但し依然として、ありそうもない事(improbable)の

範圍を出でざりしが故に、有り得べき事(Possibility)を多く取扱ふ近代人の心になるまでには非常な巨離がある。

『ディニアスとデルシリーズ』の作家は、女主人公が一時死なん事を望み、何の躊躇もなく彼女を殺して、再び魔力によりて蘇生せしめた。埃及人も亦『死』を單なる一事件として取扱ひ、終局のものとして取扱つてゐなかつた。アキリーズ・テイシアス(Achilles Tatius)はヒーリヲウドウラス以後の作家中の最も有名なる人であるが、取扱にくひ一女性をそう容易く處分する事をようしない。彼は女主人公を、外觀上だけ殺した。彼女の身體は敵のために主人公の面前で腹を立ち割られる。然しこんな恐ろしい目に逢はされる事を豫期して、彼女は秘かに友達によりて血の入れである膀胱を腹に入れて置いたのであつて、其の膀胱を敵が間違へて彼女の身體と思つて立ち割るのである。彼女はそれから搬びさられる。此の小喜劇の本體を、悲嘆に暮れてゐる主人公に説明してやらぬ程不親切な人は一人もない。後ちに此の作物中に於いて、不思議な程顔も姿も女主人公に似てゐる一少女が、女主人公の衣服を着て出てくるが、此度は實際に殺されて仕舞ふ。氣の毒にも、アキリーズ・テイシアスは、こんな工夫をするために如何に智腦を絞り、又以前の作家

の樂な手法を美やましがり、こんな几帳面な時代に生れて來た自分の不運を悲しんだ事だらう。

かくの如く眞實性に、人間生活と又單なる人間の話に、漠然と近づき來りて、次第に驚異と冒險談は弱まり、それに代るに讀者に訴ふる基礎として『戀愛』が生じて來た。作物を情緒的に強め統一する事によりて、着々と構想の統一と云ふ考に我々は近づいて來る。此の時までに我々は紀元五世紀に到達し、ロンガス(Longus)が戀愛を比較的短い物語の一主要素としてゐるを見る。

ロンガス(本名かどうか知らぬが假りに本名として)は田園詩^{パストラル}を創作した人らしい。彼の『ダフイニスとクロウイの戀物語』(Loves of Daphnis and Chloe)(譯者曰、Chloe と云ふ名は田園詩にはよく出てくる名で、mistress や sweetheart に用ゐられる。後には negress と spaniel に用ゐられた。發音は Kloui)は、一裝飾としての外驚異をかゝらず、冒險談すら書かず、單に羊を飼つてゐる二人の若い男女に、本能的の愛を目醒し、それを満足せしむる事を作の興味とするやうに意を注いでゐる。

* 譯者註、『ダフイニスとクロウイの戀物語』は田園詩物語の最も古いものとして非常に有名であるから一應述べて置きたい。此の作物は一五五九年に始めて、アーミーオウ(Amyot)氏

が佛譯し、次いで各國語に翻譯され、歐羅巴文學には非常な影響を及ぼしたもので、佛蘭西の小説家 Saint-Pierre(一七三七—一八一四)の『Paul et Virginie』(一七八八年)は此作物の直接の感化をうけてゐる。筋は極めて簡單である。Leobos と云ふ島に、Lamon と云ふ羊飼が居たが、或る日のこと、一匹の羊が美しい男の赤兒に乳を飲ませてゐるのを見つけた。赤兒は兩親に棄てられたものらしい。Lamon は此の赤兒を我家に連れ來り、ダフイニスと名づけて養育した。其の翌年、近所の Dryas と云ふ人が、ニンフ(Nymph)(山林澤地に棲み又は上位の神に仕へる半神半人の少女)の住んでゐる小洞の中で、牝羊が一人の女の赤兒を養つてゐるのを見つけ、其の赤兒を我家につれ來り、クロウイと名づけて養育した。

ダフイニスとクロウイとは生長して各々羊飼となり、互に無邪氣な愛情で交際してゐた。然し成長するに従つて、二人の間には段々と愛が目醒めて來た。或る冬の事、二人は互に餘義なく別れねばならぬやうになり、始めてダフイニスはクロウイに愛情を打明けて結婚を申込んだ。ダフイニスは結婚申込の由を自分の養親に話すと、養親は葡萄收穫期が來たら結婚させやうと答へた。葡萄收穫期になつて、養親 Lamon の主人がやつてきて、ダフイニスの

身上話を聞き、始めて自分の實子なることを知り、引きとつて養ふ事にした。一方クロウイも、富豪 Leasian と云ふ人がかねてニンフに委託してゐた實子なる事が判る。かくてダフイニスとクロウイとは、各實際の両親の手許にて養はるゝに到り、二人は盛大なる結婚式をあげて幸福な月日を送る。

凡そ人は小馬に乗るに際し、乗つても小馬を乗り殺さないやうに乗れないものだらうか。ロングスは小説の要素の一つ、即ち感情・情緒的刺戟を既に發見した。彼は世人が「驚異」に對する熱の冷めたのに乗じて、「驚異」に置き換ふるに「戀愛」を中心興味とした。直ちに彼は、此の新しい乗馬(譯者曰、「戀愛」を小馬に譬へてゐる)を急立てゝ、大袈裟にして、恐らく何心なく茶化して仕舞つて、哀れや小馬は仆れて仕舞つた。(譯者曰「ダフイニスとクロウイの戀物語」中の戀愛の取扱方を罵れる也) ロングス以後の希臘の物語は、希臘の凡ての事物が衰へたと同様に、漸次凋落して遂に消滅し、創意なく力なく、唯一の護符たる戀愛もまるで萎縮し、戀愛は全然邪道に墜ち曲解さるゝに至つた。「ヒスミアスとヒスミーネ」(Hymias and Hymene)は、恐らく是等凋落期の作物中最も有名なものであるが、殆ど無用な事に情緒的な筆を弄してゐる。女主人公は凡て

の戀愛をやり、あらゆる危険を冒す。之に反して主人公は、愛を拒絶し彼女を冷淡に嘲弄し、且つ眠むつてゐる。——かく迄に刺戟されては拒絶も出来まいと思はれる位置に置かれても眠むつてゐる。衰頹せる藝術を固守してゐる、もぢり詩文作者の頭を疑はざるを得ない。世がこんな作物を要求した事、戀愛とはつまりこんなやうなものだと信じてゐるやうな冷淡な笑、及び最後に寐てゐる事に對して、抗議を申込まざるを得ない。この笑とこの眠りとを以つて、希臘の物語は人生と云ふ舞臺から適當に色褪めていつた。

さて後期の希臘の物語を瞥見するに際し、私は主として近代小説と異つてゐる諸點に注意して古の話の組織に於 來た。即ち作物に統一の缺けてゐる事、つまり眞の構想のないことや、只々ける最後の收穫 讀者を喜ばしめて作者の財布を肥やそうとする外、これと云ふ何の決定的の

動機のないことや、並びに、初めて漠然と眞實性を求めんと努め、絶対にない事(impossible)からありそうもない事(improbable)へと移つて來た事などを注意して來た。

若し構想・動機、並びに構想・動機が實在の方に向つて進み始めた要求の、段々増加して來た事から離れて、眼を問題となるべき他の點に轉するならば、吾人は「情緒」が一時、話の中で最も

大切な要點となつたのを見る。背景の價值も認められてゐた。而して背景は屢々、恐らくは餘りに擴げ過ぎてゐる場合すらある。『ヒスミアスとヒスミーネ』中に於いて作者は、語の音が語の意味より大切だと思つてゐるかの如く、妥當不妥當に拘らず、言語を弄んでゐる。「文體」は勿論、文學の一つの形から他の形に容易く移る所の一要素である。雄辯家として詩人として、又は歴史家として既に高名ある人は、筆を小説に轉ずるの時其の雄辯を失ふらしくなかつた。

アキリーズ・テイシアス否な特にカリトン(Charrion)(譯者註、希臘の雄辯家、修辭學者)の『カリアスとカリロウイ』(Chaereas and Callirhoe)(譯者曰、Callirhoeの發音は Kae'iroui(:))中の數章の如きは、繪畫的な言語の喜で泡立ち溢れてゐる。詭辯學派の主題——例へば「海上の嵐」の如き——は、その徒が眞面目に且つ眞に學者ぶつた誇を以つて論ぜられてゐる。カリトンは、職業上のあらゆる呼吸を知つて、多くの近代人に修辭學上に於ける教課を與へる事が出來たのであつた。

性格描寫は、亦容易く小説以外にも適用出來る所の技巧の一點であつて、他の文學の形に現はし得るものである。従つて吾人は、希臘人が、これ以上に小説發展の可能性を進ませ得なかつた。

事を寧ろ失望するのである。希臘の物語の主人公や女主人公は、何れも皆何人とも代用され得るだらう。彼等は型があつて個性がない。ラニアア(Lanier)教授は「個性」は希臘文學時代以來漠然と發達してゐた事を斷言するに際し、ユリビデイズ(Euripides)(譯者註、希臘の悲劇作家、紀元前四八〇—四〇六)ですら、自己が何處までも孤立せる人格の一體であることを考へずして、同一人類の一人種の一員として考へてゐた事を指摘して居るが、恐らくは以上私が云つた事と同じ事を暗示して居るのである。

かく物語作家は、作中の主人公をいづれも似たものとし、又作中の老人をいづれも似たものとしてゐる。希臘の作物が埃及の作物より進歩してゐた唯一の點は、少く共人物が自分自身及び自分の屬してゐる型と一致してゐる事であつた。人物の發展即ち話の中に書いてある其の人物に生じてくる變化に關しては、依然として全然考へられてゐなかつた。

さてぼんやりと潤歩し進んで行くと、亦忘るゝ事も亦早いからして、次に技巧上の概括をして置くが、次のやうになるだらう。

(一)構想 あつさり存在してゐる。種々の絲を織込んで、原因結果の連鎖が初めと終りにある。

然し構想は統一を缺き、屢々關係もない事柄が澤山あつて妨害してゐる。構想は、頂點に達する戯曲的の性質を何等帯びてゐない。構想は依然として、分離してゐる奇談の連鎖によりて動く。

(二)動機 區々町々。眞實性は道化芝居に近いやうな苦心によりて主張されてゐる。驚かさんとし、且つ尤と思はしめんとする作者の二重目的は、自家撞着となつてゐる。教訓を與へる力なし、作物によりては、主として音楽上の言葉により、又は繪畫的に、作者の美的な喜を強めて表はさんとしてゐるらしいものもある。

(三)性格描寫 まだ用ゐられない。描寫は外面的である。然し性格は可なり前後照應してゐる。

(四)情緒の刺戟 頗る著しく、屢々非常な効果が企てられてゐる。然しロンガス以外の凡ての作家は、情緒は勃發的に用ゐられて居て、再三再四高められたり低められたりしてゐる。ロンガスは實際情緒の漸層的の効果を求めてゐるらしく、一時段々と情緒を強めていつたが、頂點から傍道に足を入れて、情緒の最後の破裂をやる事が出来なかつた。

(五)背景 寧ろ書き過ぎてゐて、埃及の作物とは好對照。背景に多くの筆を費したが故に、希臘の物語は埃及の話より遙かに長いものになつてゐる。然らざれば埃及の話と同様のものになる。

(六)文體 充分に研究されてゐる。自覺ありて精巧を極む。

羅馬人の物語の産出は、量に於いて少なく且つ質に於いて希臘の物語と同じ故、特別に羅馬人の物語を述べることは本書に於いては不必要と思はる。物語の技巧上、著しく興味ある羅馬人唯一の作物は、ペトロニウス・アービター(PetroniusArbiter)の『アンコルピウス』(Encolpius)である。頗る興味あることは、此の作物は近代の西班牙の惡漢物語(picaresque tales)(譯者曰、picaresqueは西班牙語にて惡漢の義、通例一人稱にて或る冒險的人物の一生の浮沈を述べたる物語を指す)と同類である。然し『アンコルピウス』は、一天才が獨立的に不意に出した産物である。此の作物は先人もなく又模倣者も出来なかつた。十六世紀の西班牙の惡漢物語の作家達が、此の作物を読みそれを模倣した事を確かむるにあらざれば、彼の作物は小説の發展上著しい影響は認めない。

第五章 中世紀の異種聚合體 (Conglomerates)

假作物語の最初の
展開に關する回顧

凋落せる希臘の物語の文學よりは、更らに新しい且つもつと生々した文學
に近づくに先だち、假作物語が古代に於て通過したらしい段階を簡單に再
言して置かう。假作物語は人間の進歩と調和して進んで來たのであつた。人類の幼稚時代と共に
始まりて、假作物語は一步一步と人間の發展の跡を追ふて來たのであつたが、詩歌や倫理的の作
物が指導者の抱負を代表せるに反して、假作物語は丁度一步遅く先驅者の跡を追ふて來る誠
に智的な二次的な心を持つてゐる、あの群集のやうな位置を正確に示してゐるのであつた。假作
物語は、人間に自覺心が目醒めて、故意に自己を誇張するに到つた時に始めて一藝術として現は
れたに異ひない。假作物語の最初の大階段は、全然想像的な話を單なる擴大した話に代用したも
のであつた。次にその藝術自らがひとりにて一藝術として自己を認むるに到り、自己の研究や經
験や、並びに職工が自分の道具を取扱ふ喜びのやうなものや、單に言語のために言語を用ゐると
云ふ誇などが生じて來た。

「興味」に對しては假作物語は、最初は單に驚異に訴へたものだが、漸次驚異を擴張して遂には
念入り過ぎるまでにさへなり、次いで驚異の到底ありうべからざる事が驚異自らの失墜を招き、
かくて餘義なく日常實際の事を書くやうな風になつた。此の抑壓のもとに、驚異は興味に對する
ものとしては十分のものでなくなつて、段々と「戀愛」が話の原動機として驚異と置換られた。粗
雑な性格の研究が亦現はれ始めた。即ち讀者や一般世人は分析者になりつゝあつた。

希臘の物語はこゝまで吾々を搬ぶ事が出来る。蓋しこゝまでは確かに希臘の假作物語は發展し
た。次の階段は道德的觀念が生れてくる事であつて、作者側に道德的の責任觀念が生じて、作物
中にもつと眞面目な目的を導くやうになる。して此の段階は、道德心の衰微せる時期には、明か
に不可能な事であつた。

若し假作物語發展の原因及び變化の此點が、幾分推理的と思はるゝならば、現代小説の發端と
それを比較對照する時に、確かに眞理なる事を益々固く信するに至らう。

近代物語の
起源

此の點には、吾人は新しい人種に全然新しい發展を認むるが、その新しい發展も
本質的には同じ線を辿つてゐるのである。希臘の物語は、技巧上にはその眞に注

目すべき諸發展を示したに拘らず、あらゆる希臘の事物と同様に既に消失して仕舞つた。そして十六世紀の末期に至りて、漸やく物語の斷片が夢のやうな脩道院の人も忘れた片隅から復活してきて、近代語に翻譯された。成程ヒリヲウドラス(Heiodorus)やカリト(XChariton)やロンガス(Longus)(譯者曰皆前出)は立派な作物を残し、假作物語に感化を及ぼし教ゆる所があつた。然しながら十六世紀末期までには、近代小説の創造は殆ど完成してゐた。近代小説は希臘以外の種々の源泉から既に生長してゐた。希臘の物語の翻譯は、新しい發展を助けるよりは寧ろ阻害しはしなかつたかと人が疑ふのは尤も千萬の事である。

近代の假作物語は、人民から擴まつて來たもので、學者から傳はつたものでない。中世紀の、古物的無趣味なひからびた歴史家達は、假作物語の粗雑な起源に邂逅し、それを輕蔑して通過した。現代に於てすら尙、假作的な話に屈伏する學者は減多にない。かくて小説は、その適當なる泉を無學者の中に、即ち無學な小供らしいチュートン族(Teutons)(譯者曰、Teutons は廣義にとれば獨逸人也。元來は西歴四世紀に Elbe 河口近くに住ひしゼルマン族の事で今日英國の天下を取つてゐる Anglo-Saxons はこの Teutons に屬してゐる Anglo-Saxons は五世紀の中葉にブリトン

島(今日の England)に侵入したのである)の中に見出したものであつて、チュートン族の勇武力は如何にも樂々と衰弱してゐる古人を打敗かした。

チュートン族の初期の話は韻文でのみ傳はつて居るのである。近頃、小説を論議するもの多きが、参考に供してゐる所のダンロブ(Dunlop)氏(譯者註、スコットランドの歴史家、一七八五—一八四二)の、あの重々しく偉大な小説の歴史(譯者註、ダンロブが一八一四年に出した三卷の小説史を指す)に於て、著者ダンロブ氏は散文と韻文とに境界線を設け、その境界線を嚴重に守りて散文の物語のみを論じてゐる。これは、その目的が主として夥しく澤山の書籍の記述的目錄である所の著書に對しては尤も千萬と思はれる。ダンロブ氏は、勞力の手數を幾分省いてるに過ぎないのであつて、それは丁度、もし彼がその表題がアルファベット順になつてゐる索引の前半中で始まる作物だけに範圍を止めて置きさへすれば、彼は勞力の手數を省き得たかも知れぬと同様である。

* 譯者註、ダンロブ氏の小説史は、希臘の初期から十九世紀の初期迄の物語の發展を調べたものである。此種の研究は、英國では此書が最初のものである。一八四五年に Liebrecht(リー

プレヒト)によりて獨逸語に譯されてゐる。尤も彼が希臘物語の勃興に關する意見や、『ジェスタ・ロウマロウラム』(これに關しては後に詳註することにする)を通俗な話の發生と結びつけた點などに關しては、學者間に反對があるやうだが、物語を研究せんとする人は是非一讀し置くべき著書である。東方の物語や近代の物語の選定はなつてない。騎士物語と伊太利の小説家に關する記述は巧に書いてある。飾のない明確な力ある文體である)

然し散文を除去する如きかゝる境界線は、私の本書の如き性質の著書には到底出来ない事である。希臘の物語を調べるに際しては、ホウマ(Homer)を考究する事は不必要であつた。蓋し希臘の叙事詩は、常に其の超人的な眺め、その國家的の廣さを保つてゐて、従つて全然別箇の一藝術であつた。これに反して中世紀の世界に於ては、韻文の話と散文の話とは全然其の精神に於て同種であつて、屢々外部の装も共通であつた。唯文藝復興時期の間に、始めて韻文の話が古風の型の影響のもとに、美術的に且つ形式的に散文から離れて發達し、自ら自覺的な別箇の技巧を樹立するのである。従つて本書の論議に對して、中世紀の韻文の「話」を除外するならば、全然勝手

な區別となつて、わざ／＼兩眼を閉ぢて、何日かは知らねばならぬ澤山の事を見逃して仕舞ふやうになる。

チュートン族の物語中現存せる最古の作物は *ベールオウルフ(Beowulf)である。

* 譯者註、三千百八十四行と云ふ英國最古の長篇叙事詩である。佛國の『ローランの歌』(Chanson de Roland)よりも獨逸の『ニーベルングの歌』(Nibelungenlied)よりもさらに古いもので、英國の誇りとしてゐるものだ。英國の博物館に唯一の寫本がある。原形はチュートン族がブリトン即ち今のイングランドに移住前にあつたものだが、今現存せる寫本は八世紀か九世紀の Northumbria(古イギリスの王國)の詩人の脩正したものらしく基督教的になつてゐる箇所が少なくない。勇士ベールオウルフが三個の怪物を退治する顛末を歌つてある。大概の文學史に其梗概が載つてゐるから云ふ迄もなからう。

『ベールオウルフ』 此の有名な叙事詩の起源は、本書に於て今論ずる限りでない。『ベールオウルフ』(Beowulf) は、その批評家が考へてゐるやうに、半は自然神話で半は歴史で、多くの斷

片を一つに集めたものであつたかも知れぬ。然しその最後の形に於て、此の詩を野蠻なサクソン

人(Saxons)の勇士達に歌つて聞かせた時には、此の詩は既に一つの直截的な話となつて、聞手によりては人間生活の記録として認められてあつたのだ。實際歴史上に起つたものとして、どの位の程度の信用を、聞手が此詩に與へたかは今は云ふ事が出来ない。恐らくは聞手が、此詩を偽なきものとして信じて居た事は、丁度一般うすばんやりの讀者が、今日の吾々の歴史を信じて居ると同様であつた。恐らくは聞手は、此詩に對しては希臘人が『イリアド』(Iliad)に對して與へたやうな承認と威嚴とは決して與へなかつた。『ペーオウルフ』は純粹の歴史でなかつた事は明かである。人間の作り上げたもの、支離滅裂なものを人間手腕の努力によりて承知してくつつけ合したものである。實に凡ての中世紀初期の假作物語を取扱ふに際しては、異種聚合物(Composite)と云ふ語が直ぐさま心に浮んでくる。話はまるで統一も單一さも透徹的な生命も其中にないらしい。話は明かに種々の片々を偶然に掃き集めて、外部から敲き合せたものである。『ペーオウルフ』は斯様な異種聚合物である。或る點に於ては、此の作物は人をして埃及の話によりて表はされたる段階より、もつと古い文學發展の段階すら想起せしめる。魔術はその十分の意味に於てまだ現はれてゐない。作者は、主人公が凡ての人類に打勝つのは當然な事と、耳に聒

胞が出来る程聞かされていた時期に到着してゐたに過ぎなかつた。作者は、主人公ペーオウルフが相手として戦ふべき超人的な敵、即ち沼の惡魔のグレンデル(Grendel)と、底知れぬ池底に住むグレンデルの母の鬼婆とを書かねばならない。

此の作物に於ける如く、單に超人的の事を書くことと、埃及の話に於ける如く魔術の事を書くこととの兩者の間の區別は、重大な區別であつて、單に超人的の事を書くのは眞實性に向つて進歩し居る事を示し、批評的觀念の目醒めて居ることを示してゐるのである。グレンデルの身體には、肉に劍も透らぬが、然しペーオウルフはグレンデルの頭をたたき切つてゐる。もし東方の話なら、かかる困難な事の成功を容易ならしむるために、不思議な膏藥とか、魔法の大刀とかを主人公に持たしたらう。ペーオウルフは大膽に突撃し、底知れぬ水底に夏の一日沈んでゐて、鬼婆とその住家の薄暗き所で戦つて、それから再び水面に出てくる。もし東方の話なら水中でも呼吸が出来るやうな魔力を主人公に持たしたらう。そんな事は、恐らく初期のサキソン人の心には思ひ浮ばなかつた。然らば、まる一日水中に沈む事が出来た理由如何と尋ねるなら、作者は簡單に次の如く答へやう。『私なら余程努力しても水中に一分、多くて二分位しか沈めない。ペーオウルフは終日

水底に沈んでゐる。だから彼はそれだけ偉大であつた」と。

かく「物事を容易に信すること」(Simplicity of belief)より、遙かに重大なもう一つの區別が、初期のチュートン族の話と東方の話との間に截然と認められるか、其區別こそ恐らく何故初期チュートン族の話が今日も傳はり、東方の話が今日其の種を絶やしてゐるかの理由を説明するに足るものだらう。古の假作物語(譯者曰、埃及の「話」や希臘の物語を指す)は衰退して廢絶するに到つたが悲しむ人はない。新しい假作物語(譯者曰、初期チュートン族の物語をさす)が既にその先人以上の水平線に達してゐて、尙さらに高まらんとし、弱まり衰へると云ふ徴候はない。此の區別は、北方民族(譯者曰、北歐諸國の民族を指す)になればなる程、益々大な活氣と、固有の力と、勇氣がある事の裡に存する。實にやベーオウルフは、長く水中に没して自然力に打勝つてゐる。然し東方の話の主人公だつたら、一體そんな事を企てたらうか。更らにアイスランドの物語から例を出せば、『大勇士グレイア』(Grettir the strong)と云ふ Saga(譯者註、中世紀のアイスランドやノルウェーの古話を saga と云ふ、多くは冒險談、武勇談、一口に云へば北歐諸國の古事紀と見て差支ない)、『大勇士グレイア』は十一世純頃のアイスランドの saga である。主人公 Grettir は短

身肥滿の力強き男で、此の男の武勇談を書いたものだ)の主人公グレイアは、わざ／＼大入道(英雄)即ち腐つてゐる人間の屍を食つて住んでゐる鬼を待ち受けて、その怪物と終夜取組合つて、遂に其の怪物の濃い髻に顔を埋められ、息の根が止まるやうになるや、心臓を萎縮さす怪物の呪を物ともせず、怪物の背を破り、徐々に怪物の命を撲滅して、自ら死を免れてゐるが、東方の物語の主人公だつたらこんな事をやるだらうか。

東方の話や東方の主人公は、以上のやうな仕組には作られて居なかつた。斯様な事は、彼には想像する事すら出来なかつた。『蛇の島』(Tale of Snakes)と云ふ作物中の埃及の水夫は、自分は獅子よりも強いと云つてゐるくせに、蛇が來ると意苦地なくも顔を伏せて、兩手をだらりとさせて仕舞つた。もしこの場合、グレイアだつたらもつとよく自己の力を示す事を知つてゐたらう。グレイアは、自分は蛇のやうな卑しい動物ではなくて、天地の主人である事を知つてゐた。希臘の作家テイシアス(Tatius)(譯者曰、第四章に出づ)の *傑作中の *譯者曰、原書には作物の名なけれど、『Lencippe and Clitophon』の Clitophon を Clitophon と綴れる本もあり)主人公クリトフォン(Clitophon)は、自分の主人の打擲に甘んじてゐる寧ろ奴隸のやうな男である。北

方野蠻人の作物中には、古く物語の、脆い纏れた蛛網のやうなもので作つてある作物が殆ど無い事を思へ！

ペーオウルフは云ふ「如何なる人でも徒らに悲嘆に暮れてゐるよりは友の仇を報ゆる方がよい」と。(参照『ペーオウルフ』Arnold版一八七六年九十二頁、一三八四行以下)凡そ人にして、『ペーオウルフ』は古の希臘の話を學んだものと思ふものはあるまい。ペーオウルフの云ふ所、如何にも正確に首肯にあたり、且つ自ら己が優越を切言してゐる。

『ペーオウルフ』の構想(或は事件の連続と呼ぶ方が安全だらう)は、世間によく知られている事だから、こゝに繰返して云ふには及ばぬ。主人公の種々の勳功は、相互間に少しも關係がない。種々の勳功は、同一人物によりてなされたものとして綜合せられてゐる。批評家は、原型に於てはそれ等の勳功は、全然別箇孤立な四つか又は四つ以上の歌で歌はれていたと信じてゐる。又そのやうに多くの別箇の話として置く方が確かに読み易いだらう。

近代小説に於て、非常に主要なものと考へられてゐる構想以外の要素は、殆ど示されてをらぬ。情緒的な文句については實際少しもない。ペーオウルフは、何か成就するやうに頼まれると、

頼まれた事を成就して、幾分自分の武勇を子供らしくも自慢してゐる。そして事件が終つてゐる。然し此の一般の書き方の一つの例外として、最後の龍征伐ドラゴンの際の*『ウイグラフの挿話』(Wiglaf)のことに言及して置かねばならぬ(* Arnold's 'Beowulf' 一六五頁; 一五九行以下)。青年らしい感情の眞の調子を、恐らくは其の挿話に見出すことが出来やう。青年の決心が動揺してゐるさま、段々と感激してくるさま、そして終ひに急に行動してくるさまが歌つてある。ウイグラフは全篇中に於て性格描寫の唯一の小片を供してゐる。此の理由のために、全篇中此の挿話の部分は、残りの部分よりは後に出来たものかも知れないと推定されてされてゐる。主人公ペーオウルフすら、故意に他人と區別して書いてない。ペーオウルフは聞手の何れもか、自分も亦そうなりたいと求めてゐた所の理想、即ち何人にも負けることなく少しも物に恐ることなき力強き武人にして且つ大酒家を、單に理想化したものに過ぎない。

争鬭と酒宴とは、チュートン人の喜びとしたものであつた。従つてチュートン人は、争鬭や酒宴の事を聞くに際して一種の喜悅を感じた。戀愛は當時まだチュートン人の文學上の水平線に現はれてこなかつたのである。それ故に、争鬭の有様や特に酒宴の有様が『ペーオウルフ』中に描

寫されてあるが、其の描寫は吾々ならば情緒的の話を書いて作物中の背景とでもするやうな位置を占めてゐるのである。チユートン人の時代に於ては、争鬭や酒宴の描寫は、明かに背景ではなくして、話の中の價值ある且つ眞に重要な部分であつたのだ。ペーオウルフが如何程多量に酒を飲んだか、又はどんな贈物を得たかと云ふ事は、どう云ふ風に彼は戦つたか、又は何人と彼は戦つたかと云ふ事と全然同一な重大な事柄であつた。

扱て小説要素の發展が、チユートン人の話の中、現存せる最古のものたる此の詩の中に現はれたるものを概括して見ると、次の如くなる。

『ペーオウルフ』に
（一）構想 このやうな異種聚合體の作物には必要なものと考へられてゐない。然し事件によりては、其の事件の中に漠たる浮沈的の趣向を有してゐるものもある。色々困難な事がある點に積もつてくるとそれに打勝つてゐる。

（二）動機 眞實性が野蠻的な形で存在する。「絶対にあり得べからざる事」は書きもしなかつたし亦知つても居ないらしい。粗雑な形で此詩の原作者は、自分の歌つてゐる色々の事件を、それ／＼別箇獨立の事件として單に縫合はせたものかも知れぬ。此詩が熟慮して作つた物語であると云ふ

證據はない。道德的のことも亦書いてあるが、考へて書いたと云ふより寧ろ本能的に書いたものらしい。此の詩人は、意識的にやつたのか無意識的にやつたのか知らぬが、兎に角聽手が競争心を起すやうな眞に勇壯の事を歌つて聽手を鼓舞させたに異ひない。

（三）性格描寫 知つてゐない。例外は恐らくウイグラフの挿話だけだ。

（四）情縮の刺戟 確かに連続もないし亦主張もされてゐない。尤もほんの一時は考へられたらし

（五）背景 故意に書いてない。どの場面もそれ自身の價值のために示されてゐる。

（六）文體 粗雑な詩的で、力あれど混亂してゐる上に、構造の考が殆どない。作者は時々、争鬭の眞最中に筆を止め一方出てくる勇士達の家族の話など充分に話してゐる。従つて物語として文體は甚だ粗雑である。

『ペーオウルフ』から後の中世紀の叙詩事に移つてくると、技巧上種々興味ある發展がある。此の技巧上の發展は *（一）アーサー(Arthur)王に關する物語や、*（二）シャルレメイン(Charlemagne)帝に關する物語の中に幾分認める事が出来る。アーサー王に關する物語の中では、特に *（三）ラ

ンセロト(Lancelot)の事を書くに「情緒」の發展せるを認める。又シャーレメイン帝に關する物
『ニーベルンダの歌』 語の中では、* (4)『ローランの歌』の中に、そうたいした者でもないが、
(Nibelungenlied) 可なり連続的に出來てゐる。* 構想を認めるのである。

* 譯者註

(1)アーサ王とは、六世紀にサクソン人の入寇を妨がんとために、圓卓騎士團(The round table)を組織せるブリトン王のこと。但し實在の人物としては疑ふべき點が多い。此の王を中心とする物語は文學上非常に有名なものだ。The round table とは元來アーサ王がリオデグラウンス王の息女グウィネヴァアを王妃として迎へし時、リオデグラウンス王がアーサ王に祝物として興へた其の名の如く圓形のテーブルのことだ。圓形であるから席次を正すの必要がない。坐席が百五十あつたさうだ。其坐席にアーサ王は當時の有名な騎士を坐らせたのである。轉じて其テーブルに坐席を占めた騎士全體を The round table と云ふのである。

(2)シャーレメイン帝とはフランク族の王にして羅馬の皇帝七四二—八一四。

(3)ランセロトとはアーサ王の圓卓騎士團の中最も有名なる一人である。

(4)ローランはシャーレメイン帝の甥である。ローランの事を中心にして歌つたのが此の『ローランの歌』なのだ。

* 原註、この『ローランの歌』に於ける構想、否な寧ろ話の輪廓は、條理的に且つ數學的に纏つてゐる。然し非常に idly に出來てゐる。— idly と云ふやうな言葉が用ゐ得ぐくんは(譯者曰、著者の考では idly は idle の副詞のつもりだらう。づぼらにとでも譯出すべきものか)。私は後ちに構想は單に趣向のみでなく亦情緒上の興味が増加と性格の發展とを取扱ふものであると云ふ考を詳しく述べる。此の物語の構想は、叙事詩の企と眞の關係がない。此叙事詩の興味は、全然大膽な武人達の傲慢な言語と、戰場に於ける彼等の烈しい格闘とに集中してゐる。これでは認められて無かつたと同様かも知れぬ。

然しアーサ王やシャーレメイン帝に關する種々の物語中には、展開點として精しく調べて見るに足る程の技巧上の發展を示してゐる作物は一つもない。北歐人の *Saga* の中には技巧上遙かに小

説に近づいているものがある。北歐人の心の憂鬱さや、運命と云ふ壓服的な力をひどく感じてゐる事が屢々北歐人の作物に著しき統一を與へた。どの主人公も不運である。彼の運命は始めから彼に指示されてあつた。屢々行末はこうなると云ふ事が作物中に早くも彼に告げられてゐる。如之、人は普通自分に一番親しいものによりて身を亡ぼすと云ふ悲しい觀念が存在してゐた。それ故に身を亡ぼす人が時々 *die* に於ては主人公に比較して多小秀でた人物になつてゐる。こゝに原始的な手法ながらも構想がある。原因と、織込まれた糸と、結果常に戯曲的な結果がある。澤山な切れぎれの事件が介在してゐるが、差迫まつてゐる大團圓の意味をまるで破ることは決してない。

『吾々は何人も此の世に命の盡きるのを待ち設けねばならぬ。死に先んじて大業を爲さんとする人は生前にかち得るやうにせよ』(参照『ベーオウルフ』Arnold 版、一八七六年九十二頁、一三八六行以下)

恐らく此のやうな先見的な事は、獨逸の叙事詩中で一番有名な『ニーベルングの歌』の中に於て充分に其の意味が現はれてゐる。此の詩は有名なものである。此の詩には、皇子ジークフリード (Siegfried) が皇女ムクリームヒルド (Kriemhild) を戀して兩人結婚する事と、ジークフリードがク

リームヒルドの兄弟のために殺害される事と、數年後にクリームヒルドが自國民並びにジークフリード殺害に携はれる一味のものを虐殺して讐をする事が書いてある。全篇を通じ悲劇的の目的が常に目論まれてゐる。最初に * 前提異事 ("adventure") が書いてあつて、將來かうなると云ふ大體の豫想がつく。人は自分の運命を豫知し、身の宿命を諦めて運命に近づいてゆく。

* 譯者註、前提異事 ("adventure") についで。

こゝの *adventure* は冒険とか奇談とかの意味ではない。それでは譯語が不充分である。適譯が無いので假りに「前提異事」と譯出した。或は「豫告異事」と譯すもよからう。作物中に將來かうなると云ふ風に、豫言的に何かの方法で讀者に知らしめる事をさすのである。『ニーベルングの歌』には夢の話にかこつけてある。一例をあげて見やう。

或る夜ククリームヒルドは自分の育てゝゐる一羽の鷹が二羽の鷲のために殺された夢を見た。彼女が母に其の夢の事を話すと、母は答へて云ふ『お前に立派な夫が來ると云ふ夢です。神様がその夫を早死せぬやうして下さるといゝがね』と。蓋し母の答を推察するに、一羽の鷹とは夫の事で、二羽の鷲とはその夫を殺す所の人と解釋して居るのである。果して母

の答の如く、クリムヒルドはやがてジグフリードを夫としたが、夫たるジグフリードは間もなく彼女の兄弟Cemotや Giselher(尤も此人は Siegfried 殺害に反対してはゐるが)並びに Hagen と云ふ男のために殺されて仕舞ふのである。

かゝる意味に於ける adventure の例として、私の頭に直ぐ浮ぶのは沙翁の悲劇マクベスの初めにある三人の妖女の豫言である。

構想に與へたる功績に關しては、それを褒める人の中には非常に熱狂的溢美の言を與へる人もあつた。カーライル(Carlyle)は云ふ(譯者註、云ふ迄もなく、かの有名なるスコットランドの歴史家、論文家、批評家たる Thomas Carlyle の事也。一七九五—一八八一)

『ニーベルングの歌』中の話の材料に就ては、高い否な殆ど最高の功績を有してゐる事言ふ迄もない。實に優美に、しかも堅固に結合されてゐる。如何にも巧に、美なるもの、粹なるものを選択し、又同様に巧に、美でないもの、関係のないものは何物でも除去してゐる。』(參照 “Westminster Review” 一八三二年十六頁)

勿論此の言は、カーライルは小説の見地よりも寧ろ詩的見地から此の叙事詩について云いつてゐるのである。然し此の他の所でもカーライルは

『此の詩は基礎的の構造が、始めにも中頃にも最後にもある。此の詩の裡には、一偉大な主義と觀念とが出てゐる。其の主義・觀念の周圍に、此の詩の多種多様な凡ての部分が生々と結合一致してゐる』(參照、同上、一四頁)

と云ふ事を述べてゐる。

此のやうな心酔的の言に面しては、獨逸の批評家すら、『ニーベルングの歌』は『ベーオウルフ』と同様に多くのもと別箇の詩の異種集合體であると主張してゐると云つた所で、耳にも入るまい。此の詩の思考の展開の跡を追つてゆくなら、カーライルが褒めた所の此の詩の構想上に、非常な欠點を認める事は容易であらう。此の叙事詩の前半は、寧ろ斷片的の型で、ジグフリードに對するブルムヒルドの執念深い戀を取扱つてゐる。ジグフリードに詭かされ又戀敵クリムヒルドに侮辱されたるブルムヒルドに對する同情の結果が、ジグフリード殺害の原因となり、次いでブルムヒルド自身も死んでゐる。

ジグフリードとブルムヒルドとの死後は、クリムヒルドが構想の中心とならねばならな

らぬ。然るに此の時すらもクリームヒルドは興味を中心ではない。クリームヒルドのやる復讐が新しい話即ち第二の悲劇を構成するのだが、此の悲劇にはクリームヒルドの残酷な兄弟が（譯者曰、Siegfriedを殺害したる故に残酷）容易に死にもせず平氣で話の中心人物として聳へてゐる。もし近代小説ならば、話が中程までも進まぬ中に、ジグフリードが殺害されてゐるが如く、主要な主人公を殺して仕舞ふ事は確かに作物の死活問題になるだらう。『ジグフリードが死んで仕舞つたからにはあとは如何ならうと構はない』と云ふ此の叙事詩を読む近代人から屢々耳にする批評を、昔の讀者は云つてはいけなかつたのか。將又一人物の作物中に現はれて來ることは、昔の讀者の心には、現代人の心に照する程には思はれず、ぼんやりしたものでたつたのか。

眞實性に關して云へば『ニーベルングの歌』の作者は、殆ど一節毎に『私は世間でこゝろ話してゐるのを聞きました』と書いてゐる。此の言葉は、詩を充實するために企てられたる詩作上の一形式に過ぎないかも知れぬ。然し作者が、讀者に信じてもらいたいと云ふ希望、尤と思はしめる企を有してゐた事は明である。作者は背景の裡に魔術を入れ、魔術を主として前兆や運命の豫告のために用ゐた。情緒は人物中に存在するものとして、又讀者の要求する一特質として、明かに目

論まれてゐる。然し復讐の形の中にのみ、情緒は人生を司配するものとして充分に認められてゐる。作者の眞の企は、美術的方面・詩的方面から情緒に近づきて、讀者に人生に存在する悲哀と悲劇とを與へんとする事にあるらしい。作者は思慮深く而かも誠實に、作中の人物を觀察し、作中の人物に就いて語るに、彼等が多分そうするであらうやうな明白簡單な意味を以てした。

然し人物の働作は到底十分なものとは思はれない。人物の働作は構想の邪魔になつてゐる。此の點はベールオウルフと異つてゐる。カーライルですら次の事を余義なく是認してゐる。

『作者は性格を描寫すると云ふ力をまるで有してゐなかつた。恐らく彼は、それに就いて何等決定した觀察がなかつた。彼の人物は表面的に區別されてゐる。一般的の區別が全然無いと云ふのでは無い。然しその人物描寫は不完全に示されてゐる。作者の心中には、眞に生々した

獨創的なものが少しもない』（參照『Westminster Review』一八三二年四四頁）

獨逸國民が、各方面の種々の批評と異つた批評をやつても、此の點はまるで否認はしない。シェーラー(Scheller)（譯者註、フランスの神學者、政治家、批評家一八一五年—一八八九）は、此の叙事詩の各曲はいづれも價値なきものと批難したが、最後の曲即ち第二十曲を

『中世獨逸語の英雄詩によりて産出されたる所の行爲・性格の最も力強き描寫』(參照 "A History of German Literature" 英國版一八八六年、第一卷一二二頁)と賞賛した。

學術上から考へると厄介な事には、此の詩が漠然と歴史にも傳説にも結びついた事であるらしい。作者は、自分で自分の話を作らなかつた。彼はジグフリード及び其他の人物に就いて古から傳つてゐる有名な話を材料にした。彼は材料を織込み合せたが、それは彼には荷が重すぎた。餘りに多く別れすぎて、離ればなれの種々の題目を語らうと試みた。加之、彼は主要人物の名譽に妨げられた。彼は彼等の行動を變更する事を敢へてしなかつた。ジグフリードは死なねばならぬ。クリムヒルドは復讐せねばならぬと思つた。若し作者が作中の人物を動かす所の刺戟が不自然だとか不十分だとか考へるなら、(時には考へてるやうだが)自分が豫ねて聞いて居た話のやうに、稍々單調な話の筋のみ書くに止め置く事が出事るだらうものを。

それ故、此の最も有名な叙事詩を、單に叙事詩と考へずして、小説に對する其の傾向から見て概括すると、次の如くであらう。

(一)構想 豫告が澤山あつて、強く且つ明かに認められてゐる。然し擴がり過ぎてゐるし且つ

聯絡が欠けて、話が二三に分裂してゐる。

(二)動機 少く共詩的情緒・人生の悲劇を示すために作られてゐる。眞實性は外見上要求されてゐる。魔術が從屬的にかかれてゐる。

(三)性格描寫 大概の人物は充分に區別されてゐる。然し内面から考へられては居らぬ。構想の妨をしてゐる。

(四)情緒刺戟 復讐の形で強く出てゐる。然し構想の眞の動力としては用ゐられてゐない。人間は運命によりて左右される。人間的の感情や希望によつてはならない。

(五)背景 宮廷生活の有様が到る所に書いてある。尤も獨逸の批評家の中には、『ベールオウルフ』に於けると同様に、是等の描寫は背景ではなくしてそれぞれ別箇の詩の題目と事件であると感じてゐるものもゐる。

(六)文體 眞に壯嚴で著しく詩的價值がある。尤も作詩法の上から見れば、小供らしい形の中に不要の語句が挿入されてはゐるが。

さてこれ迄は、私は古の假作物語と近代の假作物語との相違を力説せんと努めた。然し兩者發

展の類似點を云はないで、これで済まして置く譯にはゆか無い。多くの點に於て近代の假作物語
中世紀の 發展は、埃及や希臘の假作物語の發展に密接に平行してゐる。『ニーベルングの
物語』に於ては魔術は從屬的のものであつたに拘らず、その後の物語は不思議な事に
訴へる時期を有するやうになつた。佛蘭西國民がそれを心がけた。北ノルマンディ國の惡魔や食人鬼でら、
アマデイス・オヴ・ゴール(Amadis of Gaul)(譯者註、ポルトガルの人 Loberia の作、中古武勇傳
“Amadis of Gaul”の主人公)や、パルメリン(Palmerin)(譯者註、“Palmerin of England”と云
ふ中世紀騎士物語の主人公)にとつては、敵とするに足らなかつた。騎士物語の主人公は、龍や
魔法使や、不思議な城や、又は單に武器の力ではいくら戦つても無駄なこと恰も海濱の砂地を相
手とするやうな軍勢等を敵とせねばならぬ。希臘時代に於ける如く、不思議な事が段々と成長し
て、遂にその不思議な事は實に限りある人智では到底信することの出来ぬまでになつた。その時
サーヴァンテス(Cervantes)(譯者註、西班牙の詩人、小説家、一五四七—一六一六。“Don Quixote”
の著者として名高し)出で、一撃を以て彼等を渦に巻込みて世間から葬むつて仕舞つた。
ベオウルフ(Beowulf)やグレートイア(Grettir)(譯者註、共に前出)には知られてなかつた戀愛の

興味が、亦復活し段々に優勢となつた。十一世紀に於て『ローランの歌』(“Song of Roland”)(譯
者註、前出)出で、不意に此の物語に於て、吾人は主人公の許嫁が、主人公の死せるを聞くや悲嘆
のあまり死ぬことを語られるが、其他に於ては此の許嫁は全篇を通じて餘り注意を引かないので
あつて、此の物語は、談話や戦場の事を細述し、言語と腕力との人間の技術を示してゐるのであ
る。『ニーベルングの歌』に於ては、戀愛と友情とが共に大部分を占めて居るが、戦と復讐のことも
やはり優勢な感情となつてゐる。少し後のランセロド(Lancelot)(譯者註、前出の註を見よ)とト
リストラム(Tristan)(譯者註、此の人も亦 Arthur 王の圓卓騎士團の一人)とは、戀愛のまるで奴
隸として示されゐて、しかもトリストラムの如きは失戀の結果死んでゐる。
古の假作物語と近代の假作物語との間の以上の類似點の外に、も一つ類似點を求むれば、語句
の研究や、言語それ自身のため言語を用ゐてゐる事が、數時代を経て最後に、非常な文飾した自
己満足の誇飾になつて、古のサーヴァンテス(譯者註、前出)ですらも、其他の馬鹿らしい事と一
所にそれを一笑の下に絶滅させる事が出来なかつたのを見出すのである。此の事は田園詩にもあ
つた事で、その田園詩は今や再びロンガス(Longus)(譯者註、第三章を参照せよ)によつての如く、

不思議な話の没落から生じたのである。十七世紀の始めに於けるドーフェ(D'Urfé)(譯者註、佛の作家、Honored Urfé のこと。一五六八—一六二五)の *『アストレー』(“Astree”)は、其の言語の警句に富める誇張で、其の當時に賞讃された作物であつて、凡ての模倣者によりて模倣されたものである。

*譯者註。“Astree”は、今日では無論過去の一作物としてたいした價值もないが、佛蘭西では非常に有名な作物で、其文體は、一時歐洲の文壇に影響を及ぼしたものであるから少しく述べて置かうと思ふ。全部で五卷から出来てゐる。第三卷までは作者 D'Urfé の生前に出版され、第四第五兩卷は死後遺文斷篇を集めて出版されたのである。次に梗概を書いておく。

時代は四世紀のこと。Foreste と云ふ美しい土地に、羊飼の Celadon と云ふ男が住んでゐた。彼は美しい羊飼女 Astrea の戀人であつた。兩人の結婚は互の兩親の承諾を待つ許りだつたが、或る羊飼が兩人の仲を嫉妬して『Celadon は Aminthe と云ふ小女を愛してまゝと』と Astrea に告げる。Astrea は非常に怒つて Celadon との結婚を拒絶して仕舞ふ。

Celadon は失望落膽の餘り Lignon 河に身投する。Astrea は驚いて河の土手で氣絶する。彼女は悶々の裡に日を送つてゐた。然し身投した Celadon は皇女 Galatea 及び侍女に助けられて宮廷に養はれてゐた。彼は或る日宮廷を逃出して一つの洞穴に隠くれ、そこで日を送つて Astrea の無情を悲しんでゐた。友の羊飼に托して「此の世で一番美しい羊飼女へ」と書いて Astrea に手紙を送つた。

手紙を受取つた Astrea は直ちに Celadon を尋ねに出發した。

こゝまでは話は順調に展開してゐる。これから後は話は錯雜して聯絡がなく様々の奇談が混じてゐる。

Foreste に戦が起る。Celadon は女巫の假装をして Astrea の友となる。兩人獄に投ぜられたが兩人共獄から逃げて仕舞ふ。遂に Celadon は假装をやめて本體を現はし Astrea に結婚をせまるが、彼女は彼の眞意を疑ひ再び拒絶する。彼はまた自殺しやうとする。澤山の人が彼を『眞理の泉』につれてゆく。『眞理の泉』には數頭の獅子が番をしてゐて、泉の水で人物を試験し偽善者なら喰ひ殺し有徳者なら保護してくれる。泉で試験の結果 Celadon

は眞實な男なる事が判り、遂に Astrea は Celadon と目出度く結婚する。

此の作物は直截的な流暢な佛蘭西語でかいてある。

ダーフェエ(D. Die)は吾人をして、寧ろ中世紀以前を想起せしむるが、彼の誇張的な作風を一目見ただけでも、讀者に訴へる手段が全く變化してゐるのをつくづくと感するのであつて、其の變化によりて彼以後の物語は讀者を引つけんと求めたのであつた。此の變化とは云ふ迄も無く、眞實性に向つての變化では無かつた。しかしウォレン(Warren)教授が、最初の近代小説と選び求めたものは、實に此種の物語中一番傑作たる『アマデイス・オヴ・ゴール』(“Amadis of Gaul”)である。それ故如何程の程度まで、此の『アマデイス・オヴ・ゴール』が、技巧上小説の六要素を有してゐるかを注意して見やう。

殆ど凡ての國語で『アマデイス・オヴ・ゴール』が讀める程、此の物語は廣く各國に翻譯されてゐる。英國ではサウジー(Southey)譯者註、英國の桂冠詩人、一七七四—一八四三の雅致ある翻譯『アマドイス・オヴ・ゴール』があつて、非常に縮めて譯して原作物以上に効果を有してゐる。原著の西班牙語に於ては、此の物語は散文で書いてある、誇張し過ぎてゐるが文體は心

地よく出来てゐる。Senor de Montalvo と云ふハイカラ紳士が、恐らく一四七〇年頃に此の物語を今世に傳はつてゐるやうな形に改作したのであるが、此人は上品な言葉を受した人であつた。

従つて此の物語は、禮様正しい言葉や、道德上の感想を精密に調べるための教科書となる事は、エリザベス時代の『ユーフウウィーズ物語』(“Euphues”)譯者曰、第三章にて既に註をした)に於けると殆ど同様である。主人公アマデイスはベロオウルフと同様に、讀者に對して理想的人物として描かれてゐる。即ち讀者の理想なる勇敢な武士を描いてゐるのだ。従つてアマデイスには人間的な性格がない。アマデイスの妻たるリアアナ(Oriana)の性格も亦出てゐない。却つて此の物語中の主要でない人物の中に性格描寫の出でゐるものがある。然しそれとても性格の發展は無くして、只個人個人の特長ある動機を描寫してゐるだけである。

此の作物の所謂「構想」は、事件の縋りつく糸として認められてゐるに過ぎない。此の物語はアマデイスの兩親の話をして始まり、アマデイスが生れる事を述べ、アマデイスが段々成長してリアアナに逢ふ迄書く。それから後は作者はアマデイスもリアアナも決して忘却しない。此の物語以外の騎士物語にも書いてあるやうに、色々の冒險談が長々と詳述されてゐる。然し作者はいつで

も最後にはアマデイスを思出して、アマデイスの事を書く。色々の故障のためにアマデイスはリアナと一所になれない。アマデイスが凡ての故障に打勝つてリアナと將に結婚しやうとする際に、結婚する事とは全然関係のない又新たな故障が紹介される。時々一故障すら作者には主要なものと思はれなかつた。アマデイスは或る事件を擁護するために頼まれたに過ぎ無いのに、亦話は横道へと入いつてゆく。かくてアマデイスとリアナとに説き及ぼしてある事以外には、全然別箇な種々の戀物語が連続する。讀者が此の物語が、もう終りになるに異ひないと考へる度毎に、作者は新たに筆を起してまた更らに書きつゞける。最後にアマデイスとリアナの間に男子が生れる。然し此後すらも、Montalvo(譯者曰、前出)はアマデイスとリアナとをして正式の結婚式を擧げるやうにしないで、又別の話を續けて話の邪魔をしてゐる。此の最後の話がすんでから、作者と讀者の幸福と共に、やつとアマデイスとリアナとは正式に結婚させられる。

若し吾人が、冗長な文句で述べられたる感情を、眞實なものと思ふ事が出来るなら、此の時期の凡ての戀愛物語の中には情緒刺戟のものが澤山ある。ウォレン(Warren)教授が、此の『アマデイス・オヴ・ゴール』を小説と呼ぶやうに決定した理由は、此の作物に於て戀愛の題目が、屢々延

引された結婚の裡に暗示されたる構想の非常に繊弱な絲と結合してゐる爲めである。然し此の立脚地なりとせば、此の作物より古い物語、ボカーチオウ(Boccaccio)(譯者註、伊太利の小説家、詩人、*Decamerone*)の作者として有名。十三三三—十三七五)の『Fiametta』やチョーサ(Chaucer)(譯者註、英の詩人、*Canterbury Tales*)の作者として有名。十三四〇—一四〇〇)の『Troilus and Creyside』の如きものをも、小説と認めねばなるまい。又小説は、散文で書かなければならぬと云ふやうな機械的の便宜手段によりて、以上の二作物『Fiametta』と『Troilus and Creyside』とを小説では無いと云ふやうな事を云はなければ、語句こそ韻律にはなつて居れど、その語句は詩たる本質を備へて居ないと云ふ理由のもとに、『ニーベルングの歌』すらも小説と認めねばなるまい。此の事に關連して云つておくが、『アマデイス・オヴ・ゴール』中の語句が、多く韻律的である事は、何等の價値のない事である。何となれば、實にその語句は散文の非常に精鍊された形で書いてあるからだ。

『アマデイス・オヴ・ゴール』と『ニーベルングの歌』とが、小説の要素を有してゐるかに關して、兩作物をもう少し密接に比較して見やう。『ニーベルングの歌』は既に概括した。『アマデイス・オ

ヴ・ゴール』は、次の如き結果になる。

小説と物語 (一)構想 漸層的の力には全然無頓著。關係もない事件と、挿話との長い系を結との分離 ぶ、情緒の細い糸としてのみ認められてゐる。

(二)動機 詩的情緒を表はすため。理想人物を描寫するため。眞實性は全然ない。驚かすためではなく、武者修業者に新しい光榮や新しい悲を與へるために、魔術が殆ど到る所に用ゐられてゐる。
(三)性格描寫 主要人物は型に過ぎ無い。反つて主要でない人物中に効果的に描寫されてゐる。
(四)情緒刺戟 空想的に主張され、非常に誇張されてゐる。然し近代人の氣持では了解されない。納得出来ない。

(五)背景 故意に宮廷の描寫・會話及び作者の道德上の評論で充ちてゐる。

(六)文體 過度に精巧。

『アマデイス・オヴ・ゴール』と『ニーベルングの歌』とを相並べて見ると、既に云つた事が一層明瞭になる。即ち中世紀の物語は、近代小説に段々と近よらずして、寧ろ近代小説より遠ざかりて度を過すこと、度を高めることの線が發達した。従つて『ニーベルングの歌』が、世に現はれたる是

等十二十三兩世紀と云ふ薄暗き黄昏に於ては、何處も彼處も、小説と物語とは異様に發達し始めた。小説は確かに末だ明かな存在を有してゐなかつた。小説の諸方則は認められてゐなかつた。即ち依然として詩歌や戯曲の諸原則と混合されてゐた。然し物語は最早構想と眞實性に向つて發展して來なかつたからして、吾人は小説になり行く他の影響を、何處か外の處に尋ね求める事を始めねばならぬ。

小説は武士宮廷物語と一般人民の短い散文の話との結合から發生した事を云ふのは、殆ど今は中世紀に於ける 陳腐に屬してゐる。然し是等の散文の話に於て、吾人は物語に於けると同様

散文の「短話」 に、統一の欠けてゐるのを見るのである。*『ジェスタ・ロウマロウラム』

(“Gesta Romanorum”)や『嬉樂百話』(“Hundred Merry Tales”) (譯者曰、短扁逸話集の名)や其他これに類似の著書には、短い逸話が澤山あつて、是等逸話集は、材料を眞に節約して實によく要領を得てゐる。然し是等逸話中の重要な逸話は、一千語にのぼると話が脇道に逸れてくる。

*譯者註、『ジェスタ・ロウマロウラム』は十三世紀の末葉に、英國に現はれた「ラテン語の逸話集」である。何年頃誰が編集したかは明白でない。尤も種々の故事熟語辭典で見ると、

Pierre Bercheur と云ふ人が編集したと書いてあるが、これは英國の批評家、詩人たる Thomas Warton(一七二八—一七八〇)の説なのである。僧侶の手によりて編集された事は確實で、餘り鹿爪らしい説教ばかりすると聽集に飽がくるので、聽集に興味を與へるために中世紀の逸話を集めた、云はゞ説教用の種本と見るべきものである。

是等逸話集よりは長い散文の話、例へばハムレット(Hamlet)とか *『ロバート悪魔公爵』(Robert the Devil)とかを中心として發達した話の如きは關しては、是等の話ば話の要點と方向とが全然欠けて居るので特に著しい。

* 譯者註、Robert はノルマンデーの公爵 “Robert 事、勇猛酷薄なりし故 the Devil と綽名されたのだ。此人に關する傳説は早くも佛蘭西に傳はつて “Robert le Diable” と云ふ物語が出来たのだ。

勿論人民の手になる是等の話は、主として僧侶の手によりて屢々訂正されたのち吾々に達したものである。是等の話の、もとの形は、今傳はつてゐるものより長いものでなかつた事は確かだがもつと前後照應がなかつたかどうか今云ふ事は困難である。適當な例證として僧侶の手にて改訂された『僧侶ベイクンと僧侶バンゲイ』(“Friar Bacon and Friar Bungay”)を擧げて見やう。最初の數章に於て二人の主人公が魔術で大膽な寧ろ悪い事を色々やる。ベイクンは犬を喉かけて、茨の中に一名の騎士を我知らず乗入れしめたり、或は又一人の飢へて居る男の唇に、團子の入つてゐる袋を結びぶらさげたりする。又ベイクンは自分の仕へてゐる王の爲めに、或る町を乗取つたり、有名な『眞鍮の首』(“head of brass”) (譯者註、魔術使の僧侶バンゲイの助力によりてベイクンが眞鍮で作つたもので形も言葉を云ふことも人間の首と同様なもの)を作つたり、又は眞鍮で全英國の周圍に壁を作らう等と計畫する。ベイクンは大膽で愛國家で褒むべき男である。しかし彼は一寸した事をやるにも必ず其のやる事に關して議論を吐く。最後に彼は自分の行爲の間違つてゐた事を後悔するやうになり、自分の魔術を使はぬ魔法(white magic)すらも不徳の事と悟り、且つ又自分が英國の爲めにやつた事は何の價値もなかつた事と信するに到る。そこで彼は自分の藏書を焼いて仕舞ふ。それから一章は全部教訓的になつてゐる。數年間ベイクンは、獨り淋しく一室に閉ぢ込もり、自分の歛で自分の墓を堀り、かくて「眞に後悔せる罪人且つ一隱遁者」として死んで仕舞ふ。魔術使の僧侶バンゲイに關しては、氣の毒にも悪魔のために速座に殺され、死骸は

火で焚かれ「息もなく、不思議なものに」譯者曰、灰のことになつて仕舞ふ。尤も彼の身分を重じてキリスト教の埋葬」をされては居るが。

亦ガイ・オヴ・ウオウイク(Guy of Warwick)も同様である。*譯者註、十三世紀に英に行はれし小説の主人公は自分の妻のために、龍や其他數へ切れぬ程澤山の有害なものを殺したは固よりの事、罪もない大きな暗褐色の牝牛を殺した男だが、自分の行爲の誤りなる事を悟るやうになる。美人のフェライイス(Phaeice)と結婚後、彼はフェライイスを家に残しおき、自分ひとり巡禮者となつて旅立つ。ジェルサレム(Jerusalem)から歸つて來てから、彼は妻のフェライイスの近所に數年間住む。然し妻のフェライイスはそれを知らない。一人の尊者が、彼女が夫の身の上を案じて絶へず嘆いてゐる間、彼女を監督してゐる。——如何なる人種の人でも、これを神聖と考へるとはとても思はれない所の残忍な行爲である。世人がこれを神聖だと考へるとはとても信じかねる。机上の空論で、又一方此の美しきフェライイスは人生の樂を奪ひとられた詩の脱殻となつてゐる許りだ。

それにも拘らず是等僧侶の作家は、いらぬ御世話をやいて人に迷惑をかけるよりは、恐らくもつと重大な一つの事を假作物語に對してやつた。彼等は埃及の「話」以後これまで物語に有してな

かつた所のものを物語に對して復舊した。そは明かに、話そのもの以上に自覺せる目的である。その目的は、彼等僧侶作家にとつては最高のもと思はれる所の目的であつた。彼等の作物はどんな作物でも必ず、よしんば其の作物がハムレット(Hamlet)のやうな氣狂の事をかき、又はフライア・ラッシュ(Erjar Rush)のやうな小鬼の惡戯を書いたにもせよ、其の結末には必ず「茲に於てか讀者は其の報の如何なるものかを知り得るならん」と云ふ調子で、善に對して惡の榮えたる事なきを説き、そして最後に適當な罪を與へてゐる。彼等作家は、話は最早單に人を喜ばしたり、惡事を冷笑したり、人を怠墮に誘くものでなくして、これと反對に、話は正しき事の武器となり、愚かなものを善に誘く手段であり、通俗の説教とすべきであると思つた。デフォウ(Defoe)が「ジャック大佐」(Colonel Jacques)を書いた時も、亦リチャドスンが「パミラ」を書いた時も此の事は忘れなかつた。

かく、あらゆる饒舌と婉曲な言ひ廻はし方の裡に、人生に對し古の見方が誤れる事を證するたために、又非常に褒むべき道徳上の目的を云はんが爲めに、話の中心となる統一の概念が、徐々に其の路を作りつゝあつた。ボカーチオウ(Boccaccio)は統一の考を持つてゐた。彼は幾分明白に統

一の考を有してゐた所の最初の近代人であるらしい。ボカーチオウの二三千語で出来てゐる作物の二三のものは、統一觀念の完全なものがある。例へば「フェデリゴウ(Federigo)」と彼の鷲の話」は統一が發達してゐる手本であつて、一概念が明白に表はされ、自己の云はんとする所を充分に表はし、人をして教へしめ、納得せしめる程作全體を司配してゐる。此の話ほど有名ではないが、「アナステイシオ(Anastacio)の話」や「ネイサンとミトリデインズ(Nathan and Mirrianes)」も亦同様である。ボカーチオウが、もつと長い話を書く時もそうであつて、彼は亦統一に代るに變化を以てした。有名な「サイモンとイフィジイーナイア」(Simon and Iphigenia)の話の中に於てすら、變化はライシマカス(Lysimachus)の事を書き出してから著るしくなつてゐるが、この人は話の後部分を司配してゐる。單なる一事蹟でもあれば、ボカーチオウはそれを本能的に、手法に忠實に取扱つた。然しボカーチオウが、色々の絲を織込んだ作物に於ては、彼は動もすれば中心思想を移動し勝ちで、別の話のために主なる趣向を失つてゐる。

ハウエルズ(Howells)氏は「文學と人生」(Literature and Life)中に於て、ボカーチオウに關して評論して居るが、其の評論は此の統一の欠陥を説明するための助けとならう。氏はボカーチオ

ウの作物の、普通傑作と認めらるゝは、技巧的よりも寧ろ言語學的事、並びに彼の作物は人物描寫にも、人生の表現にも、深味が欠けて居る事を言つてゐる。

『彼の作物は讀者を喜ばしむるが、讀者の心を掴まず、又大きな深い印象を讀者の心に與へない。』(參照「文學と人生」一九〇二年、一一五頁)

この言葉は、十四世紀以來人生に興味を加はつて來た事を云つてゐる別の云ひ方に過ぎない。且つ彼の批評は欠點を擧げてゐるけれど、彼は亦ボカーチオウ時代の話の眞實味の効蹟をも認めて居るのである。ボカーチオウ時代のフロレンス人は、確かにハウエルズ氏の見解を皮想的なものと思はなかつたらう。

機械的秩序にて示されたる如き文體に關しては「デカメロン」(Decameron)が、初めと終りに規則的な定法を有して居るが、その定法を繰返し使つて、殆ど粗雑なものになつてゐる。或る時、或る所に、斯様／＼の生活をした所の人が住んでゐた。今斯様／＼の事をするやうになつたと書出して來て、それから其男に起る或る事をかき、而して話は纏つて居る。少く共、こゝに迅速に話の準備を定めて置かうと云ふ必要に、明かな着眼があるのであつて、原因と結果との連續が可

なりに出てゐるのである。亦此の連続が、全篇の最後まで續いてゆくのである。背景も亦、話の
雰囲気や動機と一致し用ゐられて、背景たる眞の附屬的の位置を占めてゐる。サイモン(Simon)は
美しい景色の中を通過して、始めてイフィジニア(Iphigenia)に逢ひ活氣をつけられてゐる。
何人と雖も、ボカーチオウの天才なる事を否定するものはない。彼の技巧は中世紀が與へた最上
のものである。

彼の後嗣者とも見るべき英國のチョーサ(Chaucer)はボカーチオウと並べて同様の位置に置い
てよからう。チョーサの短い話は、ボカーチオウのものと同様に、賞嘆の辭が與へられよう。チョ
ーサとボカーチオウとは、その技巧上に於て非常に似てゐる。但しチョーサに於ては、其の作物
の形が、動もすればボカーチオウよりは少しく不完全になり勝ちであるし——詩は詩それ自身の
目的のために、話と離れて自然と岐路に逸れてゐる——且つ人物描寫が、ボカーチオウよりは範
圍が廣く、頗る全般に互つて、もつと樂に、自然に、一般人間生活に眞實になつてゐる。

● 中世紀の短話が、小説に接近してゐるらしい所のものを概括すれば次の如くである。

小説に向つて (一)構想 單なる逸話が巧に述べられて、一直線に最高層に達してゐる。然し

短話の接近

長い話になると、依然して深味と強味とを欠いて冗漫となる。話は長くなると
必ず異種異様のものになる。

(二)動機 屢々認められる。特にボカーチオウに於て然り。人生を描寫せんとする眞の希望があ
る。眞實性は直覺的であつて、古の人には知られてゐなかつたものである。二三の不撓不屈の精
神的人物の中に眞實性がある。然し作物が、僧侶作家の手によりて文學的の形に移さるゝ時には、
大概の作物は眞實性が弱まつて來て、道德上の目的が技巧上、眞實より大切なものになつた。

(三)性格描寫 ボカーチオウとチョーサとにより手法が高まつた。中心題目としてゝはないが、
性格の展開すら、時々取扱はれてゐる。

(四)情緒刺戟 充分の價値が考へられてゐる。後の作物は情緒を中心としてゐる。尤も現代の批
評家の中には、是等作家は、現代の作家より淺薄な人間の魂と皮想的な手法で取扱つてゐると云
ふ人もあるが。

(五)背景 初期の作物には全然無視されてゐる。「キャンタベリー物語」(“Canterbury Tales”)が出
るまでは、背景を取扱つた作物は殆どない。背景は幾分背景の眞の技巧上の役目を帯びた位置を

占めてゐる。

(六)文體 必要な配置法が確實に了解されてゐるが、動もすれば粗雑な型に墜してゐる。用語は「言語の完成」である。

* (参照 ハウエルズ氏「文學と人生」一九〇二年、一一六頁)

第六章 近代小説

過渡期

中世紀の物語の盛りを以て——即ち「アマデイス・オヴ・ゴール」『デカメロン』或は又恐らくは「キャンタベリー物語」を以て——小説の各要素は、何れも既に種々の場合に、人爲的に思考され、周到に研究され、且つ自覺して用ゐられた。小説の構想即ちどこまでも單一動作を述べてゆくこと、情緒の緊張と漸層的な力を伴ひて一共通目的に向つて凡ての絲を集中する事、かう云ふ意味に於ける構想すらも、兎に角一時は「ニーベルングの歌」の中に樹立されたらしかつた。残つてゐるものは、此の一要素、即ち構想が充分に認められねばならぬ事と、構想以外の諸要素を別々に用ゐずして、全部を一作物に結合せねばならぬ事だけであつた。

再三再四、此の結合が密接に近づけられた。然し殆ど三世紀間は、此の結合は全然達しなかつた。結合したいと云ふ事も充分に認められなかつた。「アマデイス・オヴ・ゴール」以來一打位の作物があるが、吾々の要求する物を少しく寛大にさへすれば、それ等作物中のどの一作物でも、最初の近代小説と呼んでよからう。實際思慮深い批評家の中には、是等作物中のどれかの一作物を、

最初の近代小説と呼んでゐる人もあるのである。

是等作物中に第一に欠けてゐるらしい所の事は、只に構想に集中力がないと云ふ許りでなく、寧ろ眞實性が足らないと云ふ事である。ポカーチオウとチョーサ以後の作家は、眞實と云ふ高い價值についての考を明白に會得する事が出来なかつた。眞實を表はす事に満足しないで、話は人生の繪畫以上の或物であると主張した。かくしてエリサベス時代の英國に於てすら、シドニ(Sidney)の『アーケイディア』(Arcadia)は空想的で且つ戀愛的であつた。リリ(Lily)の『ユーフウィーズ』(Euphues)は修辭的語句に富み、一寸した話にも非常に不要な語句を挿入して、「言語の技巧」を弄して一編をなしてゐる。これよりは單純なロバト・グリーン(Robert Green)の作物すらも、話が道草を食つて全然『ユーフウィーズ』的の華麗なものになつた。僅かにナッシュ(Nash)の『不幸なる旅人』(The unfortunate Traveller)が、ジュサラン(M. Jusseland)氏の意見に従へば、眞正の小説として見らるべきである。

『不幸なる旅人』は、以前西班牙人によりて發達せる惡漢物語ビカレスク・ロマンスの部類に屬する、英國での最初の作物たるに過ぎない。既に『アマデイス・オヴ・ゴール』にて、一つの獨創的文學の形を世界に與へ又

惡漢物語

後に『ドン・キーホウテ』を創作した所の國民は、亦『ラーザリーヨウ・ダ・トウアメス』(Lazarillo de Tormes)に於て、第三の創造を吾々に與へた。此の『ラーザリーヨウ・ダ・トウアメス』は、一五五三年に出版されたものだが、(或はもしそんな作物が存在したとするなら、もつと以前に無名の作家によりて出版されたものかも知れぬ)此の作物の中には、近代の物語中初めて、一般人の實際生活の詳しい話を書いてあつて、理想の武士を想像的に存在せしめるやうな事は書いてない。此の、長たらしい日常話題を、物語の續者に興味あるやうにするには如何にすべきであるか。一體如何なる刺戟が、戰勝の話とか、千變萬化の華やかな話に代用する事が出来るか。此の作物の作家は、此の問題を解決するには、主人公を惡漢にして、其の主人公の凡ての巧妙な惡事を委しく述べる事を以てした。

* 譯者註、頗る喜劇的な作物である。Lazarillo と云ふ、快活な圓々しい男が己れの仕へて居る主人を赤裸々に觀察してその愚なる點を發いてゐる。作者は西班牙の將軍 Diego Hurtado de Mendoza と云ふ人。

かくて眞實性が今一度際立つて來た。話を一般生活の中に求めるやうになつてから以來、續者

は常に其の話の正確を鋭く判断する人となつた。讀者は、主人公の悪事は只に巧妙である許りでなくして、實際ありうるものと云ふ事を、讀者自身の身の上に演ぜられたかも知れぬ程、眞に迫つて書いてもらはぬと承知が出来ない。従つて是れが、悪漢物語が小説に就いての近代的觀念に貢献した所のものである。——即ち作者にとりては、どうしても人生を見た通りに正確に取扱はねばならぬ必要があるのだ。

然し眞實性だけでは小説は組立てられない。然るに眞實性以外に於ては、悪漢物語は武士物語から離れて寧ろ退歩逆行した。英雄的の人物が、それからそれへと出て來て、話が横道に入っているやうな事は、悪漢物語には無論なかつた。従つて悪漢物語は、比較的短かくして且つ構想の統一に近づいて來た。然し之れに反して一方、情緒刺戟の普通の形なる戀愛の興味を失つて居るので、構想は全然有ることが出来なくなつて、話は又もや種々の事件の單なる絲となるやうに傾いた。悪漢物語の聖化とも見るべき *『ジール・ブラース』(“Chi Biao”)すらも、その巧妙に組立てた事件を結合すべき、眞の構想の興味を有してゐない。

* 譯者註、有名な作物であるから詳註を加へておく。

佛蘭西の有名な小説家、戯曲作者 J. G. (一六六八—一七四七)が、血氣盛んな二十年間を費して造つた作物で、全部で三卷、最初の二卷が一七一五年に出で、最後の卷は一七三五年に出た。主人公ジール・ブラースを中心として、二世紀以前の西班牙の凡ての階級と状態が描寫されてある。面白い事には、作者は一度も西班牙に行つた事がないのであるが、作物に現はれてゐる調子や精神が、すつかり西班牙風になつて居るため、屹度何か原本があるのだらうと云はれてゐる位だ。主人公ジール・ブラースは孤兒で、十七の時伯父から若干の費用をもらつてサーラー・マインカー大學に入學する目的で出かけるが、大學には行かないで、あらゆる階級の人と交際して色々な境遇を経て行く。法儒のやうな大膽のやうな智慧のあるやうなないやうな、御人好の僻に虚榮心のあるといつたやうな男だ。作物の構造は『アラビアンナイト』風のものと思へば間違ない。可笑味と皮肉に富んでゐる。中でも救醫師の Dr. Sangrado に關する話などは出色である。

性格の研究と背景とが益々顯著となる。話を一般生活に求めた事は、同時に一般人間の種々異つた習慣と氣持とを描寫する事となつた。『ラーザリー・ヨウ・ダ・トウア・メス』は、フィリップ (Philip)

二世崩御後の西班牙の有様を我々が知る上に於て、如何なる歴史よりも價值がある。實に此の作物の如く、作者自身の時代を諷刺的に描寫する事が、惡漢物語作者連の眞の目的であつたらしい。彼は單なる物語作者たると同時に、諷刺家であり豫言者である。

然らば惡漢物語は次の如く概括され得る。吾人が完成せる小説を見出す迄には、尙進んでやらぬばならぬ事は明かだ。

惡漢物語
の技巧

(一)構想 以前よりは退歩して、事件の單なる絲となつてゐる。然し是れがために騎士物語よりは、同一人物に就て餘計屢々談るが故に、或點に於ては騎士物語を改良してゐる。

(二)動機 主として一般生活を示すためらしい。屢々人生の種々の惡事に反對を唱へるためにすることがある。かくして眞實性は凡ての中で一番大切な要素となつてゐる。尤も批評家の中には、作者の諷刺的の目的のために話が餘りに誇張され過ぎてゐると信ずるものもある。

(三)性格描寫 以前よりは充分に描寫されてゐるが、まだ矢張外面的で、眼で見たまゝの人間の惡事・愚行のみを取扱つてゐる。

(四)情緒の刺戟 無し。恐らくは騎士物語に於ける情緒の大袈裟なることの反動だらう。

(五)背景 著しい。時としては話の眞の主題と思はれる事がある。

(六)文體 常に機智的にして且つ生々してゐる。讀者を引きつける方法を明かに認めてゐる。然し時々騎士物語の流浪的誇飾を亦やつてゐる場合がある。

惡漢物語に全然缺けて居る情緒上の緊張が、其他の西班牙の作物「ドン・キークホウテ」(“Don Quixote”) (一六〇五年)中に又幾分現はれてゐる。作者サーヴァンテス(Cervantes)はラマンチ

ドン・キークホウテ

ヤ(La Mancha)洲の騎士(譯者註、作物中の主人公ドン・キークホウテのこと也)

に對して、自ら情愛が次第に増加してきて、作物中の後の冒險談をして益々尊嚴ならしめ、益々熱心ならしめ、諷刺と云ふ野蠻な渦卷を少くしてゐる。彼は外部からは寧ろ滑稽に思はれるが、内部には滑稽が少ない。而して此の作物が、話の調子を段々と深めて且つ悲しくする事が、漠然と目的統一の効果を齎らし、わざとらしくなく構想を作つてゐる。吾人は此の作物に於いて始めて、性格構想(character plot)の芽生を見、其の性格構想が過去の作物の話の構想(story plot)に反對して、將來の小説の基礎となるやうになるのだと極言しても恐らくよから

うと思ふ。然し「ドン・キョウテ」中の性格の發展は甚だ漠然としてゐるし、且つ此の作物は先人なく又直接の後人なく、一天才の單獨的勃發の産物と認めねばならぬ。話としては此の作物は、讀者に種々の事件を單に寄せ集めた如き感を與へるが、それ等の事件の連續と結合とは作者にとつては主眼でなかつたらしい。

佛蘭西に於ける十七世紀の所謂「輕妙な」讀物(例へば Montemayor の「ダイアナ」(「Diana」)の如き)は、武士氣質と戀愛的の浩瀚な物語で成立つてゐた。是等の作物は、想像を逞ふせる全然虚偽の物であつた。如之、彼等は先驅者の出鱈目の形式を採用して全然満足してゐた。

後期の物語

此の怠けた彷徨の中に、彼等は希臘の物語の復活によりて鼓舞された。希臘の物語は、一五五〇年頃以來絶えず翻刻され一時非常な人氣を得たものである。マダム・ラーフェイイト(Madame Lafayette)ですら、小説に對して非常な貢獻をしたものゝ、構造を改良する事には何等の功績もなかつた。彼女の處女作「Zaide」を讀むと吾々は、希臘に於けるヒーリオウドラス(Heliocrus)の物語當時が回想され直ぐさま心に浮ぶのであつて、此の作物「Zaide」には、戀に心奪はれて知らぬ他國に彷徨すること、話か技業に涉れること、全然外部的の話が亂入してゐること、而してつまる所戀愛構想の弱々しい影があるのみである。

「マダム・ラーフェイイトの『プリンセス・オヴ・クレヴス』(「Princess of Cleves」)(一七七八年)も亦同様であつて、佛蘭西人は此の作物を最初の近代小説と呼ぶけれども、漠然動搖してゐる構想があるに過ぎない。此の作物中には筋が殆どなく當時の諷刺的の記事によつて、
「プリンセス・オヴ・クレヴス」
れば、此の作者は、ラー・ロウシュフーコウ(La Rochefoucauld)(譯者註、一六

一三—一六八〇。多くの夫人と私通し醜聲を流せる人。然し Madame Lafayette との交際は彼の晩年の時からであつて一六八〇年三月十七日に死去した時まで續いてゐるが單なる友人關係に止まつたやうである)と作者自身との情事を描いてゐるのだとの事だ。だが、實際の出來事は、とりとめもない淡い且つ何の感動もない行爲に過ぎなかつたから、此のあてにならぬ一片の記事に如何程の信が置けやうぞ。此の作物は屢々一寸した逸話と諷刺とを書入れてゐる。宮廷生活と宮廷人物との描寫とで埋められてゐる。吾人は此の作物と讀むと往々女主人公を忘れて仕舞ふ。主人公は全然忘れて仕舞ふ。

マダム・ラーフェイイトの此の作物によりてなされた發展は、性格描寫の點である。人間の

種々の感情と動機との解剖は鋭く且つ眞に迫つて、今迄に無かつた程微細に書いてある。だが、此の作者が空想に代ふるに實生活を以てし、始めて小説を作つたと言ふ事は、惡漢物語を無視する事になる。彼女がした事は、實生活を宮廷の話の中に求めたに過ぎないのであつて、實生活の描寫なら既に是迄に人民の話の中に存在して居たのである。人民よりは教育もあり且錯雜してゐる宮廷生活に、所謂「見る眼」(Seeing eye)(譯者註、舊約聖書、箴言二十章の十二に The hearing ear, and the seeing eye, Jehovah hath made even both of them. 「聴くところの耳と視るところの眼とは共にエホバの造りたまへるもの也。」とあり。「視る所の眼」を適用してとは着眼してと云ふ意味に同じ)を適用して、彼女は觀察を外部から内部に、行爲から思想に、肉體から精神に移轉した。彼女の作物が有するやうな構想は、全然情緒に基くのであつて、云はゞ眞の「心中の嵐」(“the tempests of the heart”)(譯者註、心は譬ふれば嵐の如く絶へず動搖して居るものだ、心中の嵐とは emotion(情緒)のことだ。)を取扱つてゐる。

彼女の作物は實に、外部生活の眞實には特別な密接をつけてゐない。作中の貴族は、いづれも皆人目につく美男で、貴婦人はいづれも美女で、戀愛が凡ての人心を支配する感情であるので、

讀み厭きて仕舞ふ。吾人は、戀愛が佛蘭西の宮廷に於てすら、果してまるで此の通りであらうかと疑はざるを得ないし亦、マダム・ラフエーイイエトは過度な空想的の物語から逃れ出でたものゝ、矢張り幾分其の影響のもとにある事を感じざるを得ない。然し此の事は餘り重要な點ではない。此の『プリンセス・オヴ・クレヴス』が、眞に完全な小説となるに欠けてゐる點は、目的に向つてもつと集中してゆくこと、單一な企を何處もでも續けてゆくこと、即ち吾人が小説の * 構想について要求して居る所の統一がないと云ふことだけである。

* 私は亦、眞の小説は『プリンセス・オヴ・クレヴス』のやうな高められた人物ばかりを取扱ふものでない云ふ事を主張したい氣がする。小説の中心人物は、貴族や貴女でなくして、その人物の感情と經驗とに讀者が同感しうるやうに、又自分の身に彼等を引き較べて見るやうに、普通の生活をしてゐる人間の中に求めねばならぬ。

それ故此の有名な作物を概括すれば次のやうになる。

(一) 構想 原因が結果に向つて眞に跡づけて、色々の絲を織込んで、情緒を高めて頂上にゆくやうになつてゐる。然し非常に餘計な問題が、構想の進行を妨害し且つ殆ど破壊してゐる。

(二)動機 作者自身の情緒の表現と作者自身の心の研究である。かくて眞實性は、此の作物のすぐ以前の作家達の作物中に眞實性が缺けてゐる事に對照すれば、非常に著しく現はれてゐる。尤も眞實は外界には考へられてゐない。

(三)性格描寫 色々の動機と感情とを微細に穿鑿し、驚く可き程深く解剖してゐる。中心人物の中には幾分性格の發展すらある。

(四)情緒の刺戟 恐らくは稍々淺薄なれども、効果の點は眞に漸層的である。

(五)背景 幾分擴げ過ぎた傾向がある。

(六)文體 洗練されて且つ雅致ありて、單一に向つて著しき變化を有し、宮廷物語の過度・空想的のものと好對照なしてゐる。

私が幾分疑はしい道を辿りて、其の裡に粗雑な路を作らんと努め、各の路に概括表を書いたが、人間思想の それ等を一列に並べるならば此の最後の概括表までに、常に異質のものになる傾向

近代發展

向があつた事を知るだらう。北歐人の古いサガ(Saga)中の六・五の作物は、彼等の悲哀と嚴格の裡に幾分の統一を確かに得てゐた。彼等北歐人は、喜劇の變化と光輝よりは、寧

ろ

『愛は結局、悲哀に終るものなれば』(“Als ie din lju liebe leide an dem ende gerne git”)

(參照『ニーベルングの歌』Zarncke 版三六三頁、八行)

とて、悲劇を集めて魂に迫る單一な力を求めた。然し北歐人以外の國は世界中どの國も、物語の作家は一般讀者が興味を固執すること即ち興味に強度をもつことには、餘り信念を持つてゐなかつたらしい。彼等は、長たらしい話を書いて其の裡に効果が含まれてゐると信じ求めた。彼等は讀者を引きつける計畫をしたが、讀者を司配しやうとはしなかつた。部分／＼で喜ばさうとしたが、全體で従へさせやうとはしなかつた。一言に云へば、彼等の企ては統一を求めるのではなくして混合を求めたのであつた。

恐らく此の事は、思想が尙幼稚で教育が乏しく、又長い話が歌はれたり聲高く讀まれたりして數日間に互つたやうな無教育な時代には必要であつたらう。然し人間は、變化しつゝ且つ段々と深味が増して來た。人生の底に横はつてゐる思想の烈しく強まる事の爲めには、中世紀の困亂から秩序を求める事が必要となつた。中世紀の物語には澤山の挿話があつて、何れの挿話もそれ／＼

興つた途に讀者を誘き入れた。強まつて來た感情の刺戟のもとに、凡て是等の挿話は遂には徐々に一つの道に向つて進み、唯一絶對の目的を指さす道標のやうになつた。統一は混合より強いと云ふ此の眞理を物語が認め、近代小説を作り出すに必要な最後の變化をさせる事を、十七・十八兩世紀の世界に於ては、此上猶豫する事が出来る筈はなかつた。

此の最後の刺戟を鼓舞して目的の力を認め、徒らに空想に走らぬやうにして、更らに一動機を充分に固執する事を感じて、眞の小説はその長さ如何に拘らず一單位でなければならぬ事を世に教へたのは、堅實眞摯にして機智に乏しき北歐人が自然とやつた事であつた。

此の教訓の痕跡は十七世紀の英文學にも認められるのであつて、該世紀にベイン女史(Mrs. Behn) (當時世間ではアルファ・ジョンソン(Alpha Johnson)と呼んでゐた)が「ヲルーノウコウ」(Oronoko)をかいて居るのである。後の近代小説に比較すると、此の作物は短いもので約三萬語しかない英國の作品が近い。書いてある事もほんの一寸した事で、作者が西印度諸島で以前奴隷にされた小説に接近

れてゐた所の、阿比利加黑人ヲルーノウコウ皇子に逢つた話を書いてゐる。ヲルーノウコウの勇壯な行爲と艱難辛苦を嘗めた事を詳述し、ヲルーノウコウの死と彼の黒人の

妻の死とを以て話が終つてゐる。作者が此の作物を書く最初の目的は、作者自身が立派な婦人であること即ち貴族の血統であること、詩的情操を有してゐる事を示すものではなかつたらうかと思はれる。然し作者が此の作物を書いてゆくに従つて、美的觀念が作者を支配し、作者がこれ迄西印度諸島に於ける奴隷制度の恐ろしい事に就いて、見たり又は想像してゐた事が作者の魂を占有りし、取るに足らぬ卑しい感情が洗ひ落されて、遂に作者はヲルーノウコウの艱難辛苦せる事、反逆せる事、悲劇的の死の事を、當時まだ文學上では見られなかつた直截と生氣との筆法で描いたのである。讀者は逃げる事が出来ない。讀者は作者の手腕に掴まへられて仕舞つてゐる。「曠野に泣き叫ぶ聲」が耳について離れない。讀者が読み終りて作物を側に置く時には、愉快と云ふ念は殆どあるまいが、話の生々した間違のない一印象を受けるのであつて、そのやうな印象は今迄の物語なら到底産出する事が出来なかつたらう。

悲しい哉作者ジョンソン女史は、自分の知つてゐる以上の事をやつたのであつた。此の作物は大成功であつたが、作者は其の理由を會得してゐなかつたらしい。作者は此の作物以外に色々の作物を出してゐるが、又候のらくらした弛みのある作物ばかりであつて、戀愛奇談の連絡もない

挿話を数多く書き、フルーノウコウをして統一ある傑作たしめし所の、あの熱心な閃きは爪の垢
ほどもない。

此の作家以外の英國の作家は、男性作家にせよ女流作家にせよ、此の作家の最悪の作物を手本
にしてそれ以上の愚作を書いた。然し統一を求める時代風潮は既に英國に生じてゐた。

ジョンソン女史が棄て、置いた途は、その途に邂逅する所の何人かのために開いてゐた。ジョ
ン・バンヤン(John Bunyan)が『天路歷程』(Pilgrim's Progress)を書いた(一六七八年)。吾人は若し
小説を選ぶなら、小説の目録から此の作物を除外して、此の此作物を譬諭譚とか説教本とか呼ん
でよからう。此の作物は確かに實際生活の話でなく、作中の人物は皆明かに典型であつて個性で
ない。龍なんて云ふものは、吾々の町通りに居て我々に向つて来るものじやないし亦、巨^{グワイアント}人が我
々の國道に居て洞の内に住んで居るものでない。然し吾々が『天路歷程』を小説でないとするも、
我々はその文學的の教訓を忘れてはならないのであつて、目的のあの熱心さ、単一な心持は、小
説が心要とする所のものであり、短い話を一束に合せたやうなものより以上のものに此の作物を
せしむる事が出来た唯一の物であつた。

『天路歷程』は一人の男の話に過ぎない。然しその男がする所の歩みは、どの歩みも一目的地に
向つてゐる。作物中の文は悉く皆、その男の目的地に到るやうに助けてゐるか、或は彼が目的地に
向ふのを妨げてゐるかである。作者の手際や機智を示したり、或は如何程面白い事であらうとも中
心目的に向はぬ事柄を讀者に談るやうな言葉は一語として書いてない。然るに此の無學な鑄掛師
(譯者曰。作者 Bunyan のこと也。彼は實際に鑄掛師の子也。譬諭に用ゐしにあらず)の此の作物
は、永久に讀者があるだらうと云ふ効果を齎らしてゐる。讀者が此の作物の説教を信じやうが信
じまいがどうでもよいが、讀者は、彼は全精神を以て口に云つた事を心に思つてゐたと云ふ事を信
ぜざるを得ない。

* 此の事はバンヤンの『バドマン君の生涯』(Life and Death of Mr. Badman)(一六八〇年)に
於ても亦云ばねばならぬ事であつて、此の作物は統一の形を與へるに『天路歷程』と同様に非
常な強度な効績を擧げてゐる。『ドン・キーホウテ』の如く動作の構想よりは性格の構想を有し
てゐる。且つ全然一つの話ではないが性格發展の表現に於て最も興味あり有名なものである。
當時の作家達が、直ちにバンヤンの指導に従はなかつたのは、ベイン女史の指導に直ちに從

はなかつたと同様であつた。恐らく大概の作家はバンヤンの作物を讀まなかつた。然し此の中心観念は世に傳播した。目的の強度は既に統一を生んでゐた。目的の強度は、無學な一鑄掛師の説教や、奴隷商賣の反對論(譯者註、天路歷程とオルノウコウを指す)等よりは、恐らくは更に、つと綿密に興味ある形に於て統一を生むべきであらう。佛蘭西に於てはブレイボウ(Prevost)の『マノン・レスロオ』(Manon Lescaut)が此の強度に近づいた。英國に於ては、デフォウ(Defoe)が自分がそれを有してゐると口喧しく斷言してゐる。デフォウの作物『モル・フランダス』(Moll Flanders)や『ジャック大佐』(Colonel Jacques)又は『ロクサナ』(Roxana)の中に於てすら、そんなものは一つもないが、彼は讀者に自分は熱心な道德上の目的を述べてゐる事を章の中にも亦歴々しく序文中にも書いてゐる。彼は、自分は讀者に對して惡の不徳を教へんためにのみ書いてゐるのであつて、急いで金儲をしやうと云ふ考で毫末も書いてゐるのではないと、頗る熱心に誓つて斷言してゐる。

此の確言は幾分は誠かも知れぬ。話に對する當時一般の要求は、倫敦に於ては、非常に盪惑的な色彩で描かれてゐる追刺や浮浪人等の話が流行をしてゐた。デフォウは、斯様な傾向の眞に

悪い事不幸な事を示し、それに反抗するために正直に企てたのかも知れない。然し若し然りとせば、實際生活に生々たる事忠實なる事は、彼の作物をして彼が企てたやうな教を人に尤と思はしめる事は出来なかつた。それ故に彼の作物は、彼が排斥してゐる惡漢物語(『ジール・ブラス』(Gil Blas)を以て惡漢物語中の大傑作とする)と同類項の中に入れねばならない。デフォウの作物は一人物の支離滅裂な冒險談に過ぎない。然し彼は、どまでも一人物について、生立ちから老年になりてその人物が罪を悔い自分の生涯の話を書きだすまでの全生涯を描いてゐる。

も一つの發展が亦デフォウに名譽づけられねばならない。彼は個性の觀念が極めて強い男だから、作物を書く以前に自ら作中の人物になるやうに努め(例へばジャック大佐になりすまし)、作物を書き終るまで自分の立場をすてない。苦し何か別の話が作物中に入りこんでも、少く共その挿入物は全然別箇の形になることなく、主人公自身によりて話されてゐるのである。即ちその話は、主人公が聞いた通りに主人公によりて繰返されてゐるのであつて、それに主人公の個性なり見解なり差出口なりが修飾して居るのである。讀者は、一時他の人物に興味を覺へて主人公を忘れて仕舞うやうな事は決してない。

デフォウから次の段階は一七四〇年に到るのであつて、此の年にリチャドソン(Richardson)の『パミラ』(“*Pamela*”)が出たのだ。何人と雖も『パミラ』に於て完全な小説を有した事を否定しない。『パミラ』は小説の主要素をいづれも有してゐる。さりながら如何なる人と雖も、『パミラ』をもつと近代の作物と比較して『パミラ』は完全な傑作だと断言するものはあ

るまい。吾々は今日ではリチャドソンの影響は全然受けてゐないのであつて、彼の作物は嘔吐を催すものであり、その情緒は虚偽であり、女主人公の名譽は商人が最高の市價をつけておいてそれから安價に賣放すやうな商品に過ぎないことを認めてゐる。然し『パミラ』を小説の先驅者として、その重大な位置から追出して仕舞ふことは決して出来ない。此の作物の素晴らしい人氣は、全世界をして小説と云ふものに考を向けしめ、小説を要求するに到らしめたるが故に、此の作物は歴史的には重大なものである。此の作物が水門を開いた。善い小説や悪い小説や毒にも藥にもならぬ小説が、洪水を起して世界を水に浸して仕舞つた。『パミラ』が世間一般の寵愛と繁榮に到る一つの新しい文學上の途を啓示した。』

『パミラ』に就いて話をするに際して最初の巻だけを指してゐる事を特に云つて置く。作者リ

チャドソンが其後付け加へた第三巻第四巻の二つは、眞の話の部分をなさず、且つ『パミラ』の成功には何の關係もなかつた。第三第四兩巻は『パミラ』の人氣につけてむ單に商賣上の企てに過ぎなかつた。

『パミラ』の直接の成功は何故か。どんな新しい事を此の作物は有して居たか。確かに此の作物は、婦人の讀者に強く訴へた。然し其の點だとすれば、リチャドソン以後の大概の作物は、向ふ側の家を訪問でもするやうに樂に同様な人氣を得ねばならぬ事になる。此の作者は性格の解剖の點が鋭く確かであつた。然し其の點なら、*レ・サージュ(Je Sages) (譯者曰、既に註をした『ジル・プランス』の作者。一六六三—一七四七)の作物もそうであつたし、マダム・ラフェーイイェトやマリーザウ(Marivaux)の作物もそうであつたし、英國作家の中ならマンリ女史(Mrs. Manley)の作物もそうであつた。

* 此の事に關連してレ・サージュのアスモディアス(“*Asmodeus*”)を忘れてはならぬ。此の作物の性格研究は“*Gil Bias*”中の性格研究と殆ど同じ鋭さがある。さらにもつと丸味を帯び、もつと巧に作つてあり、且つ性格描寫そのものゝために表はされてゐる。

『バミラ』が有してゐる他の作物が有してゐなかつた所のものは、實に『バミラ』には統一の基本的方則があつた事で、その基本的方則は少く共作者リチャドソンの場合に於ては、作者の眞に道德の向上と深い宗教的精神から生じたものである。彼の作物には、吾々が小説には無くてはならぬと主張してきた所のものを全部有してゐた。即ち、作者側に強い且つ撓まぬ一つの目的がある。作中の人物に對して眞の同情と理解とがある。どこまでもしつかりと愛憐と好奇心とに訴へる漸層的の情緒の強味がある。以上凡てから起りて、單一に結合された構想があつて、その構想の筋が冒頭より始まり、働き、續き、決して忘れられず、決して輕んぜられず、終に最後に達してゐる。

従つて『バミラ』が、凡ての以前の作物が既に無自覺に長い間攀ぢ上つて來てをつた所に向つて分岐點となり、其の分岐點から其の後の作物が凡て其の起源を起算するのは尤も千萬であらう。路の分れる處に到着したからして、今迄に進んできた迂廻せる且つ屢々疑はしい路を簡單に回顧して見やう。まづ餘り錯雜でない事柄のみ舉げて回顧して見ると、次の如き結果の連續に製表される。

回顧

(一) 文體 思想を言語に表はし、且つ思想を効果ある形と連續とに配置する方法は、埃及の話に於ては甚だ粗雜であつた。然し埃及の後期には、可なり高き發展に達し形式化される傾向となつた。希臘人も稍之れと似た展開をし、粗雜から修辭學上の完成に至り、その修辭學上の完成は近代人も及ばざる程なれども、只惜むらくは希臘人も埃及人も、今日狂熱的な文學の徒がするが如く、精巧に過ぎる邪路に墜ちた。希臘の物語も亦形式化さるゝ傾向ありたれども、言語上よりも寧ろ考へ方の上に於てとあつた。中世紀の物語は、もう一度最初のものより始まりて、亦同様に漸次巧妙になりて、精巧過ぎるに至り、騎士物語に於いて殆ど形式化となつた。次に振子は單一に振り返つた。早くも十四世紀に於いて文體は、既にボカーチオウの作物に於て言語上の完成に達してゐた。

(二) 背景 背景は、埃及の話に於ては考へられず又附帶的であつたが、現存せる希臘の物語中最古の作物によりて見るに、希臘に於ては既に著しきものとなつてゐた。ピリオウドウラス(H. Iodorus)に於ては、背景の眞の用途の微光があつて作物の深味に抑揚があつた。然し背景は、後期の希臘に於ては誇張されて、遂に希臘人は詭辨學派の全然外部的な所謂「繪畫の場面」に耽つた。

中世紀の物語は、人生の青年らしい興味のために、情緒上の出来事に於けると殆ど同様に、場面に興味を覺へ、今日の吾々ならば單に背景としてのみ取扱ふやうな題目を中心問題としてしまつた。段々と斯様な描寫の興味が衰へ、消失し、ポカーチオウ出で、から漸く背景の眞の用途が樹てられた。惡漢物語に於ては背景は新しい且つ恐らくは著るし過ぎる光景を呈した。蓋し惡漢物語は一般生活の種々の場面を描寫する故意の企であつた。田園物語(戀愛物語)も亦話には關係のない風景を取扱つた。『プリンセス・オヴ・クレヴス』(Princess of Cleves)中に於てすら宮廷生活の有様が、そればかりの爲めに緻密に書れてゐるらしい。『バミラ』出するに及んで漸く背景は情緒に對して背景たる眞の從屬的位置に復活した。

(三)情緒刺戟 情緒は、埃及の話には殆ど存在しなかつた。情緒は、初期の希臘の物語中に微かに始まつた。戀愛が、段々と、主なる情緒として確言された。最初は種々の冒險談と結合するために用ゐられ、次いで主題となつて冒險談を司配し、而して冒險談の代用をした。然しながら情緒の強度は、全作物を通じて決して永續もして居ないし漸層的でもない。恐らくはロンカス(Longus)の作物は例外だらうが、それとてもそう明白には出てゐない。中世紀の物語も同じ途を通過した。

欠

欠

代りに混合を求めた。人民の作れる短い散文の話は、自づと統一があつて、ポカーチエウとチヨ
ーサとは此の統一を五六千語の物語に擴張した。然し此等の物語の統一は「短い話の構想」に過
ぎないので、一事件の周圍に集めてゆくだけであるから、吾々が述べた如く、梯子段を上つてゆ
くやうな小説の構想ではなかつた。長い散文の話は、益々異質異様なものになつたが、マダーム・
ラーフェイイエト出で、恐らくは自分の生涯に單一の漸層的の情緒の力を認め、その力を「プリン
セス・オヴ・クレヴス」に移して殆ど統一に近い効果があつた。此の作物と同じやうに情緒生活の
強度を強めてゆく事は、さらに英國にも著しい感化を及ぼし、且つ眞摯の風潮が次第に増加して
『ラルーノウコウ』『天路歷程』『ロビンソン・クルーソー』等の作風を一掃して遂に『パミラ』が出ず
るに至つた。

かくして吾人は、近代小説の主力と價值、以前の作物と近代小説の相違點、近代小説の優れたる
點は、近代小説の有する「統一」と云ふ點に存すると云ふ一つの明白な且つ、ま、ら、ない結論に達す
るらしい。此の統一は人間情緒を深めてゆく事から生れた。かくて統一が構想の中に表はれる。――
統一は、實に性格の構想か事件の構想か何れかを作るものである――而して構想の統一は、作

家の心の中にある明白な像姿と移動せぬ目的からのみ生れる事が出来る。作家の小説をして價値あるものとせしむるものは、作家の眞摯即ち作家自身にも人生にも正直を基礎としてゐる事である。此の考は吾人を再びステイヴンソン(Stevenson)にもどす。(譯者註、第三節中に述べてある Stevenson の小説觀を参照せよ)かくて吾人は、既に引用した、ステイヴンソンが小説に對する直覺的な理解力の眞味が、段々と判つてくる。ステイヴンソンは小説家に命じて曰く。

『性格にせよ感情にせよその動機を選べ。各事件が動機の例證であり、用ゐられたる各道具が動機に對して一致及至は對照の密接なる關係を保つやうに注意して構想を作れ。……話の中に自分を入れたり、又は對話の中に無意味な人物を入れたりして、話の主眼に役にも立たぬ文即ち何の關係もない問題を論ずるやうな事をするな。……全體の事柄の根底として、自分の小説は人生の寫本でなくして、只人生の側面乃至一點を單純化したものであつて、此の意味深長な單純化と云ふ事の如何によりて、作物が成功もし又失敗もするものなる事を念頭に置き。』

後編 近代小説の發展

第一章 話構成の近代研究

以下数章

本書の前編は減多に討議されない範圍であつて、只物好きにも古くさい事を研究の目的

究する徒が、稀れに調べる位のものである。本書の歴史的回顧によりて、私は小説の主要素は何であるか、又如何にして何時其等の主要素が、初めて作家の中に認められ、讀者の中に承認されたかを發見せんと企てた。後編の目的は、小説が一般に樹立された形となつて以來の、小説の技巧の發展を跡づけやうとするにある。

後編の目的に對しては、参考書・批評的研究書・重大なる原料・作物それ自身が、頗る數多く且つ容易に手に入れ得るは、前編の目的に對して、それ等が少なく且つ散亂してゐると正反對である。實に後編は、念を入れて作物を引用蒐集し、蒐集たものを巧に綜合したなら殆ど組立られたかも知れない。手紙とか序文とかにより、乃至は更らに作物中に評論を書入れて、自分で自分の作物を評價し、又は自分の藝術の方則を評價しないやうな小説家は殆ど無かつた。文藝批評家も亦此の問題に非常な注意をした。彼等小説家や批評家は、近代小説の技巧の此の領域を、蝶々を追ふ人

の如く随意にぶらつき廻つてゐたか、乃至は同伴してゐる友の爲めに、旨まそうな御馳走を擴げることの出来る愉快な森に到着した一心で、道中主なる場所をほんの一目見ただけで自動車に乗つて疾走した。

實に斯様な事を茲に書いて、それに頗る眞面目な駁論を加へるなら到底際限があるまい。蝶々を追ふ人は性來熱狂家である。若しそれでないなら、彼は追ひ廻はすことはやらないだらう。彼が自ら捕へた美しい蝶々は、他人の捕へた南京蟲よりは彼を喜ばずに極まつてゐる。吾人が上代から調べて來た小説の六要素の中で、どの要素にも各々その鼓吹者があつて、已れの鼓吹する要素を小説構成の上のみならず技巧上からも金錢上からも、小説の成功を勝ち得る主要素だと熱心に主張してゐるのだ。自動車に乗つて疾走してゐる如き批評家はどうかと云ふに、かゝる批評家は、大概旨さうな御馳走のある場所に友達を連れてゆく前に、自分では小説國に周到な豫備的な穿鑿をやつた人なのだ。然し自分達のやつた綿密な研究を、我々に示して呉れなかつた。小説國に入らんと欲する素人は、どうしても出來得る限り躓きながら小説國を通過し、昆蟲學者の迂曲せる跡を辿り、路に残され落ちてゐる御馳走の殘片を熱心に掴まなければならぬ。

吾人は今平凡に且つ規則正しく小説國を跋行し、小説技巧の各原野を調査し、將來小説國に入り來る人々の爲めに、その領域を測量し略圖を作りおかうと思ふ。認められたるものを樹立し、それを認められざるもの渾沌と區別せんとのみ求むる人にとりては、小説國の壯麗な眺望を吹聴しまはつてゐる昔の踏査者や、現代の豫言者の心酔の言は、少しく當惑せしむるものと思はれるかも知れない。大膽なる探險者よ。汝は遙か霧の中に金鑛を發見したかも知れない。然し吾人は汝等が「をーい、をーい」と叫んだとてそのために我等の測量器械を棄てやしない。吾人の華やかならぬ論文は、直接手近に小説國の原野の圖を描かんとするにある——それは總ては立派な耕地となるであらう。

調査の 吾人は近代小説に就いて述べるに際し、リチャドソン(Richardson)の「パネラ(Panella)

方法 を以てしようが、デフォウ(Defoe)の自叙傳體のやくざ者を以てしようが、マダム・

ラーフェイエット(Madame Lafayette)の貴族的な「プリンセス・オヴ・クレヴス」(Princess of Cleves)を以てしようが、乞食的な「ラーザリーヨウ・ダ・トウアメス」(Lazarillo de Tormes)を以てしようが、いづれにもせよ、述べ出す出發點は、吾々が吾人の目的と其の目的地に達する吾人の手

段に關して、幾分確に同意する事が出来ればどうでも構はないのである。『ラーザリーヨウ・ダ・トアメス』とマダム・ラーフェイイェトの作物とは、同様に殆ど世間から忘れられてゐる。デフォウの代表的傑作「ロビンソン・クルーソー」(Robinson Crusoe)は、赤と黄とのあくどい繪と、大型な一綴りの文字で表題のかいてあるやうな、小供向きに易さしく書き直したものが讀まれてゐる位のものだ。『パミラ』も現今は讀むものなく、書齋の棚に祭り込まれてゐる。是等初期の作物は、どんな傑作でも、後ちの作物に比較すれば貧弱愚劣なものである。然し是等初期の作物は、如何に愚作でも、吾人に教へる多くの事があつて、今日の成功してゐる小説を了解せんと欲する人にとつては、注意し珍重しなければならぬ非常な價値を有してゐる。

是等初期の作物を研究するに當り、有名な作物を一つづゝ各方面から調査して、年代順に且つ概括表を示してゆく事は最早便利な事ではないだらう。小説の數も非常に澤山あるし、且つそれ等小説中に現はれたる展開も、非常に微々たるものであるから、かゝるものを討議すれば徒らに浩瀚なものになり、反つて混亂に墜ち入り、従つて展開の跡が判らずして、限りなき繰返しを廻轉してゐるやうに思はれるだらう。それ故に以下數章に於いては、今迄一所に論じて來た所の小説

の六要素を個々獨立にして、一要素づゝ其の發展を見てゆく事が必要となる。六要素が全部結合して小説を形成してゐるの見たからして、今は六要素を個々獨立に見て、小説が各獨立の要素と如何云ふ關係になつてゐるかを調べて行かう。

前編に於いては不適當と思つてやらなかつたが、後編に於いては文學史の一般的の智識を述べ、それを基として話を進めて行かうと思ふ。一七四〇年『パミラ』の出するや、小説の興味と價

小説史の

値とに對して、世界は忽ちに目覺め、次いでリチャドソンの感傷的な作風の反動とし

概略

て、フィールディング(Fielディング)が堅實な作風を以つて之を駁し、英國も外國内も、

作家潮の如く輩出し、新原野に突入して、其の當然の結果として小説の形に對して混亂と誤認とが生ずるに至つた。眼識ある人は、小説が馬鹿げた無智なものになり一般公衆が是等作物を亂讀雜食するに至らんことを憂へた。自叙傳體の作風がスモレット(Smollett)によりて又始まつた。此の作風のもは技巧上の缺點無數にして、此の作風の二十年間に、小説は形もなき渾沌の中に沈み、現代よりも修養のない澤山の駄作時代を現出した。

兎角する中にゴウルドスミス(Goldsmith) (英國の讀書界に於いては今殆ど彼の作物を讀むも

のがないが)の温和な健全な手法が既に廣く大勢力を及ぼしてゐて、外國特に獨逸は彼の作風を模倣してゐた。ゲーテ(Goethe)は自らゴウルドスミスの弟子たる事を認め、ゴウルドスミスの作風を獨逸に傳播した。ムーセイウス(Musaëus)(獨、一七三五—一七八九)やヴィーラント(Wieland)(獨詩人一七三三—一八一三)遂にはリヒテル(Richter)(獨、一七六三—一八二五)すらも自己表現の道具として此の新しい形を使つた。浪漫主義者のティーク(Tieck)(獨、一七七三—一八五三)やノウヴァリス(Novalis)(獨、一七七一—一八〇一)やホフマン(Hoffmann)(獨、一七九八—一八七四)は此の新しい形を御伽噺に利用した。佛蘭西に於てはヴルテール(Voltaire)(佛、一六九四—一七七八)とルソーウ(Rousseau)(一六七〇—一七四二)とは兩人共、小説を説教壇として利用して、それによりて眞理を教へ情緒を述べた。かくて誤解され誤用され、獨白や説教、詩歌や教訓を着衣せしめる、單に外部的の衣服として用ゐられて、小説はその正當の使命から驅逐されて、無定形と支離滅裂の深淵に沈みて、其の裡に小説は殆ど滅びてしまつた。

小説はその生れ故郷の英國に於いて救はれた。小説を救ふ助けに、繊弱な女性の直覺、即ち女らしい治療・手傳・指導が來た。まづバーニイ女史(Miss Burney)(一七四二—一八四〇)が單一誠實

な作風を示し、次いでエヂワース女史(Maria Edgeworth)(一七六七—一八四九)の驚くべき程倫理的觀念の作風や、ジェイン・オーステン(Jane Austen)(一七七五—一八一七)の完全な美的本能を發揮した作風が現はれて來た。以上三女流作家によりて建てられたる足場に立ちてスコト(Daunt)現はれ、自分の天才を傾注して、*財政不幸の世界を双肩に荷ひたるが如く文學界を双肩に荷ひ、小説をして再び尊嚴あらしめ世を擧げて小説に注目せしむるに至らしめた。

*譯者註。Dauntは、自分が株主の一人であつた印刷會社の瓦解のため二十五歳の時、凡ての財産を失ひ、凡そ十一萬七千磅の債務を負擔し、其の償還のため大努力をした事は世人のよく知つてゐる事である)

再び英國の小説が到る所に大流行となり、スコトの作風を模倣するものが輩出した。佛蘭西ではヴィクター・ユーゴー(Victor Hugo)(一八〇二—一八八五)とデュマ(Dumas)(一八〇六—一八七〇)伊太利ではマインズブローニ(Manzoni)(一七八五—一八七三)とグロッシ(Grossi)、それから少し後になつて露西亞ではゴウゴル(Gogol)(一八〇九—一八五三)ツールゲイネフ(Turgenev)(一八一八—一八八三)トルストイ(Tolstoj)(一八二八—一九一〇)等、皆彼等の作物の最初は

英國から刺戟をうけてゐたのである。

英國に於ては、スコト以後デイケンズ(Dickens)出するまでの作家は、スコトの長所よりは寧ろ缺點を學んだ。デイケンズ出で、初めて、熱情的人道愛・烈しい識見と殆どヒステリーの同情を作物に示した。次いでサカリ(Thackeray)(一八一一年一八六三)が現はれた。感動し易い所はデイケンズと同様であるが、もつと靜かに、もつと強く、もつと自己を抑制して、人生に對する小説の眞に高い態度を作物に示した。佛蘭西では、バルザク(Balzac)(一七九九一八五〇)が幅広い見地のものを、ジョージ・サンド(George Sand)(一八〇四一八七六)が詩に情緒を加味したものを、メリメイ(Merimee)(一八〇二一八七〇)やゴウチエーイ(Gouzier)(一八一一年一八七二)や其他十人以上の作家が言語に音楽を織込んだものを世に出した。米國では、ホーソーン(Hawthorne)(一八〇四一八六四)が形の纏つたものを出し、性格の奥深い魂を求めた。

以上擧げた如き代表作家の影響のもとに、小説は國家的創造物でなくなつた。小説は世界的普遍的のものになつた。最早や小説は、或る評判のよい人氣の機會に發展するものとか、又は如何に偉大なものであれ、個人的智識の出來心によりて發展するものとかの問題でなくて、小説は充分に

樹立せられ、確められたる美術的な一つの形となつた。小説の技巧の主なる方則は認められた。

後に至り、作家も批評家も數派に分裂し、手法上種々様々な特別な點を論議し主張し、ブローワー(Blauber)(佛、一八二一年一八八〇)の作風を重じて寫實主義を唱ふるものや、モーウパッサン(Maupassant)(佛、一八五〇一八九三)流の客觀を重んずるものや、ジェイムス(James)風の微細な心理解剖を好むものや、ゾラ(Zola)のやうに下層社會を描寫するものや、トルストイのやうに主なる事實を主張するものや、ステイヴンソン(Stevenson)の如く奇想的作物を好むもの等が出て來た。然し凡て是等特別な主張は、錯雜せる乃至は個人的の問題についてとあつた。廣義の方則即ち小説の主要素は、たとへ幾分漠然と了解されてゐるにもせよ、一般に認められてゐるらしい。然しながら各流派の間に一つの分岐點があつて、その分岐點は何か技巧上の論議をする際に屢々邂逅する事だからして、各要素を個々に調査して行くに先だち、その分岐點の事を取敢へず述べて置くがよいと思ふ。

何故小説が廣く世間に讀まれるかに關し、二つの鋭く相違してゐる理由がある。小説は二つの價値を有してゐる。讀者は娛樂のためとしても將亦研究のためとしても、即ち人生の嚴格な事か

流派の分岐

ら慰安を求めるためにしても將又人生の厳格な事を知らんがためにしても、小説によりて單に自分一人の狭い個人的經驗よりは、もつと廣い深い智識を得る事が出来る。娛樂のため慰安のためと云ふ事は、小説を読む讀者の百人に就き八十人位を支配する引力である事は疑ふ餘地がない。恐らく此の百分率はもつと高くする事が出来やう。しかしステイヴンソンの作物の讀者中最も不真面目な讀者でも、作中に表はされてある思想や詩味の價值について幾分の觀念は有してゐる。又これに反して、ゾラの作物を読む非常に真面目な科學的の讀者でも、全然娛樂のためと云ふ事を輕視する譯にはゆかない。それ故、以上二つの目的を小説は成就せねばならぬ。そして一方の目的が讀者を読ますための誘惑物としての役目をなすなら、他の目的はその辯解として提出される。

小説の批評家は此の二重の必要を認識せねばならぬ。極端論者はいづれが一方の側に突進し易いのであつて、前者が教訓的の作物を冷笑排斥すると、後者は娛樂的の作物を輕蔑して仕舞ふ。批評家は斷乎として自分の地位を維持せねばならぬ。批評家は真面目に中間の理想を守らねばならぬ。批評家は兩方の結果を主張せねばならぬ。もしまるで明るみも興味もない作物なら、即ち

讀了するのが苦痛であつて毎日若干の讀む時間を無理やりに割りふつてやつと讀まねばならぬやうな作物なら、其の作物は小説でなくして劣等な科學的の著書である。これに反して、若し實在とはまるで虚偽な、欺くやうな文句ばかりで悪い思想と悪い希望ばかりほかないやうな作物を読むならば、その時こそ實に

* "Our Adonais has drunk poison!" である。

* 譯者註。此の引用句はシェリ(Shelley)の「キーツの死を吊ぶの挽歌」("An Elegy on the death of John Keats")の三十六節の初めにある有名な句である。此の三十六節は天才を認められず意地悪の批評家の酷評漫罵によりキーツが死んだ事を歌つてある。即ち此の引用句を出したのは、そんな作物なら大に罵倒してやるが、いと云ふ意味で引合に出したのだ。

そんな作物は小説でなくて一つの嘘だ。私一個人としては、幸福な事には、未だ嘗て此の最後の場合の例としてもよい程、無意味な且つ全然不誠實な虚偽だらけの作物を読んだ事がない。亦前の場合の例とする程、まるで生命のない作物に接した事もない。此の問題に關する爭論者は、お

互に論を戦はして互に相譲らなかつた。然し吾人は、此の二つの極端な論争者はお互に罵り合はして、見物して居やう。一般公衆は、小説の要求として、小説には價值と興味と兩方を有せねばならぬ事を確かに主張してゐる。

小説を読む事は固よりの事、小説を書く事が非常に廣く傳播したからして、小説の解剖をするには、時々各作家の各流派に及ぼし、英國から米國へ、又佛國及び其他の國へ及ぼさねばならない。吾人は一般の變化、即ち各國に於いてなされたる技巧上の廣い改良點を調べてゆかねばならぬ。出來得る限り私は英語で書いてある作物を例として出したが、それを主として翻譯の光澤のない影響から逃がれんがためと、自國語で讀者に訴へんとするが爲めに外ならない。

私はもう一つ注意を特にして置きたい。技巧の問題は、小説が關係する唯一の問題でない事で技巧を超越 ある。世には、天才の力ある、人間思想を征服する力ある、火のやうな熱情・詩想・せる領域

光榮の力ある、技巧を超越してゐる作物がある。形態には澤山の誤謬缺點があつても、眞に立派な作物があつた。技巧上完全な小説を作つても、尙つめたい且つ退屈な作物となるやうな事は、必すある事と云はないまでも、あり得る事と考へられる。然しながら此の注意は、

技巧の問題が一番大切な事、並びに技巧を明白に了解する事は作物に興味を増し作物の成功する機會を増するに異ひないと、私が本書開卷早々に申出でた事と、矛盾してゐない。

本書は、小説技巧の廣汎な研究以外の事は何も企てゝゐない。説話の凡ての形態に等しく適用する所の、修辭學の規則を考へやうとは努力してゐない。亦本書は、小説と小説以外のものとの關係を考へてゐるのでもない。本書は小説の歴史でなくして、特に小説の要素を解剖してゐるのである。少しく歴史めいた點もあるが、それは小説主要素の何れをも、その眞の用法によりて考へ、さつと年代順を追ふて連鎖を見てゆけば、恐らくは主要素の事を早く了解させる事が出來ると思つてやつたに過ぎないのである。

第二章 構 想 (Plot)

構想の重大なる事

『構想は實體(things)である。』此の事に就いては、吾人は列挙する必要がない程なる事。澤山の批評家によりて確かめられてゐる。恐らく小説になる迄の諸作物を討議し、且つ人生に徐々に統一の自覚が深まり來て遂に「構想」をなした事を指摘するに際し、私も亦此の「構想」と云ふ要素を、小説の諸要素中最上のもものと殆ど斷言したに等しかつたかも知れない。然しながら、かゝる意味の斷言と考ふる人があるならば、それは私が「魂の途」と暗に云つた所の、あの高尚な意味に於ける「構想」と思ふが爲めの結果に違ひない。普通一般には、此の「構想」と云ふ語は、單に外部的構想即ち「話の筋」、色々の事件を連續連鎖して一つの結果に誘くやうにする事と云ふやうな軽い意味と思はれてゐる。従つて此の問題に就いて、二三の標準作家によつて云ひ表はされてゐる見解を尋ねて見る事が都合がよいと思ふ。

前編に於て述べた小説の定義に關する見解は、大概「筋」の重大な事を主張してゐるのである。或はブランド・マスウィズ(Brander Mathews)の言に傾聴するもよからう。小説の手法に關する論

文中に於て、彼は次の如く云つてゐる。

『筋を繼續しないような事は何んにも作物中には書いてはつけなく』と。

作家側に求むれば、マリアン・クロフフォード(Marion Crawford)(米の小説家、一八五四—?)は、近頃出した小論文中に於いて、小説を懐中脚本(pocket-play)と呼び次の如く云つてゐる。

『言語に訴へる手段方法は澤山あるが、其の目的は常に一つである。即ち作家が自分の作物の筋を出来るだけ讀者に判らせるやうにする事である』

英國の代表的散文作家として、ナイト爵に列せられたと考へて居るのはサー・ウォルター・ベサント(Sir Walter Besant)(譯者註。英國の小説家、一八三六一—一九〇一。一八九一年にナイト爵に列せられてゐる)であるが、彼は『小説の手法』(“Art of Fiction”)の講演中に於て、凡ての中で第一に大切な事は筋である事を述べたのち、次の如く云つてゐる。

『筋なんか必要じゃないと云つてゐる一派が世間にある。その一派は「どんな筋でも既に話された筋だ。それ以上工夫をめぐらす餘地はない。何人でも最早筋に傾聴しやうと思ふものはない」と云ふ。……よしんば吾人がそう考へるにしても、吾人が小説はどこまでも入用だ

が筋は入用でないと言ふ事は、誠に奇妙な不思議な説だ。我々凡ては、話を語る方法を訓練して居つた。然るに茲に、此の新しがり一派が、貧乏人の研屋のやうに出しやばつて、話されずにあるやうな話の筋は一つもない等とぬかす。馬鹿な事だ。萬事皆筋で、話の筋ほど大切なものはないじやないか。私は全然話の筋がなくて進行してゆくやうな世界が世にあらうとは思へない。種々様々な筋、その話の筋の中に事件があり、愉快も悲哀も笑も涙も、又何が次に起つてくる事かと不思議に思ふ刺戟もあるのだ。幸福な事には、是等新しがり説を立てる一派は、矛盾撞着してゐる。何となれば、此の一派は、よしんば筋がほんの一寸したものにもせよ、筋を含まぬ所の小説をかく事は到底不可能の事を見出したからだ。』

私がベサント氏の言をかく長たらしく引用したのは、氏の努力にも拘らず、構想の優越なる此の點が全無承認されてない事を暗示してゐるからだ。ベサント氏の見解と反對の見地に立つ人には、ゾラ(Zola)譯諸註。佛蘭西の有名なる寫實派小説家、一八四〇—一九〇二の如き有名な批評家がある。ゾラは、將來の小説家は全然筋を無視するに至る事、即ち何でも手あたり次第の機會を捕へ人生の繪畫を精密に描寫せんと没頭するに至ると云ふ意見を述べた。又ハウエルズ氏(Mr.

Howells)は近頃出版した著書の中に、「自分は今迄ステイヴンズの作物を一つも讀んだ事もなければ讀みたいとも思はない。ステイヴンズの作物は、全然奇談即ち筋だと云ふ事を知つてゐるからだ」と云ふ幾分驚く可き告白をしてゐる。

さて、問題が擴がり過ぎたからこれで切り上げて、本章の目的たる「パミラ」(Pamela)以來の諸作物中に現はれてゐる構想の用方・効用・發展の跡を尋ねて見る事とする。何が爲されたか、如何なる効果を以てなされたかを學ぶ事によつて、吾人は底に横はつてゐる價值につき、幾分の觀念を得る事が出来る。

「パミラ」は、既に指摘した如く、單純ではあるが、明白に著るしい且つ持續した一つの構想を有してゐる。女主人公パミラは、外部の攻撃によるのみならず亦彼女自身の情緒の高潮によりて、リチャドソンは構

想の價值を知らず 今にも淪落せん許りである。彼女の運命如何の問題が、此の作物に於ける唯一の問題である。此の問題のために、讀者は此の長編の作物を讀むに従つて、絶へず不安の念が増し、最後に稍固苦しい且つ世間並の結婚ではあるが、兎も角彼女が結婚の勝利を得て、彼女も讀者も共に始めてほつと愁眉を開くのである。これが此の作物の眞の結

果である。然し後に至り、作者リチャドソンは、長さが第一巻と同じ位な巻を附け加へた。最初の巻とは、まるで関係もない場面であつて、女主人公パミラが交際社會に位置を占めてから以後の種々の苦勞を描いてゐるのである。して見れば、最初の巻に於ける構想の力は、少く共幾分の程度迄は、作者には偶然的のものであつた事、即ち構想の價値は作者リチャドソン自身にも認められなかつたやうな氣がする。

それにも拘らず彼の第二の最傑作『クラリサ・ハアローウ』(“Clarissa Harlowe”)は、『パミラ』と同様な強度の構想がある。描寫されたる舞臺は大きいが、構想の點だけでは全く同様である。『パミラ』に於ては構想は單純であつて、書牘體の女主人公(譯者註。パミラの事なり、リチャドソンの作物は皆書牘體で出来てゐる)一人が明白に描き出されてゐる。たとへばパミラ以外に、その夫と稍々影のやうな牧師ウィリアムズ(Williams)と、さらにもつと影のやうなジュークス夫人(Mrs. Flos)を加へた所が、全部で作物中の主要人物と見るべきものは四人に過ぎない。之れに反して『クラリサ・ハアローウ』に於ては、約十五人位充分に性格づけられてゐる人物がゐる、どの人物も皆作物中、話を進行さす上に於いて重大な役目をしてゐる。且つその約十五人以外に、別に約十五

人ほどの人物——例へば淫賣屋の主人や葬儀屋の主人等がゐる。是等約十五人程の人物は、作物中でたいした役目をしてゐるのではないが、それでも『パミラ』中のジュークス夫人位の役目はしてゐるのである。主要でない人物、即ち下女・下男・友達・市民・百姓等が澤山かいてある。それ故此の作物は、『パミラ』よりは舞臺が確かに廣いのであつて、そんな舞臺をリチャドソン以前のデフォウ(Defoe)の如き作家が取扱つたなら、必ず話が横道に入つて、それからそれへと機會を追ふて、きつと構想が纏まらないだらうと思ふ。然しリチャドソンは、決して一時たりとも話の進行を亂しはしない。たとへ、彼がどこまでも構想を亂さなかつた事が、本能的の事に過ぎないにしても、それだけで既に充分に驚異に價する。而かもその構想は、強くなると同様に、單純でもあり擴げ過ぎてゐない。

此の上もない立派な素質ある女主人公クラリサ(Clarissa)は、種々様々の原因と影響のもとに、輕卒にも駢落をしなくてはならぬやうになる。愚かなパミラよりは、遙かに高尚な精神を有せる彼女は、自分の運命に反抗奮闘するが、到底運命には敵し難く、彼女は遂に墮落して仕舞ふ。作物は此の頂上^{トピックス}に達するに、冗漫にも四巻を費してゐるのである。然し開巻最初から、目的地は

着々と目指されてゐて、一語一語とそれに近づいてくるやうに書いてある。此の頂上に達すると、それから次に不可抗力の運命を、同様に冗漫な筆致と自信とを以て書き、作者はその結果を解決する。そして更らに此上四巻も費して、クラリサは自分の情事を處理して死ぬのである。『クラリサ・ハアローウ』の戲曲的構造が技巧上完全な事は、初期の小説に於いて最も著るしい點の一つである。

リチャドソンの以上の二作物は、何れもその發行當時には一卷づゝ巻を追ふて出して、毎巻出る毎に作者の周圍に讀者が群をなして集まり、クラリサの死なぬやうにと作者に哀願したとの事だが、そんな話を聞くと私は、作者は自分の作物を成功さす大きな否な一番大きな要素は構想である事を悟つてゐると思ふのである。クラリサの性格は、實に一般讀者によりて非常に感嘆された。然し此の作物の前後四巻を通じて讀者に、ハラ／＼と思はせるのは、彼女の性格ではなくして、彼女の運命即ち彼女の身の上であつた。

勿論吾人は、今日では、以上の二作物に對して別な見方をする。是等作物の、長たらしく苦悶をつゞけて中々解決をつけない作風は、近代人には到底辛抱の出来ない事である。私はこの作物

の最初の四巻を、大學の學生に、讀んで見よと毎年受持の級ですゝめて見たが、四巻目の中頃まで眞面目に讀んだ男が一人居ただけで、流石に其男も中頃以下は飛び／＼に讀んで仕舞つた。一方、學生が飛び／＼に讀みながらも、此の作物を必ず最後まで讀む事は注目すべき事である。換言すれば、學生が眞面目に讀まないのは、無頓着なのではなくして、辛抱しきれないがためである。リチャドソンの作物は、緩慢過ぎるのではなくして、餘りに念入り過ぎて近代人の興味に適さないのに過ぎない。

我々小説界の偉大なる先驅者リチャドソンは、我れ知らずに以上二作物の成功をしたのであると云ふ印象を吾々は得るのであるが、彼の最終の第三の作物『サー・チャールズ・グランディソン』(“Sir Charles Grandison”)を讀むと、乍らに此の印象は深くなるのである。此の作物では、作者は最早統一を得るに必要なところの作物全體を司配する觀念、一つの目的と云ふものを持つてゐない。此の作物に於ては、作者は理想的の紳士を描かんと企てた。此の區別には大に注意を要する。最初の二作物には、何れも性格と奮闘とがある。即ち、性格に加ふるに其の性格の動作があり、筋が通り、情緒がある。然るに第三の作物には、性格があるばかりである。主人公グランデ

イスン(Grandison)は自分の欲する所の事をしてゐるのかも知れない。かくて作者は、心の中に豫め定めて置いた構想、即ち定まつてゐる觀念はありながらも、それに拘束されず否それに導かれずに、徒らに舞臺を擴張せんと企て、人物を澤山かくに至つた。その結果として、作者は不確實に踏み迷つた。グランデイスンには、出てくるどの事件も都合よくなつてゐて、運命に司配されるゝやうな事はない。彼は運命を全然自分の手中に握んでゐる。従つて吾人は、主人公に對しては何等の心配を感じない。吾人は次の話が如何なつてゆくかと、ハラ／＼と息もつかずに讀むやうな事がない。直ぐに念頭に無くなつて仕舞ふ。此の作物は失敗の作であつた。失敗の原因は、優柔不斷な弱々しい構想のためであると斷言するのは、今日では證據を擧げる事は不可能だが、兎に角リチャドスンが自分の傑作だと思つてゐる此の作物は、其の當時に於てすら、作者が前二作物によりて得た驚くべき評判の餘波によりて讀まれたに過ぎない事は事實である。今日此の作物を讀む人は殆ど居ない。私は此の『サー・チャールズ・グランデイスン』の全八巻を充たしてゐる限りなき無生氣と狂喜とを通讀しなければならぬ仕事程、文藝批評家にとつて骨の折れる厭な仕事はないと思ふ。

リチャドスンは構想によりて名聲を博し、自らは構想の價値を知らなかつたらしい作家であつた。之に反して、フィールディング(Fielding)は熟慮の人で、常に計畫を立て作物の効果を量りフィールディングは且つ解剖してゐた。フィールディングは、リチャドスンに缺けてゐた所喜劇の構想を用ひ、特殊の技巧上の訓練を有してゐる作家として現はれた。彼は大學出身の紳士で、従つて文藝を味ふ幾分の抱負があつた。彼は裁判官であつて、職業柄機智に富み、嘔吐を催すやうな情緒的な事を描寫するを好まなかつたらしい。彼は戯曲家としても可なりに成功を収め、従つて小説に密接してゐる戯曲の構造組立に熟練してゐた。

構想が、戯曲に於いて此上もなく重要なものである事を考へると、フィールディングが自分の作物中に何故もつと澤山に戯曲の構想を適用しなかつたかと幾分不思議に思はれる。フィールディングは、處女作をお祭氣分で書き始めたのである。即ち彼はリチャドスンの『パミラ』を笑殺罵倒する目的で『チョウチフ・アンドルーズ』(Joseph Andrews)を書いたのである。最初彼は、滑稽な事件をかいて、主人公チョウチフの極端な謙遜と徳義とを嘲笑するために、此の作物を書き出したものらしい。ところが、作者を掴まへ此の價値もない企に價値を與へた力は、彼が作中の人

物を書くに従つて、それ等の人物に愛情を催すに至つた事であつた。牧師アダムス(Adams)はその一例である。人物・場面・事件及びそれ等を書く際に、それ等に對する作者の鋭利な筆法・觀察が、此の作物の價値を成立してゐる。しかし此の作物の構想は極く初歩のものたるを免れない。

『バミラ』が世間の人氣を博したに反して、此の『ヂョウチフ・アンドルーズ』が毫末も世間的成功を得なかつたのは、構想が不十分であつたが爲めであつたらうか。『バミラ』に比し人間生活の智識は十倍も廣く、又人生の見方は十倍も高いけれど、その當時に於いて(恐らくは今日でも)、此の作物は非常に偉大な非常に人を引付けるものとは思はれなかつた。此の作物は、作者の遊戯であり、作者が深い自己によりて鼓吹せられてなく、つまり作者が大作を出す前の豫備作に過ぎなかつた。

之れに反して、『トム・ジョウンス』(Tom Jones)に於いてフィールディングは、小説の新しい形を熟慮研究し、自分の人生觀を作中に示した。彼は、リチャドスン及びその一派の作家の、形式的な道德觀に反旗を擧げんと欲した。彼は、偽君子的口吻や虚偽を發き、法律の文句以上に精神を高唱し、實際の人間が感ずる事は人間が云つたり爲したりする事よりも、又は恐らく反逆的

な動機を心に抱きながら道學者的な行爲をするよりも、寧ろ人間の眞の評價の中に會得されねばならぬ事を主張せんと欲した。故に吾人は、『トム・ジョウンス』は充分に計畫され考へぬいた作物たる事を認めるのである。毎卷(譯者曰。全部實に十八卷)の第一章に於て、作者は自己の藝術を論じ、其の方則を説明し、自己の作物中に於ける方則の適用を指示してゐる。勿論此の事自身は本文とは區別がしてある。然し、實に熱誠をこめた注意深い研究である。是れ等序文の數章を度外視しても、(私は十中八九迄讀者は、是等の序文を度外視すると想像する)此の作物は、巧に組立られ、巧に結合されてゐる構想を有してゐる。私は「組立られて」と云ふ語を用ゐる。何となれば、此の作物には明かに、整列され構造されてゐる建物があるからだ。リチャドスンの傑作の大特長たる、河の自然に流れ出てゆくようなものではないからだ。

フィールディングは戯曲の智識があるから、彼は此の作物に、リチャドスンの單純な頭では考も及ばぬ「密謀」(intrigue)と「意外の事件」(surprise)とを用ゐた。即ち作中に秘密があつて、その存在が始めから告げられてゐる。主人公トム・ジョウンスは捨子として表はされてゐる。彼の素性は讀者には隠してある。然し、彼が拾ひ上げられた當時の状況からして大體想像がつくし、且つ彼

の素性に關する暗示が各章に、と、ころ、と、ころ、暗示されてある。かくて作者は、自分の工夫を廻らし、巧に讀者に謎を解かすやうに話を進めてゆく。好奇心が生じてくる。

次に、欺かされて主人公トム・デウズは養家より追放され、幸福と愛とを奪はれて仕舞ふ。讀者は、トム・デウズが悪漢を追拂ひ戀人ソフピア (Sophia) を手に入れるまで、彼の身の上の同情して話を讀みつけてゆく。此處までくると、興味の多くの糸がことさらに讀者に提供されてゐる。リチャドスンなら只一つの糸のみ續けてゆく所だ。リチャドスンの「クラリサ・ハアローウ」に於ては、運命と情緒とが段々強くなつて頂點に達すると、次は龍頭蛇尾で、大團圓まで長たらしく興味が消えてゆくが、フィールディングの作物はそんな事なく、纏れた糸の中にも、主人公トム・デウズと女主人公ソフピアとの周圍に、半は二人の缺點のため、半は他人の片意地と欺瞞とのために、降り積つてゆく種々の困難が一連鎖をなして續いてゆくのである。秘密が積り積つて最後の幕に至ると、——戲曲上の言葉が自然此處で使ひたくなつてくる。蓋し排列の順序は明かに喜劇の舞臺のものを借用してゐるからだ——其の時に、悪漢の奸策が脆くも且つ思ひがけなくも失敗に終り、次から次へと悪計が曝露され、次から次へと錯綜が解けて、遂に一般

小説と同じやうな大團圓に近づき、作物全體の秘密が解決され、悪漢共は撃退され、主人公と女主人公と結婚して結末となる。

『トム・ジョウズ』は傑作である。然し私は今こゝで、この作物の疑もなく偉大なることを再び斷言せんと企てゝは居らぬ。私は單に、構想についてのみ此の作物を調査してゐるのである。構想の點に關し、此の作物に溢美の言を下してゐる人が非常に多いが、それは多くの素人を誤らすものである。コウルリヂ (Coleridge) (譯者註 Samuel Taylor Coleridge のこと、英國の詩人、哲學者、批評家、一七七二—一八三四) は、古人の作物中に、此の作物の構想と同一項類の中に入るべき作物を求め、此の作物は完全な古典的三代表作物の一つであると云ひ、又後の批評家の中にも、コウルリヂの言葉に共鳴した人もあつた。然し私は、それ等三代表作物は、完成してゐる紙箱のようなものに思つてゐる。奇術師が、箱の中から嵩張つた品物を驚くべき程澤山取り出す。そんな澤山な品物が箱の中にあつた事はびつくり仰天した事で、取出した品物全部を再び箱の中に收めることは到底不可能の事と思はれる。然るにプレスト (Presto) (譯者註。奇術師がやる掛聲で感嘆詞だから譯語はない) と掛聲して、其の奇術師が自分の奇術用の混棒を振ふと、取り出した種々

様々な品物全部がもとの通りに箱の中に入つて仕舞ふ。どんな品物でも入らないものは無し。一つとしてはみ出てゐるものもなく緩くなつてぶらさがつてゐる物もない。諸君！ 諸君自ら其の箱を調べて見よ。實に不思議で驚く事だらう。けれど畢竟するに、こんな事は奇術師の卓越せるもの、數學家が方程式を解くやうなもの、單に一つの機智に過ぎない。何等偉大な風韻はない。非常に心を奪ふ興味があるとは思はれない。約言すれば、『トム・ジョウズ』の構想や筋は、機械的に完成してゐるけれど、些細な外面的のもので、人生の種々の事件や、人生に符合したやうな事に、蝶番をつけてゐるに過ぎないのであつて、人生のより深い原因結果を接合してゐるのではない。吾人はブランダ・マスウーズ教授の

『作物の手法は最初は不可能な事(impossible)を取扱ひ、ありやうもない事(improbable)からありやうな事(probable)に移り進歩し、最後に必ず起る事(inevitable)に至る』
と云ふ鋭利な評論を絶へず想起するのである。

然し此の有名な作物を検査するに際し、もう一つ注目すべき點は、此の作物に於ける挿話の取扱方である。主人公トム・ジョウズが倫敦に旅行してゐる間に、主人公にも構想上にも、何の關

係もない所の色々の珍らしい話を書き入れてある。そして、少く共一時此の作物は平板に流れ、

挿話の用ひ

前後に關係もない一隱遁者の生活の話が數章を費して書いてあつて、其の話を主方
人公トム・ジョウズが傾聴してゐる仕組になつてゐる。フィールディングは、作

物中に挿話を取扱ふことを論ずる人で、彼は長い作物には讀者の注意力の緊張を緩和するため挿話を書き入れる事の必要を主張してゐるのである。

此の作物のやうに最も大膽な形で挿話を書き入れる事は、今は全然小説には行はれてゐない。

『さて讀者諸君よ。(私は同じ話ばかり續けて來たから) 諸君を苦しめ悲しくさせはせぬかと心配だ。(だから) 私は諸君に別の話をいたませよう。……もう諸君の心も落ち着いたから以前の話のつゞきを始めませう。どうぞ三章以前に立ち返り、話がどうなつて居たかを見て下さい。』

このやうな具合に作物中に挿話を書き入れる事は、今日の作家には到底考へ得べからざる事だ。私は敢へて考へ得べからざる事と云ふ。然しトム・ジョウズ程極端でなければ、挿話は今日でも多くの小説に於て用ゐられてゐる場合がある。作物中の人物の邪魔にもならず種々の場面中に用ゐられ、それ等の場面は中心の話を進ずる事が出来なくても、作者によりて主要と思はれてゐ

る何か他の企を強めてゐるのである。

勿論戯曲は、舞臺に上場するもの故、戯曲に於ては、挿話は屢々全然もつと外部的である。舞臺では、挿話の目的は、明かに、餘りに極端な緊張を破る事であつて、吾々に慰安を與へるものである。然し既に述べた如く、戯曲は、小説とは異なつた技巧を要するものだ。小説の讀者が小説の調子に疲れた時に、讀者は讀んでゐる作物を暫時讀まないで居る事も出来るし、又他のものに氣散しを求める事も出来る。戯曲は、座つてゐて見てなければならぬ。加之、舞臺上に於ける人物は、實際に眼前に見てゐるのだから、舞臺上の人物の情緒なり危険なりに關する觀察の觀念は非常に強くて、觀客には救助が必要であるのは尤である。之れに反して、小説中の人物は、讀者が實際に眼で見えてゐるのでないから、作物中に絶へず餘計なものを挿入すれば、印象が弱くなつて仕舞ひ、明確なものを掴むことが不可能となる。

トロラプ(Trollope)(英の小説家、一八一五—一八八二)は、自分の自叙傳中に於て、挿話に關して次の如く云つてゐる。

『小説の中には挿話を書いてはならぬ。作物を通じて、一語一文たりとも、作物の主題を語る

やうにすべきである。挿話は讀者の注意を散亂さす。しかも常に不愉快に散亂さす。『ドン・キーホウテ』中の挿話『The Curious Impertinent』や、『トム・ジョウズ』中の挿話『山の男の生涯話』(譯者註。此の挿話は『Tom Jones』第八巻中にあつて六回を費してゐる頗る長いものだ)ですら、誰か此の感に打たれざるものがあらう。サーヴァンテスとフィールディングですら然りとすれば、誰か作物に挿話を用ゐて成功を望むものがあらう。諸君が書かうとする小説が、長くなければならぬとしても、其の作物を全部一貫せるものとせよ。そして、挿話をかゝぬ代りに、最も微細な事を作物中に書くべきである。』

それ故、最初の考にもどりて、フィールディングの構想の組立は、戯曲家特に喜劇作家の構想の組立である。従つて、小説の技巧が喜劇の技巧と相違してゐる限りは、その相違だけフィールディングは失敗してゐるのである。

スモレット(Smollett)は、リチャドスンとフィールディングとの直ぐ後に出た作家中最も有名な作家であるが、構想上に與へた効績は、リチャドスンやフィールディングか與へたものより以下のものであつた。構想上に於いて、彼はデフォウの作風に逆戻り類似してゐる。彼の初期の作物は、

十八世紀は内部的
構想に向ふ傾向

いづれも皆一人物の生涯を書き、主人公は多くの場面と連絡のない色々の
冒険談の裡をうろついてゐる。實に、スモレットの最初の成功作「ロデリック・
ランダム」(Roderick Random)は、殆ど全然自叙傳式であつた。然し幾分連鎖の觀念を、彼は既
に周囲の多くの作物から得てゐた。彼は、常に女主人公の情事をかき、一度その情事を書き初む
るや、不思議な話の最後まで書き續ける。最後に女主人公は主人公と結婚して終局を告げる。此
の點はデフォウの作物の主人公が、老人になつて後悔をしてゐるのは趣を異にしてゐる。
構想の發展上遙かに重大なるは、スモレット以上の二大作家ジョンソン(Johnson)とゴウルドス
ミス(Goldsmith)の作物であつた。當時の文壇の首領たる此の兩人は、文學上各方面に手を出した
が、小説としては各自單に一つほか出さなかつた。即ちジョンソンは「ラセラス」(Rasselas)だ
け、ゴウルドスミスは「ヴィカー・オヴ・ウエイクフィールド」(The Vicar of Wakefield)だけだ。而し
て此の作物は兩方共、いづれも勿卒筆を走らし餘り考へもせず書いたものだが、技巧の必要さ
を本能的に會得してゐる事を示してゐる。ジョンソンの「ラセラス」は、或る一つの感激の力のも
とに一氣呵成に書かれたものだと言ふ話だ。(譯者曰。僅々一週間の中に脱稿したとの事だ)。例

によつて目的の統一が、此の作物では構想の統一を生んだ。作者は、凡ての肉體上の幸福を有せ
る人が、精神的幸福を求めんがために、肉體上の幸福をすて、眞の幸福を求めしも、此の世に精
神的幸福の求め難きを知り、失望慨嘆し、吾人はもつと高尚なる考を抱かざる可からずと云ふ事
を描かうと思つた。

悲しい哉、ジョンソンの重々しい冗語使用の筆法は、此の作物を殆ど學者の書齋に閉込めてし
まつた。若し此の作物の、誇張的で不用な文字や冗語たつぷりな點が苦にならない人であるなら、
古典的作物の復活として、此の「ラセラス」を讀みて享樂し、大いに利する所があるだらう事を疑
はない。

譯者註。ジョンソンは平素「人慾の虚空」(Vanity of Human Wishes)と云ふ人生感を抱いて
ゐた人である。人慾の虚空を論じたものゝ中最も著るしいのが此の「ラセラス」である。

正しく書けば「ラセラスの歴史」(The History of Rasselas)と云ふ表題だ。アビシニヤに
「幸福な谷」と云ふ幸福な土地があつて、其の土地に生れた皇子ラセラスが肉體的幸福をす
て、精神的幸福を求めんとした事を書いたものだ。今は餘り讀むものはないが我國では一

時非常に讀まれた作物だ。

ゴウルドスミスの『ヴィカー・オヴ・ウエイクフィールド』は全然これと異つた作風と思想であるが、此の作物にも亦構想の統一がある。作物の觀念はリチャドスンに似てゐる。然し作者ゴウルドスミスは、善良な娘を書かずして善良な男を書き、其男に色々の苦痛を嘗めしめて、其男をして凡てのものより優れたるものたらしめ、遂に最後に非常な不幸が生ずるや、最初の數章に書いてある一寸した不幸以上に其男の立派なる男なる事が描き出されてゐる。これは、技巧上性格構想(character plot)とも呼ばるべきものであつて、此の作物に於ては、リチャドスンの作物に於けるよりは遙かに主觀的で、遙かに外部的情緒を描いてゐる。

『パミラ』も亦、言語の緊張によりては、性格構想があると云つてもよからうが、兎に角『パミラ』に於ては讀者の興味は、客觀的なもの、外部的な結果の周圍に全部集中する。パミラが不幸から逃れるか不幸に勝つか敗れるかが讀者の興味の集まる點だ。『クラリサ・ハアローウ』に於ても亦同様だ。然るに『ヴィカー・オヴ・ウエイクフィールド』に於ては、讀者を引きつけるのは主人公プリムローズ(Primrose)の展開であつて、彼が蒙る所の出來事の稍々幾分機械的な連鎖ではない。

實に種々の出來事の機械的な連鎖は常に不自然に感ぜられるのである。作者ゴウルドスミスすら、最後にはそんな不自然な連鎖を續けるのが厭になつたらしく、とてもありそうも無い事をかいて、主人公をして一見回復しがたく思はれる不幸から救つて結末をつけてゐる。従つてゴウルドスミスの唯一の小説たる此の『ヴィカー・オヴ・ウエイクフィールド』は、作物の錯雜の中に細密なものがあり、作物の筋の中に突然ありそうもない事が書いてあると云ふやうな外部の構想を有してゐるのであつて、其の點では『トム・ジョウンズ』の構想と同様だ。そして人をして尤と思はしむる力が弱い。然し此の『ヴィカー・オヴ・ウエイクフィールド』は、亦『トム・ジョウンズ』よりは遙かに重大な且つ遙かに眞實な主觀的思想があつて、それが作全體を司配してゐる。批評家の中には『トム・ジョウンズ』の中にも亦性格構想があると考へてゐる人もあるが、たとへあるにしても作物を司配してゐる程のものではない。それ處か、性格構想は弱々しく動搖して、屢々『人生の繪畫』の開拓を全然忘れてゐる。

リチャドスン、フィールドディング、ジョンスン、ゴウルドスミスの時代に於て、構想上此の四大作家の作物と肩を並べ得る二流作家の小説を注意して尋ね求めたが、私は一つも發見する事が

出来なかつた。依然としてデフォウ流の冒険談が作物の題材として用ゐられてゐる。そんな作物に關して、かれこれ云ふのはつまらぬ事だ。佛蘭西に於ては、ヴォルテイル(Voltaire)とルソー(Rousseau)の二大作家は、いづれも通俗な作風を用ゐた。然しヴォルテイルの二作物『ゼイディグ』(Zadig)と『カンディード』(Candide)、ルソーの二作物『新ヒロイス』(New Heloise)と『エミール』(Emile)とは、いづれも實際は作者の哲學的論文と見るべきものである。是等の作物は、適當な名前がないので小説と呼ばれてゐるに過ぎない。實際、作者ヴォルテイルすら、小説を非常に卑んで『眞面目な心の人には、讀む價值もない事を易しく書いてある通俗の作物』と云つた。

獨逸に於ても亦、小説はヴィンランド(Wieland)やムーセイウース(Musaens)や其他によりて早くから企てられてゐるが、技巧上に於ては英國作家より遙かに劣つてゐる。獨逸の小説が著しき手法の形に上つたのはゲーテ(Goethe)を以て始まつたに過ぎない。ゲーテ自身の云つてゐる如く『ウエルテルの悲み』(Sorrows of Werther)はゴウルドスミス(Goldsmith)の感化のもとに書かれたものである。此の作物も亦、歐洲全體に非常な影響を與へた。此の作物にも亦、英國の作物に於けると同様に構想の統一がある。主人公ウエルテルが、戀慕ふも望なき苦惱は段々と深まつて來て、遂に

は苦惱を抑へんとする力もなく望もない。憂鬱が徐々に彼を司配し、遂に自殺せしめるに至る。これが力強き構想を與へ、その構想は何時も忘れられない。單純な觀念が作全體をいつまでも司配してゐる點に於て、『ウエルテルの悲み』はリチャドソン(Richardson)の傑作と比較される。

ゲーテ(Goethe)の後期の作物 *『親和の力』(Elective Affinities)は、同様に力強く明白に取扱はれた構想を有し、さらに多くの人物を描寫し、より廣い舞臺の上にかゝれてゐる。然し、ゲーテの苦心の大作 "Wilhelm Meisters Apprenticeship" に於ては、構想はつまらぬものとなつてゐる。少く共構想は外部的にあるばかりで、視覺上の構想である。此の作物は、主人公マイスタの心が段々と擴がりゆきて、人生の種々の教訓を知るに至ることを示さんと企てゝゐるが、多くの頁を費して、天地間の凡ての事物を哲學的に見てゐるがため、途中中断され、讀者はその企を全部忘れ、何人も此の作物を小説と思つて讀むものはない。此の作物を讀了した後ならざれば、吾人は

『マイスタは如何にもよく吾々凡ての生活を概括的に表はしてゐる。吾々は徒らに宇宙に對して心酔し反抗することを止めて、清くこれに服従し、贊同するに到り、又到らねばならぬこ

とを知る』

と云ふことは云へまい。——それも、しばらく熟慮したのちでなければ云へまい。

* 譯者註。ゲーテの「ウエルテルの悲み」及「ウイルヘルム・マイスタ」世に周知の事だから云はぬが、小説の技巧上の見地からは「Elective Affinities」は一應知つておく必要があるから一寸簡単に書いておく。此の作物は獨逸語では「Wahlverwandschaften」となつてゐる。「親和の力」と云ふ意味だ。一八〇九年に出た。作の主要人物は四人。即ち金持の貴族のエドワルド、彼の妻シャーロット、シャーロットの姪のフアイリエ、エドワルドの友人で名は出てゐないが大尉となつてゐる男。以上四人がエドワルドの田舎の邸宅で一所になつてオテリエはエドワルドを戀しシャーロットは大尉を戀する。然しシャーロットは貞操を破ることはない。オテリエは情に打負け死を以て自分の罪を償ふてゐる。此の作物は親和力は危険と悲哀とを伴ふ恐れがあることを描かんと企てたものらしい。全編を通じて性格描寫と情緒とは讀者に非常な興味を與へる。

ゲーテが「親和の力」と「ウイルヘルム・マイスタ」とを出さぬずつと以前に、英國では既に新

しい形の小説が發展してゐて、外部的構想が又始まつてゐた。此の新しい小説とは神秘小説の事

十八世紀後半の である。ウォールポウル(Walpole)の『オトランドウ城』(“Castle of Otranto”)

小説の外部的構想をもつて始まつたのである。初期の時代の手法に立ち返りて、ウォールポウルは、作物中の序文中に説明してゐる如く、不思議の事を書いて讀者の興味を引かんとした。彼は普通の人生の中に超自然の事を紹介した。彼が書いてゐる不思議な事は、現今の我々には子供だまして馬鹿らしく思はれる。その不思議な事は、故意に道化けて書いたものではあるまいかと疑はざるを得ない。例へば、悲劇的な瞬間を描寫する場所に、或る彫像の鼻から血が三滴流れ落ちた等と云ふやうな事が書いてある。然し少く共此の作物は、彼の當時には眞面目に思はれたもので、廣く成功を博し一派を爲してゐたものである。さて此の作物には一つの新しい形がある。そして、これより以前の成功せる作物と同様に、明かに構想を有してゐる。悪漢マンフレド(Manfred)が兇惡な罪惡を犯して或る男爵の領地を奪取り、世嗣たるべき男爵を放逐して仕舞ふ。放逐されし男爵の祖先が亡靈となりて男爵一族を守護し、マンフレドの一味を絶へず苦しめ、マンフレドの罪なき娘達は不安な月日を送る。亡靈に苦しめられて遂にマンフレド死す。放逐されし男爵はマン

フレドの娘の一人と戀仲になり、再び元通り領地を回復し正常な世嗣となる。

若し近代の讀者が、こんな事は子供だましのやうな事だと云つても、其人に反對するものは一人もない。然し少く共此の作物には、明白な骨子と連續的の筋がある。加之、此の作物は、或る批評家も云つた如く殆ど探偵小説である。大團圓に至るまでの話の展開の具合は、巧妙な探偵家の話でも聞いてゐるやうである。但し吾人が此物を探偵物語と見るならば、不幸にして此の作物は、動もすれば讀者の反逆的な同情心がマンフレドに向きはせぬかと云ふ書き方がしてある。

神祕小説に於て、ウォールポウルの後最も有名なるはラドクリフ夫人(Mrs. Radcliffe)であつた。彼女の小説は悉く皆、外部的構想の上乗なものであつた。殆ど超人的な悪漢が同じく超人的な女主人公を殺さんとしてゐる。女主人公は種々な苛責苦惱や沈痛な恐怖をうけたのち悪漢の手より逃れ出で、遂に隱氣な詩的な主人公によりて救はれる。

此の種の小説の形は本書では簡単に切りあげやう。恐怖の物語は、著しい外部的の構想を開巻早々から巻末まで有してゐる。話の筋に強く力を感じて、或る一定の目的に向つてドンドン進んでゆく。作物には常に悪漢があり、悲劇的の秘密があり、悪漢は必ず撃退され、秘密は必ず正體

を顯はし、一切の邪魔物を一掃して仕舞ふと話は既に最後の章に達してゐる。もうめくる可き頁がない。此の點はスモレトの作物は異つて居るのであつて、スモレトは更らに新らたに筆を起して書き續けてゆくのである。例へばさきに一寸述べた『ロデリク・ランダム』中には

『私の結婚式の計畫がぶつこはされたので、私は自分の才能は幸福を追ふやうな事には不向だと思ひまして、いつそ政府に雇はれやうと考を向けて仕舞ました。』

と書いて、話が新たに書き續けられてゐる。神祕小説に於ては、構想は主人公より強くなつた。

此の事は當時の一般の小説の形には、そう明白にあてはまる譯ではなかつた。當時一般の小説は、悪漢や罪惡を主題とする事は少なかつた。例へば、マケンジー(Mackenzie)の『情の人』(Man of Feeling)は小説ではあるが、悪漢や罪惡を主題とせぬ點が人氣を博してゐたのである。此の「蘇格蘭のアディソン」(譯者註。マケンジーの事也。彼はスコットランドの生れ也。作風が英の Joseph Addison に似たればなり。)の此の作物には、まるで構想がない。主人公たる情の人ハーレー(Harley)は、連絡のない種々の場面の中にさまよふて、場面毎に繊弱な思に沈んでゐる。此の作物に筋がない事は、これより一世紀以前の「英國のアディソン」(譯者註。Joseph Addison のこと)。

一六七二—一七四九の不正確な論文中に筋がないのと同様である。

英國に於ける女流作家の勢力だけで、實に構想は今一度明白に輪廓づけられた。此の事は恐らくは、女主人公を中心とする小説は男主人公を中心とする小説よりは遙かに統一があつたと云ふ別な云ひ方に過ぎない。此の時期の若い婦人には、(少く共小説に表はれたる所に従へば)人生に只一つの目的たる結婚があつた。若い婦人が自分の情愛を他に移すと云ふ事は正しい事と考へられなかつたからして、當然の結果として自分の極まつてゐる配偶者が作物中の最初に現はれねばならなかつた。次に作物の完結せぬ中に、戀人同志が容易に結婚の出来ぬやうに種々の困難な事を書入れねばならなかつた。そして此の事は、神祕小説が祕密の曝露を必ず書いてゐる如く、結婚か乃至は情人に捨てられて死するか何れかによつて作物の終りを告げた。

バーニ女史 (Miss Burney) の小説は、此の事を甚だ明白に示してゐる。バーニ女史以下の女流作家の多くも亦同様である。エヂワース女史 (Edgeworth) すら初めの中は、小供向の道德の話や、愛蘭の生活を書いた寧ろ構想のない作物を出してゐたが、間もなく美しい娘や人氣向のものを書く一般の時代思潮に捲き込まれた。明かに吾人はこゝに、人間の魂の非常な危機をあてにし

ないで、事件や情況をあてにしてゐる外部的構想を見るのである。勿論讀者を引きつけるには何かの刺戟が必要であつた。そして恐怖小説の、讀んで面白いが戦慄するやうな幽霊の話などは、彼等女流作家の好まない事であつたからして、若い女主人公は何か稍々人を驚かすやうな經驗をうけねばならなかつた。彼等女流作家の作物は、第三卷の終りに達する迄には、大低妻女を誘拐する話や、駢落の話や、或はもつと驚くべき事が書いてある。然し人生の凡庸生活から少し離れてゐる是等の話は、作物中に於ても世間に於ても彼等被害者によりて眞面目に考へられなかつたのであつて、従つてフィールディングの「クラリサ・ハアローウ」に於けるが如き集中された古典的な悲劇を含んでゐない。

以上の如く十八世紀後半の小説は、事件や刺戟をかく外部的構想の時代であることは特記しておく可きである。何となれば、此の時代風潮は、有名なるジェイン・オーステン女史 (Jane Austen) によつて故らに無視されたからである。女史は六つの小説を出してゐるが、何れも皆、彼女以前の作物とは全然似てゐないし亦、彼女以後の作物とも全然異つてゐるもの許りである。作物は何

オーステン女史の作物　　れも、皆明白な構想があつて、單純で且つ纏つてゐる。女主人公の情事

に於ける構想の單純

が、初めから終りまで一題目として着々と歩を進めて書いてある。しかも何等讀者を驚かすやうな事は書いてない。戀人同志は平々凡々の事件の裡を進み、叫びもなければ唸りもなく、從來の作家が喜んで書いたやうな咒言もなく、又堂々と反抗するやうな事も書いてない。私はフィールディングの作物は有り、そうもない事を取扱つたと云つたが、女史の作物は有り、そ、う、な、事、を、取、扱、つ、た、上、乗、の、物、と、呼、ば、う。彼女の作物に於ては、全體の興味は、戀人同志お互の感情と關係の展開から生ずる。作物の構想は、單純で自然で丸味を帯びて、漸層的で、且つ人をして尤と思はしめる。構想の單純なるにも係はらず、彼女の作物は讀者の興味を引きつける。且つ構想の完全なることも決して機械的のものとは思はれない。

オーステンの作物に關する以上溢美の言は彼女の處女作『センス・エンド・センシビリティ』(“Sense and sensibility”)に對しては幾分例外と見ねばななぬ。此の處女作には作風が機械的の組立で、人物の動作も尤と思はれぬ點がある。

かく突然と何の豫告もなく、新しい一天才オーステン女史が、既に小説の構想に新しい有力なものを有してゐて、何等人を驚かすやうな事を書かすして、普通人間生活の簡単な事に注意を向け、

普通の人間の情緒と自然の途と變化とを書いた。かゝる根本的基礎の改革は直接の摸倣者を持つらしくなかつた。

オーステン女史時代の女流作家は、一流の作家、例へばスーザン・フアリア(Susan Fairfax)とかヲウピ夫人(Mrs. Opie)の如きでも、オーステン女史の文體を捕へ思想を摸倣して凡ての點を手本としてゐたが、彼女の構想の單純と云ふ點を悟ることが出来なかつた。此の事は注目すべき興味ある事だ。彼等作家は、感激・激發なくしては作物を想像する事が出来なかつた。

スコト(Scott)は、大天才であつたし且つ廣く自分より以前の凡ての作物の價値を銳利に寛大に觀察し、特にオーステン女史の作物に對しては溢美の批評を惜まなかつた人であつたが、御當人のスコトですら、自分の小説に於ては、刺戟と誇張とを主張した。技巧家としてはスコトは、自スコトの分の作物の誇張なることを自ら嘲り、「徒らに聲を大にして咆哮の聲ある文體」と云影響つた。然し實際家としては、彼は世間が欲してゐると信じたものを世間に與へたのである。

此の誇張にして稍冗漫と云ふ點を除けば、スコトの小説は概して戲曲的に一致してゐる構想を